

令和 4 年度 活動報告書

熊本県地域医療支援機構 / 熊本大学病院 地域医療支援センター
熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座
地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座
感染症対応実践学寄附講座

令和 4 年度 活動報告書

熊本県地域医療支援機構 / 熊本大学病院 地域医療支援センター
熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座
地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座
感染症対応実践学寄附講座



もくじ

I はじめに

1. 熊本県地域医療支援機構理事長あいさつ 1

2. 地域医療支援センター長あいさつ 2

3. スタッフ一覧 3

2 熊本県地域医療支援機構
(熊本大学病院 地域医療支援センター)

1. 活動概要 4

2. 活動報告

Ⅰ. 地域医療を志す医学生及び地域医療に従事する医師の
キャリア形成支援 5

Ⅱ. 地域の医療提供体制の確保に向けた支援 8

Ⅲ. 県内外の医師、医学生等からの相談対応及び求人に関すること 9

Ⅳ. その他 10

Ⅴ. 女性医師キャリア支援 15

3 地域医療・総合診療実践学寄附講座

1. 活動概要 20

2. 年間活動実績 20

3. 活動報告

Ⅰ. 地域医療支援（診療支援） 21

Ⅱ. 調査・研究 21

Ⅲ. 教育活動 22

Ⅳ. 専門医資格修得後のキャリア支援について 30

Ⅴ. 講演会 31

Ⅵ. 総合診療医育成のためのPR活動 32

4. 専攻医の声 32

4 教育拠点

＜くまもと県北教育拠点＞

1. 活動概要 34

2. 年間活動実績 34

3. 活動報告

Ⅰ. 教育活動 35

Ⅱ. 診療 37

Ⅲ. 年間診療報告 37

＜河浦教育拠点＞

1. 活動概要 38

2. 年間活動実績 38

3. 活動報告

Ⅰ. 教育活動 38

Ⅱ. 診療 38

Ⅲ. 年間診療報告 38

Ⅳ. セミナー・勉強会等 39

5 熊本県医師修学資金貸与制度

1. 地域医療ゼミ 40

2. 卒業生の声 42



I はじめに

1. 熊本県地域医療支援機構理事長・病院長あいさつ



熊本県地域医療支援機構 理事長
熊本大学病院 病院長

馬 場 秀 夫

皆様方には、平素より熊本県地域医療支援機構、県の寄附による、「地域医療・総合診療実践学寄附講座」及び「地域医療連携ネットワーク寄附講座」の取り組みに、多大なご支援とご協力をいただき、深く感謝申し上げます。この度、令和4年度の活動報告書を作成致しましたので、ご一読いただければ幸いに存じます。

熊本県地域医療支援機構は、平成25年12月に設置され9年目が経過しました。「地域医療・総合診療実践学寄附講座」は、設置から7年を経過しました。また、「地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座」も、設置から4年が経過しました。そして、新興感染症、院内感染予防などに対応可能な感染症専門医の育成、メディカルスタッフへのリカレント教育を目的として、今年度から新たに「感染症対応実践学寄附講座」を設置し事業を展開しているところです。

さて、熊本県の医師数は全国的に見て医師多数県とよく言われますが、地域ごとの内訳を見ると熊本市内に医師の集中がみられ、熊本市以外の地域での医師不足はまだまだ解消されておらず、むしろ全国平均よりも少ない状況にあります。我々はこれから、この医師偏在の状況を解消するための取り組みを続けていく必要があります。特に地域においては深刻な人口減少と高齢化に加え、昨今のコロナ渦の中、地域住民に適切な医療サービスを提供するために各医療機関は非常に苦勞されている実情があります。

地域における持続的かつ適正な医療提供体制を確保するために、医師を派遣する立場の熊本大学病院と、医師の地域偏在の解消のための業務を実施する熊本県地域医療支援機構の両者の長として、熊本県と連携して取り組みを進める必要があることを、就任以来一貫して強く心に止めているところです。

新型コロナの猛威は4年度も引き続き、地域医療支援機構業務、寄附講座業務についても昨年度同様に当初の計画を中止、変更、縮小といった決断をせざるを得ない状況もあり、十分な取り組みが出来なかった面もありました。しかしながらオンライン配信等々の工夫で、事業の歩みを止めることなく、できることから一つ一つ着実に取り組んでまいりました。

本県の地域医療を取巻く状況が厳しい中、「熊本県地域医療支援機構」、「地域医療・総合診療実践学寄附講座」、「地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座」が連携して、それぞれの役割を果たしながら、(1) 地域医療を志す医学生や地域医療に従事する医師のキャリア形成支援、(2) 地域の医療提供体制の確保に向けた支援、(3) 学生に関する地域医療マインドの涵養、(4) 総合診療医の育成、(5) 地域医療拠点病院を核とする圏域の医療機能の向上に向けた連携ネットワーク体制の構築、(6) 新専門医制度における修学資金貸与医師等のキャリア形成の支援等について、継続的に更に推進していくこととしています。また、感染症対応につても新たな寄附講座の設置により、今回の新型コロナの経験を踏まえて、医師の育成・教育活動を展開しております。

今後とも熊本県、医師会、市町村並びに地域医療関係者などの関係諸団体との連携をさらに強化し、県内各地のニーズに沿った地域医療が提供されるようなお一層努力してまいりますので、変わらぬご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

(令和5年3月吉日)

6 地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座

1. 活動概要 45
2. 地域医療の現状分析と考察 45
3. 教員等一覧 45
4. 事業報告 46
5. 派遣先医療機関データ
 - I. 当該外来患者数等のグラフデータ
 - II. くまもとメディカルネットワーク (KMN) グラフデータ

7 感染症対応実践学寄附講座

1. 活動概要 100
 - I. 寄附講座設置概要
 - II. 熊本県内における感染症専門医及び施設認定の状況
2. 年間活動実績 103
3. 活動報告 104

8 業績

1. 地域医療支援センター 108
2. 地域医療・総合診療実践学寄附講座 109
3. 教育拠点（くまもと県北拠点／河浦拠点） 110
4. 総合診療科医局員・専攻医（総合診療専門研修プログラム） 110

9 おわりに

1. 教員から 111
2. 事務から 118
3. あとがき 120

2. 地域医療支援センター長あいさつ



熊本大学病院 地域医療支援センター長
熊本大学病院 総合診療科 教授

松 井 邦 彦

令和4年度の、熊本大学病院地域医療支援センターの報告書をお届けします。ご高覧いただければ幸いです。

新型コロナウイルス感染症の流行がはじまり、早いものでおよそ3年が経過しました。大小の流行の波を繰り返し、私たちの日常生活の全ての面に多大な影響をもたらしました。これを書いている今、一時の厳しい状況は、ずいぶん昔のことであったような気がします。医療の現場も、大変な時期を乗り越え、通常に戻りつつあるようです。病院外ではマスクの着用も緩められるようになりましたが、発熱の患者さんがいらっしやと、やはり緊張が走ります。様々な要因が発熱をきたし得ますが、まずは新型コロナウイルス感染症の除外が浮かぶようになりました。

私たちの大きな使命の一つに、熊本県医師修学資金貸与制度(いわゆる地域枠)による、医学生や医師のキャリア支援があります。早いものでこの制度の第一期生の先生が、地域勤務の義務年限をほぼ終了するまでになりました。コロナ禍の中においても、県内地域の施設で働かれる先生方の数は、確実に増えつつあります。本制度が開始され、ここに至るまでに長い時間がかかったのは当初の予定通りですが、最近は、地域枠医師の活躍への期待が以前にもまして大きくなっているのを感じています。今後もこのシステムを維持、発展させることで、熊本県内の地域医療の質向上へ貢献することを、確信しています。

県内地域での医師の偏在は、依然として大きな問題です。地域枠学生、医師の支援をさせていただく我々としては、当初の手探りであった状況から、対象者の具体的なニーズを察知し、安心して勉学や勤務に励んでいただくことが出来るよう、可能な限りの対応を行ってきたと自負しています。対象者が増えることは喜ばしい一方で、同時に様々な形、内容の支援が必要となってきました。我々は、一つ一つの問題に丁寧に対応していく所存です。

また熊大病院地域医療支援センターでは、熊本県の寄附講座である、地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座や感染症対応実践学寄附講座に所属する先生方の支援も、併せて行っています。これについては、私たちに期待されている役割を、十分に果たしていると言えるまでに、未だ至っていないのが現状です。今後の課題として、より積極的な取り組みが必要であると感じています。

最後に、いつも私たちへご支援、ご指導をいただいている熊本県医療政策課の皆様方に、感謝を申し上げます。また県内地域の医療機関の皆様方、県医師会の先生方、そして最後に熊本大学病院の各診療科の先生方には、今後ともご理解とご支援を賜りますよう、よろしく申し上げます。令和5年度は、この数年間、コロナ禍のために出来なかったことが出来るようになり、ますます忙しくなりそうです。

3. スタッフ一覧

◆ 熊本県地域医療支援機構(熊本大学病院 地域医療支援センター)

松井 邦彦	地域医療支援センター長／総合診療科 教授
荒木 智	地域医療センター副センター長(地域医療・総合診療実践学寄附講座 特任准教授)
後藤 理英子	特任助教／糖尿病・代謝内分泌内科
高柳 宏史	特任助教／総合診療科
古賀 義規	客員研究員(御所浦診療所 所長)
片岡 恵一郎	客員研究員(小国公立病院 病院事業管理者)
松本 朋樹	客員研究員(医療法人社団孔和会 松本内科・眼科 理事長)
松岡 大智	地域医療支援コーディネーター
若杉 秀作	地域医療支援コーディネーター
高塚 貴子	女性医師復職支援コーディネーター
尾方 千穂	事務補佐員

◆ 熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座

荒木 智	特任准教授／総合診療科
佐土原 道人	特任助教／総合診療科
北村 泰斗	特任助教／総合診療科
山口 香	事務補佐員
山並 美緒	事務補佐員

◆ くまもと県北教育拠点(くまもと県北病院)

田宮 貞弘	熊本大学非常勤講師／総合診療科
小山 耕太	熊本大学非常勤講師／総合診療科
中村 孝典	特任助教／総合診療科

◆ 河浦教育拠点(天草市立河浦病院)

鶴田 真三	特任助教／総合診療科
-------	------------

◆ 熊本大学病院総合診療科医局員

武末 真希子	松田 圭史	空田 健一
平賀 円	永田 洋介	久保崎 順子

◆ 専攻医(熊本大学病院総合診療専門研修プログラム)

早川 香菜美	後期研修医5年目
下地 徹	後期研修医4年目
本田 宏介	後期研修医3年目
松岡 隼平	後期研修医2年目
西富 友哉	後期研修医1年目

2 熊本県地域医療支援機構 (熊本大学病院 地域医療支援センター)

1. 活動概要

熊本県地域医療支援機構は、熊本県と県から機構業務の一部を委託された熊本大学病院が協力して運営を行っています。当機構では、本県における医師の地域偏在を解消することを目的として、県内における医師不足の状況等を把握・分析し、将来地域で勤務する修学資金貸与学生等及び地域医療に従事する医師のキャリア形成支援と一体的に、医師不足医療機関の医師を確保するため、様々な支援事業を実施しております。令和4年度は、昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの感染拡大により、多くの事業において活動の縮小を余儀なくされた面もありました。しかしながら、地域の医療機関で勤務する修学資金貸与医師が確実に増加していく中、地域で安心して勤務しながらキャリアを形成できるよう、修学資金貸与学生・医師一人一人に対するきめ細やかな支援を行い、熊本大学病院が県と協力し、着実な事業の実施に努めてまいりました。具体的には、修学資金貸与医師・学生一人一人に対する面談や相談業務のほか講演会等の開催や医療機関における地域医療への取り組みに関する広報関係の充実などを図ってまいりました。

また、女性医師の増加や育児に携わる世代の修学資金貸与医師の増加に伴い、出産子育てと仕事の両立、義務履行との関係等に対する関心が高まってきたことから、育児支援についてもさらなる充実に努めているところです。

さらに、第7次熊本県保健医療計画(平成30年度～令和5年度)や熊本県地域医療構想(平成29年3月策定)の実効性を高めるため、熊本県地域医療連携ネットワークによる地域の安定的な医療提供体制の構築に向け、率先した取り組みを進める自治体病院等への支援など、地域において必要とされる医療の確保にも努めてまいりました。

【主な取り組み】

- ① キャリア形成プログラムに基づく修学資金貸与学生及び医師への面談等によるきめ細やかな支援（一人ひとりの状況に応じた助言、相談対応等）
- ② キャリア形成プログラムに基づく修学資金貸与医師に係る派遣計画案の作成及び負担軽減策の実施
- ③ 地域医療を志す医学生及び地域医療に従事する医師を支援する制度の運営
- ④ 熊本県医師修学資金貸与条例に規定する知事指定病院等における医師不足の状況等に関する調査・分析、総合診療医など地域で必要とされる医師に関する情報提供等
- ⑤ 医師が不足する医療機関への診療支援・研修医等教育支援
- ⑥ 熊本県地域医療連携ネットワークの構築に向けた全体調整
- ⑦ 女性医師のキャリア支援（就業継続及び復職支援等）
- ⑧ 地域医療支援機構講演会開催
- ⑨ 地域医療支援機構広報誌「COCODE！（ココデ）」の発行

2. 活動報告

① 地域医療を志す医学生及び地域医療に従事する医師のキャリア形成支援

1 キャリア形成プログラムに基づく修学資金貸与学生及び医師へのきめ細やかな支援（一人一人の状況に応じた助言、相談対応等）

医師修学資金貸与医師及び卒業生については、56名全員を対象に令和4年7月～8月に面談を実施し、キャリア形成と義務履行の両立に関する本人の考えを聞き取り、本人の経験年数に応じて、必要なアドバイスをを行いました。

医師修学資金貸与学生については、32名全員を対象に令和4年6月に面談を実施し、将来の希望や学生生活の状況等を聞き取り、生活面、学習面等個人ごとに必要な助言を行いました。また、6年生に対しては、将来のキャリアプラン等を聞き取り、進路について個別具体的なアドバイスをを行いました。医師・学生の抱える案件に応じて、複数回の面談を行い課題解決に向けた支援をきめ細やかに実施しました。

また、修学資金貸与医師が勤務する病院等に対して本人のキャリア形成と義務の履行の両立が図られるよう協力を要請するとともに新たに専門研修プログラムに従事する医師が所属する基幹施設の診療科との情報共有を図るなど、関係機関との連携によりキャリア支援を進めることに努めています。

2 キャリア形成プログラムに基づく修学資金貸与医師に係る派遣計画案の作成及び負担軽減策の実施

修学資金貸与医師の翌年度の派遣先については、「熊本県医師修学資金貸与医師キャリア形成プログラム」において、県内各地域における医師不足の状況や本人の意向、研修先・勤務先の状況等を踏まえ、県及び地域医療支援機構において勤務先を調整した後、熊本県地域医療対策協議会で協議・決定することとされており、当機構としては、この基本的な考え方を踏まえて、翌年度の修学資金貸与医師の配置調整案を作成しました。

案の作成に先立って、5月に県医療政策課から大学病院の全診療科に対して、修学資金貸与医師の派遣人事説明会を実施し、具体的に勤務する派遣先医療機関については、当該医師が所属する医局と県及び地域医療支援機構で調整の上、熊本県地域医療対策協議会の協議を経て決定することを再度確認し、キャリア支援と義務履行の両立を図るよう連携を密にした取り組みを進めています。

令和5年度は、医師業務3年目以上の修学資金貸与医師46名のうち、知事指定病院等での勤務者34名と、令和4年度(26名)より8名増加しました。また、知事指定病院等勤務者のうち18名が、第2グループ、第3グループの病院で勤務することとなっています。

なお、修学資金貸与制度創設以来初めてとなる地域枠からの離脱(県の同意のない離脱)事案が発生しました。

新しいキャリア支援策として、専門研修に進む卒業3年目以降の貸与医師等に対しては、専門研修プログラム従事前に知事指定病院の第2グループの病院で総合診療「特別研修プログラム」に参加して義務履行を優先できる体制も構築して、キャリア形成と義務履行の両立を図るよう支援の充実に努めています。

3 地域医療を志す医学生及び地域医療に従事する医師を支援する制度の運営

貸与医師及び貸与学生全員に面談時に貸与制度及びキャリア形成プログラムについて説明して周知するとともに、出産・子育て支援制度の活用と義務年限の取扱いについて周知を図るため、医療政策課担当者からの説明会を実施しました。

医師修学資金貸与医師のキャリア形成支援として「地域医療を志す医学生及び地域医療に従事する医師を支援する制度」への登録を推進しました。

また、修学資金貸与者面談・地域医療ゼミ等を活用して、熊本県修学資金貸与制度、キャリア形成プログラムについて、貸与医師・学生に繰り返し説明し、周知に努めています。

【熊本県医師修学資金貸与人数一覧（2023年3月現在）】						（単位：人）	
区分	年数・学年	地域枠	一般枠	県外枠	計	男	女
後期研修 /地域勤務	8年目		3		3	2	1
	7年目	4	1		5	3	2
	6年目	4	4		8	7	1
	5年目	5	2		7	4	3
	4年目	5	4		9	7	2
	3年目	3	6		9	8	1
	小計	21	20	0	41	31	10
臨床研修	2年目	5			5	3	2
	1年目	5	3		8	5	3
	小計	10	3	0	13	8	5
在学 生	6年生	7	1	1	9	4	5
	5年生	6	1		7	1	6
	4年生	5		1	6	2	4
	3年生	5			5	4	1
	2年生	5			5	2	3
	1年生	1			1	1	
	小計	29	2	2	33	14	19
合 計		60	25	2	87	53	34

60.9%39.1%

4 熊本県医師修学資金貸与条例に規定する知事指定病院等における医師不足の状況等に関する調査・分析、総合診療医など地域で必要とされる医師に関する情報提供等

今年度は、第2、第3グループの知事指定病院調査を実施。診療科ごとの常勤医師の不足状況、今後さらに派遣数の増加が見込まれる修学資金貸与医師の受け入れ可能な診療科について、非常勤職員の受け入れ状況等、宿日直体制について、出産・育児に関する支援体制の整備状況と出産・育児に関する休暇等制度の整備状況について調査を実施しました。
調査結果の概要については以下の通りです。

(1) 医師の充足状況

① 診療科別常勤医師の不足状況

- ア 今回の調査対象となった知事指定病院等第2グループ、第3グループの医療機関の大半の医療機関がいずれかの診療科で常勤医師が不足すると回答しました。
- イ 特に、総合診療科あるいは総合内科・一般内科、整形外科の医師が不足するとの回答が多くありました。
- ウ 常勤医師の不足が見込まれる理由としては、常勤医師の退職補充、地域社会の急激な高齢化に伴う疾患の増加、地域包括ケア、在宅医療の増加等による患者数の増加等があげられます。

② 非常勤医師の受け入れについて

- ・非常勤医師については、医療機関の標榜する診療科で週1日以上は受け入れている状況です。

(2) 宿日直体制について

- 宿直の勤務体制は、多くの医療機関が、応援を依頼。主な依頼先としては、熊本大学病院、熊本赤十字病院があげられます。

(3) 出産・子育てにかかる医療機関の支援制度、体制等の運用状況

- 妊娠中、出産後の勤務負担軽減策としては、当直免除、時間外勤務免除を制度化し、出産後の時間外勤務免除等の期間は、多くの医療機関で小学校入学時までの適用となっています。
- 出産・育児等にかかる休暇制度については、医療機関により若干の相違はあるものの、産前産後休暇、育児休業制度、育児短時間勤務制度等については、きちんと整備されており、出産・育児に関する支援体制がかなり構築されているという状況です。

5 その他

- 地域医療ゼミの時間を活用して、修学資金貸与学生・医師及び自治医大学生・義務履行中の自治医大卒業医師に対して、知事指定病院第2グループの病院及び常勤の医師が勤務する天草地域の離島の2つの公立診療所から、施設の状況や地域の魅力等について説明する機会を設け、第2グループの病院等に対する理解の深化を図るとともに、貸与者自身が義務履行と将来のキャリア形成の両立について考える一助としました。なお、説明会の模様については、録画した動画を地域医療支援機構のホームページ上で1年間閲覧可能としており、令和4年度3月現在、各施設視聴合計177回ほどの再生回数を記録しています。
- 地域医療・総合診療実践学寄附講座との連携で、総合診療科の若手医師に対してテレビ会議システム等を利用した合同カンファレンスやレジデントデイを実施し総合診療医としての能力向上に必要な助言、指導を行っています。
- 「今日の臨床サポート」及び「プロシージャーズ・コンサルツ」の医療情報を提供するためのIDパスワードを医師修学資金貸与学生・医師、自治医科大学学生・義務履行中の卒業医師等に付与し、必要に応じて様々な医療情報を入手できる体制を充実させています。

【活用実績】(令和5年度2月現在)

○今日の臨床サポート：ユーザー登録数	225人
全ログイン件数	5,019件
全アクセス件数	23,316件
○プロシージャーズ・コンサルツ：ユーザー登録数	212人
全ログイン件数	97件

Ⅱ 地域の医療提供体制の確保に向けた支援

1 外来診療支援

熊本大学病院においては「総合診療科」の外来診療を月曜日から金曜日まで実施し、学外において地域医療支援機構所属の教員(医師)が複数の地域の医療施設で下表のとおり非常勤の医師として診療支援を行いました。

大学病院・総合診療外来

月	火	水	木	金
松田	松井	高柳	佐土原	北村

外来診療支援（医師が不足する医療機関への支援）

専任医師	支援内容及び支援先医療機関	
後藤	R4. 4. 1～R5. 3. 31	くまもと県北病院（週 1 回）
	R4. 4. 1～R5. 3. 31	宇城市民病院（週 1 回）
高柳	R4. 4. 1～R5. 3. 31	上天草総合病院（週 1 回）
	R4. 4. 1～R5. 3. 31	天草市立御所浦診療所（週 1 回）

2 テレビ会議システムを活用した遠隔診療・教育支援

熊本県の総合診療専門医育成支援整備事業の計画に基づく県内の公的医療機関等にテレビ会議システム配備する事業が完了したことを受け、当機構としてはテレビ会議システムの更なる活用に向けた取り組みを進めています。今年度もテレビ会議システムを活用した合同カンファレンスの実施や、総合診療科の専攻医の指導や総合診療の特別実習を行った学生の実習指導を実施するなど支援の取り組みに努めました。

テレビ会議システムの配備状況

設置年度	設置場所
平成 28 年度	御所浦診療所、湯島へき地診療所、そよう病院
平成 29 年度	小国公立病院、公立多良木病院、上天草総合病院
平成 30 年度	河浦病院、阿蘇医療センター、人吉医療センター
令和元年度	栖本病院、新和病院
令和 2 年度	国保水俣市立総合医療センター

3 熊本県地域医療連携ネットワークの構築に向けた全体調整

熊本県地域医療連携ネットワークの構築に向けては、地域医療支援機構と地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座が連携し、県からの医師派遣要請に基づき本院の各診療科所属の医師を地域の医療機関に派遣し、地域医療提供体制の充実を図っています。

令和 4 年度は、当該寄附講座において12の地域医療拠点病院に常勤医師を派遣し、13の地域医療拠点病院に週 1 回または週 2 回、特任教員(医師)を派遣して、地域の中核的な病院の機能強化と地域の医療機関間での役割分担・連携を行う体制の構築に寄与しています。

なお、令和 5 年度については、各診療科と調整を行い、12の地域拠点病院の11の診療科に25名を派遣し、15の病院に週 1 回から 2 回、特任教員(医師)を合わせて11の診療科に派遣することとして調整したところです。

4 地域の医療機関に対する助言や医療機関との連携、調整

- 地域医療・総合診療実践学寄附講座との連携により、くまもと県北病院、天草市立河浦病院に教育拠点を設置し、地域で必要とされる医師の育成・教育機能向上を図るとともに、当該講座から派遣した教員が、病院での日々の診療を通して、地域で求められる医療に適切に対応するための病院の活動に貢献しています。
- 当センターの教員が、診療支援先の病院において、医療提供体制の課題等について情報を共有するとともに、意見交換を行い地域に求められる医療提供の充実に努めています。

5 勤務環境改善支援センターとの相互連携

- 地域医療支援機構としては、キャリア形成プログラムの充実や研修環境・勤務負担軽減の改善等を図るため、勤務環境改善支援センターとの相互連携に努めています。具体的には、以下のような取り組みを進めています。
- 毎月1回実施している県医療政策課と地域医療支援機構担当者会議に勤務環境改善支援センターのセンター長、統括アドバイザーが出席。地域医療行政に関する情報共有を図っています。
- 勤務環境改善支援センターの会議(センター会議、運営協議会)に、当方からオブザーバーとして出席し、県内病院の勤務環境改善状況や労働行政の動きに関しても情報共有を図っています。
- 当機構が実施する知事指定病院調査についても、医療勤務環境改善支援センターに調査項目等に関し

Ⅲ 県内外の医師、医学生等からの相談対応及び求人に関すること

1 県内外の医師、医学生等からの相談窓口の設置、面談対応

- 地域医療支援センターに相談窓口を設置。今年度は、主に貸与医師からのキャリア形成と義務履行の両立、貸与制度における義務履行の在り方に関する相談に対応しています。
- 地域医療支援機構のホームページ上で、医師の求人情報サイトにリンクを張って、関係者が、いつでも自分で求人情報を確認できる環境を整えており、当機構あての県のサイトの情報を見た県外の医師からの問い合わせに対応しています。

2 県内外医師へのリクルート活動

- オンラインで開催される全国会議等で、総合診療専門研修プログラム紹介のPRポスター・チラシを掲載するなど、コロナ禍の中でもできることを工夫して、求人活動を行いました。
- 今年度横浜市中で 3 年ぶりに現地開催となった日本プライマリケア連合学会学術集会において、熊本県地域医療支援機構の取り組みや熊本大学病院総診プログラム紹介のポスター、パンフレット等を出展しました。
(学術大会：令和 4 年 6 月11日～12日)

3 熊本県地域臨床実習支援事業の実施

県外に在住している熊本県出身の医学生や、将来熊本県で従事することを考えている医学生等が、熊本県における地域医療の現状を学ぶことを支援することにより、将来の医師偏在化の是正や医師確保につなげることを目的として熊本県地域医療臨床実習支援事業(肥後ふるさと医学生実習支援事業)を平成 30年度より実施しておりましたが、今年度も新型コロナウイルス感染拡大防止のため、実施を見送ることとなりました。

【募集対象者】

熊本県外の大学に在学する地域医療に関心を有する医学部学生

【募集人数】

5名以内

【事業実施期間】

例年6月から翌年2月の間で実施

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため実施を見送りました。

【実習期間及び実習内容】

実習期間：原則として1週間以内(最低でも2日以上)

実習内容：診療参加、診療見学等

【実習先】

知事指定病院等のうち29の医療機関

【実習結果報告】

実習希望者は、実習終了後2週間以内に報告書を機構に提出

【事業の周知】

機構は全国の医学系大学などに本事業の周知などを図る



Ⅳ その他

1 熊本県地域医療支援機構理事会の運営

第15回熊本県地域医療支援機構理事会を令和5年2月15日リモート形式(ZOOM)により実施しました。

以下の事項について協議され、承認されました。

【協議事項】

- 令和4年度(2022年度)事業実績について
- 令和5年度(2023年度)事業計画について
- 令和5年度熊本県医師修学資金貸与医師配置調整案について

【報告事項】

熊本県地域医療連携ネットワーク事業について

2 熊本県地域医療支援機構講演会

◆ 2023年1月20日(金) 18:30～

令和4年度熊本県地域医療支援機構講演会

対面とリモート併用(いわゆるハイブリット方式)により開催

会場(対面)：熊本大学病院 奥窪記念ホール

講演会のテーマ：「地域医療を支える医療機関の今とこれから」

● 講演開催の趣旨

人口減少・高齢化の進展、労働人口の減少に伴うマンパワーの制約等、地域医療を取り巻く環境は相変わらず厳しい面があり、今後、持続可能な医療提供体制を維持していくためには中長期的な観点に立った取り組みが求められています。このように人口減少や高齢化の深刻化、さらには常に悩まされ続ける医師不足の状況等困難を抱える中、地域医療を支える公立病院で外来診療、訪問診療等に取り組んでおられる医師お二人に講演いただき、本県の医療関係者全体で、これからの地域の医療提供体制の在り方、地域の医療機関の可能性について考える機会とするために、今年度も以下の通り講演会を実施しました。

＜講演内容＞

1 報告：「地域医療の現場から」

講師：熊本大学病院総合診療科 松田圭史 医師

熊本県医師修学資金貸与制度に基づき、知事指定病院で勤務する義務のある医師として、地域の医療機関で勤務する本県医師修学資金貸与医師に本県知事指定病院での勤務状況について、若手医師の感じる「地域医療の現場から」として報告いただきました。

2 講演：「熊本の若手医師へのメッセージ」

ー 徳島南部の小病院における診療、教育、研究、そして災害対策の実践 ー

講師：徳島県美波町国民健康保険 美波病院

本田壮一 病院長

人口減少や高齢化の深刻化、さらには常に悩まされ続ける医師不足等の課題を抱えながら、地域医療を支える公立病院として外来診療、訪問診療等の医療サービスの提供、若手医師の教育、研究活動等長年にわたる取り組み、近い将来発生が予想される南海トラフ巨大地震災害を見据えた災害拠点としての病院の再編等、地域に根差した病院のリーダーとして地域医療の発展に寄与されている病院長の本田壮一先生に講演いただきました。

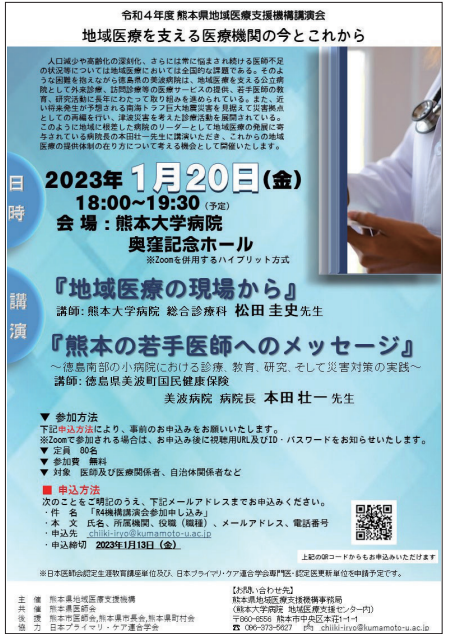
今回の講演には、対面及びリモート合わせて70人が参加され、聴講された皆さんは、これからの地域の医療機関の取り組みやその在り方、地域に勤務実態等に関する講師のお話に熱心に耳を傾けておられました。

3 熊本大学病院総合診療科及び地域医療・総合診療実践学寄附講座、同大学病院総合臨床研修センター、熊本大学医学部、熊本県へき地医療支援機構との連携

- 地域医療ゼミについては機構と寄附講座が連携して、修学資金貸与制度やキャリア形成プログラムの周知や地域医療への理解を深める目的で、貸与学生、自治医大生(テーマによっては、貸与医師にも声をかけて)を対象に実施しています。今年度は、年間11回開催しましたが、新入生歓迎と卒業生追出しゼミを除き、リモートでの実施となりました。
- 新型コロナの感染拡大を受けて、例年機構と寄附講座が連携して実施している夏季地域医療特別実習の3年ぶりの開催を目指して、実習地の自治体となる上天草市や上天草総合病院の協力を得ながら準備を進めてきましたが、新型コロナ感染拡大第7波の影響で中止となりました。

4 知事への表敬訪問

2023年3月28日(火)に、令和4年度卒業の熊本県医師修学資金貸与学生6名が、熊本県庁を訪れ蒲島郁夫知事より激励の言葉をいただきました。また、卒業生からそれぞれ、これから地域医療を担っていく医師としての将来の抱負等を述べました。





女性医師キャリア支援

熊本県女性医師キャリア支援センターでは、①復職支援 ②短時間勤務 ③育児支援 ④メンター制度 ⑤セミナー(啓発活動)を5つの柱にキャリア支援を進めることが重要と考え活動しています。
今年度は以下の事業に取り組みました。

1 相談件数

令和4年度(令和4年4月1日～令和5年3月31日まで)の相談件数は、総計14件(対面4件、電話7件、メール3件)でした。

▼ 相談内容の内訳(延べ相談数) 令和4年4月1日～令和5年3月31 現在

お留守番医師制度について	4件	復職相談	0件
働くこと働き方について	3件	メンター制度について	0件
求人の問い合わせ	9件	同僚・医局の医師について	1件
保育施設について	0件	子育てについて	0件
支援制度についての問い合わせ	0件	社会保障等について	0件
ネットワークづくり	0件	マタニティ白衣・パンツ	0件

今年度は「求人」「お留守番医師制度」「働き方」に関する問い合わせの相談が多い傾向でした。

◆ 復職支援(お留守番医師制度)

週1回(場合によっては月1回も可能)から復職したい方へ「お留守番医師制度」を設けています。

「お留守番医師制度」では、家庭との両立や自身の健康などに不安を抱える方にも復職しやすい環境の協力機関(現在20医療機関)と連携しています。

在宅医療を開始したい医療機関にとっては代診医師の確保に繋がり、地域住民にとっては、かかりつけ医の訪問診療を受けることが可能になるwin-win-winの相互システムです。



▼ お留守番医師制度に加入している医療機関 (2023年3月31日時点)

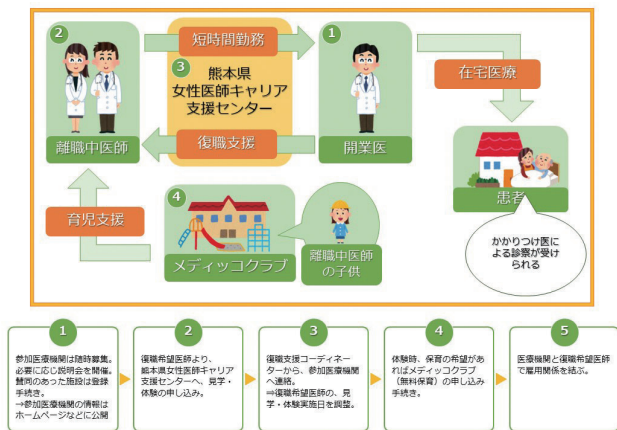
熊本市東区	平山ハートクリニック
熊本市南区	土井内科クリニック
熊本市南区	御幸病院
熊本市北区	清藤クリニック
熊本市北区	なかむらファミリークリニック
阿蘇郡	阿蘇立野病院
菊池市	宮本内科クリニック
荒尾市	西原クリニック
玉名市	ひがし成人・循環器内科クリニック
玉名市	河野医院
上益城郡	益城なかぞのクリニック
上益城郡	谷田病院
上益城郡	山地外科胃腸科医院
宇土市	宇土中央クリニック
水俣市	山田クリニック
宇城市	済生会みすみ病院
熊本市中央区	明午橋内科クリニック
熊本市北区	まえたクリニック
菊池市	菊池都市医師会立病院
宇城市	中村医院

熊本市女性医師キャリア支援センターの復職支援コーディネーターが復職希望者の体験申込みを受けて在宅医療を開始したいドクターと繋ぎ体験日を決めます。体験が上手くいけば当事者同士で3か月更新の契約を結びます。この制度で勤務中には、体験時のみ熊本市医師会保育所「メディッコクラブ」が無料で利用できます。

今年度のお留守番医師制度の体験者はありませんでしたが、平成28年度開始からの利用者は体験のみも合わせて7名です。現在2名の医師が継続されています。

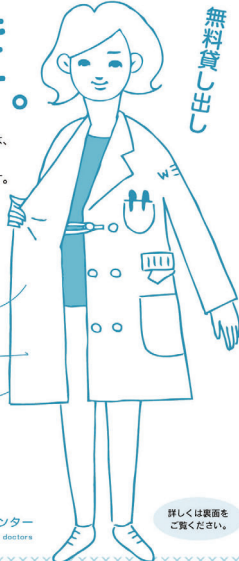
3 マタニティ白衣・マタニティパンツの貸出しサービス

熊本市女性医師キャリア支援センターでは、熊本市内に在住の妊娠中の医師にマタニティ白衣・パンツを無料で貸出ししています。



マタニティ白衣 マタニティパンツ

貸し出しをしています。



無料貸し出し

熊本県女性医師キャリア支援センターでは、妊娠中の医師にマタニティ白衣とマタニティパンツの貸し出しをしています。貸し出しの対象は熊本県内に在住の妊娠中の医師で、非常勤医師や研修医もOKです。

W 熊本県女性医師キャリア支援センター
Kumamoto career support center for women doctors

マタニティ白衣について

- サイズはSとMがあります。
- 胸元、腰元にアジャスターがあり調節ができます。



サイズ	肩丈	バスト	肩幅	袖丈
S	90	112	38	51
M	95	116	39	51

マタニティパンツについて

- サイズはMのみです。
- 腰元にアジャスターがあり調節ができます。
- 色はネイビーのみです。



サイズ	腹囲	ヒップ	股上	股下
M	85~100	102	27	68

これまでに利用された方からは、「お腹が大きくてもボタンをとめて白衣が着られたのが一番良かった。外来の時もありお腹が目立たなかったようでした。」と好評を得ています。

今年度は利用者がありませんでしたが、サービスの周知を図り、妊娠中から気軽に相談できる雰囲気づくりに努め、是非多くの医師にご利用いただきたいと考えています。

4 短時間勤務制度及び復職支援

短時間勤務制度の利用希望があった場合、専任医師と復職支援コーディネーターが代理で熊本県内の病院管理者もしくは熊本大学病院内診療科部長に相談することになっています。

復職を応援していただける病院・診療科は、熊本大学病院内の9科(うち復職支援プログラムがあるのは5科)、熊本大学病院を除く県内8施設(うち復職プログラムがある病院・診療科は7施設)でした。

短時間勤務制度・復職を応援する診療科と応援メッセージは、CLOVER冊子第4版とウェブサイトに公開し情報提供しています。

[illegible]

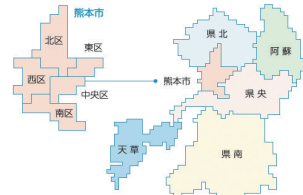
短時間勤務

勤務時間で困っている方

やうがいのある仕事を続けたい。
せつかく獲得した技術を保持したい。
ただで育児や介護でフルタイム勤務は難しいという方に、
短時間勤務を応援してくれる
病院各臨床科の情報を提供しています。
また、各病院へのお問い合わせなどを代行します。
お気軽にご相談ください。



短時間勤務を
応援している病院



5 地域の医療機関に勤務する女性医師支援

地域に勤務する修学資金貸与医師、自治医科大学卒の女性医師を対象にオンラインで意見交換会を8回開催し、女性医師26人名中16名に参加いただきました。意見交換会で出た意見は内容ごとに分類してまとめ、課題を知事指定病院院長へ報告しました。

また、知事指定病院院長に対し、女性医師に向けた応援メッセージ及び今後取り組みたい対応策についてアンケートを実施しました。

このアンケート結果と女性医師の意見交換会の内容をまとめてニュースレターを600部作成し、国や全国都道府県など地域医療に関連する県内外の行政機関各部署、関係医療機関、医師、医学部生等に配布しました。

今後も地域で働く医師と面談を行い、協力機関や勤務先と連携して、課題の解決に向けて支援します。

＜地域に勤務する女性医師の意見交換会での意見(一部抜粋)＞

○ 自分が勤務する医療機関について

- ・常勤医師数が少ないため、妊娠中に体調不良で休む場合や、産休・育休を取得する場合、出産前後で当直免除にしてもらう場合等に、他の医師に負担がかかってしまう。
- ・子育て中の地域勤務は、保育園探しが一番大変。保育園が院内にあれば、とても安心して働けると思う。地域には、0歳児を預かってもらえる保育園がないので、(義務に算入されない育休を取得せず)産休明けですぐに復帰するのは難しい。
- ・妊婦健診や妊娠中の体調不良(つわり等)時の特別休暇の設定がなく、全て年休で対応した。院内で特別休暇に関する規定を作してほしい。

○ 今後のライフプラン・キャリア等に関する不安

- ・妊娠・出産のタイミングをどうすべきか悩んでいる。
- ・保育園は11月頃には入園申し込みを締め切るところが多いため、夫と離れて暮らす場合、異動が決まってから保育園を探すのは大変そう。

○ 制度について等、行政に相談したいこと

- ・妊娠中はどうしても体調不良で急に休んだり、長期で休むことになったりするので、代診してくれる医師がいることが一番大事だと思う。

- ・妊娠中や出産後、当直免除で勤務する場合はほとんどのため、病院側としては当直支援を必要としていると思う。当直支援の仕組みを作してほしい。

○ 女性医師が働きやすい環境に関する機運醸成の不足によるもの

- ・産休・育休で周りに迷惑をかける気まずさは、夫婦ともに育休を取らなければ共有できない。
- ・所属する医局では、子育て中の女性医師はほぼ非常勤で勤務している。また、地域の病院では妊娠・出産・育児時のサポートを受けられないためか、妊娠・出産は大学病院での勤務期間にする医師が多い。

○ その他

- ・義務明け後の就職については、義務最終年度に勤務していた病院を退職して新たな勤務先に就職することとなるため、最初は年休が取得できず、育児中にも関わらず休みを取れないのではないかと不安。

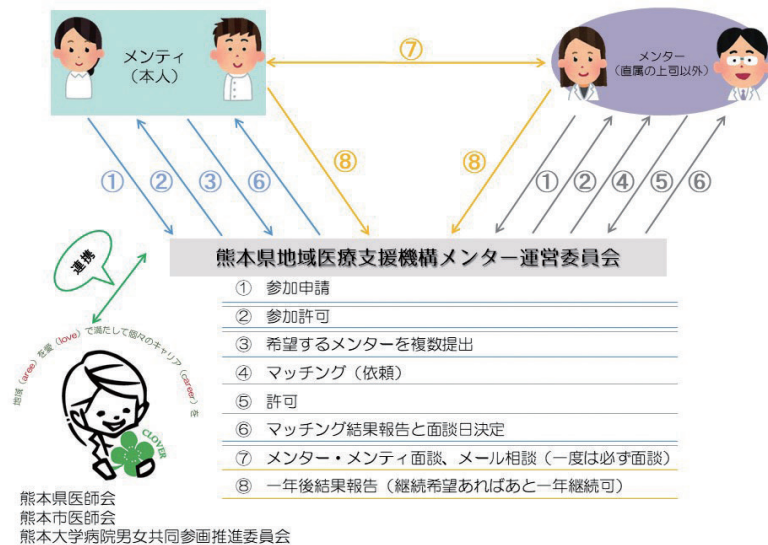


6 メンター制度

メンター制度とは、キャリアについて、ワークライフバランスについて、先輩に悩みを聞いてもらい、一緒にキャリアやライフの目標設定を考える取り組みです。気軽に取り組めるよう、メンター・メンティの関係性は1年間限定とし、希望があればさらに1年間延ばすこととしています。

現在、メンターとして28名の男女医師が登録しており、今年度は1名のメンティ登録女性医師が期間満了により登録を終了されました。

熊本県地域医療支援機構メンター制度イメージ図

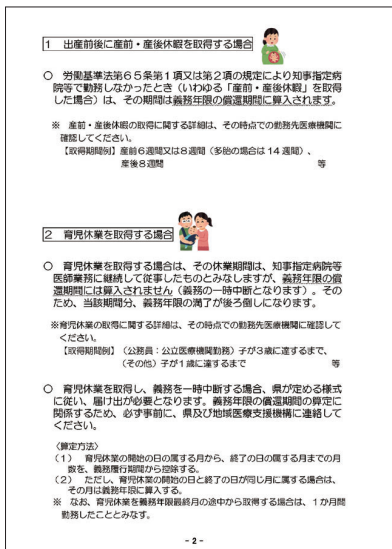
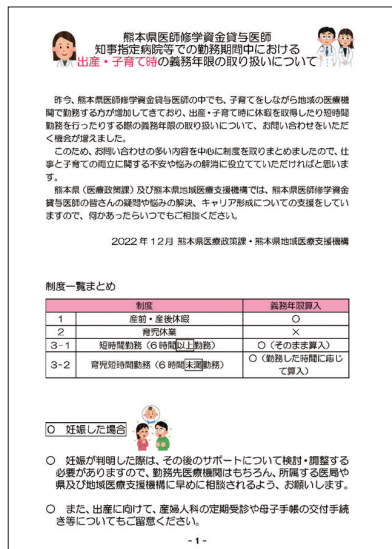


7 学生への啓発活動

- 1学年講義：令和4年6月6日 医学概論 「医師のキャリア形成、多様性推進」
- 4学年講義：令和4年5月30日 行動科学Ⅱ 「医師の男女共同参画とワークライフバランス、キャリア形成」
- 熊本県医師会主催：令和5年2月17日 令和4年度 医学生・研修医をサポートするための会「医師の育休とキャリアについて考える」

8 広報活動

- ホームページ、携帯サイトの運営
- ホームページでは「復職支援」「短時間勤務」「育児支援」「メンター制度」「セミナー情報」「求人情報」「マタニティ白衣の貸出」「相談窓口」「介護支援情報」などを掲載しています。
- Facebook及びTwitterネットワークによる情報交換・情報の共有を図っています。
- 県就学資金貸与医師について、仕事と子育ての両立に関する不安や悩みの解消に資するため、知事指定病院勤務期間中における出産、子育て時の義務年限の取扱いに関するパンフレットを医療政策課、地域医療支援機構連名で作成し、地域医療支援機構ホームページに掲載しました。



（パンフレットより一部抜粋）

9 女性医師キャリア支援に関するネットワーク構築

地域医療支援機構、熊本県医師会男女共同参画委員会、熊本市医師会女性医師キャリア支援センター、熊本大学病院男女共同参画推進委員会で協力して組織した「熊本県医療人キャリアサポートの会(クローバーの会)」の活動で、各機関が連携して講演会やセミナーなどの啓発活動、短時間勤務制度の有効活用などのための相談業務、育児支援等を実施し、女性医師の勤務の継続、円滑な職場復帰等を進めています。今後の医師の働き方改革も念頭に、勤務環境改善センターとも連携して、女性医師及び子育て医師が、働きやすく安心して子育てのできる環境の中でキャリア形成が図られるよう、支援を進めていくこととしています。

3 地域医療・総合診療実践学寄附講座

1. 活動概要

「地域医療・総合診療実践学寄附講座」は、平成27年度末に廃止された「地域医療システム学寄附講座」の後継として平成28年4月1日に設置されました。当寄附講座のこれまでの実績と本県における医師の地域偏在の解消、さらなる地域医療の充実のために、地域医療を担う総合診療医等を養成する当寄附講座は、その後平成31年4月から3年間の延長、さらに令和4年度から3年間さらに延長されました。なお、さらに3年間延長することとされました。

同講座は、超高齢社会における様々な医療ニーズに応えられるよう、これまでの医師循環システムに関する調査研究や地域医療実習教育に関する調査研究等の成果を踏まえ、「医学生や若手医師への卒前からの一貫した地域医療教育」「総合診療医の育成」「地域医療実践教育拠点の運営」など、地域医療を志す医師の養成を目指して、より実践的な取り組みを進めています。

具体的には、熊本大学医学部医学科学生(熊本県医師修学資金貸与学生を含む。)や若手医師に対して、卒前からの一貫した地域医療教育を通じた地域医療マインドの涵養に取り組んでいます。また、今後、地域医療への貢献が期待される総合診療専門医の育成において、熊本県内の公的病院等が連携するに当たり、同講座が中心的な役割を果たすとともに、教育拠点運営支援や地域医療機関における診療支援を促進することとしています。

【主な内容】

- I. 地域医療支援(診療支援)
- II. 調査・研究
- III. 教育活動
 - ・卒前教育(カリキュラム外教育)
 - ・卒前教育(カリキュラム内教育)
 - ・卒後教育
 - ↳初期臨床研修
 - ↳専門研修
- IV. 専門医資格修得後のキャリア支援
- V. 講演会

2. 年間活動実績

月	日	行事
4	27	レジデントデイ
5	11	令和4年度合同Webカンファレンス①
	12	TMEC
	13	クリクラ第11ターム 振り返り会
6	2	TMEC
	3	クリクラ第12ターム 振り返り会
	8	令和4年度合同Webカンファレンス②
	22	第9回 熊本大学総合診療セミナー
	23	TMEC
	24	クリクラ第13ターム 振り返り会
7	6	レジデントデイ
	13	令和4年度合同Webカンファレンス③
	14	TMEC
	15	クリクラ第14ターム 振り返り会
9	8	TMEC
	9	クリクラ第2ターム 振り返り会
	13	第10回 熊本大学総合診療セミナー
	14	令和4年度合同Webカンファレンス④
	29	TMEC
	30	クリクラ第3ターム 振り返り会
10	20	TMEC
	21	クリクラ第4ターム 振り返り会
11	9	令和4年度合同Webカンファレンス⑤
	10	TMEC
	11	クリクラ第5ターム 振り返り会
	16	レジデントデイ
	22	第11回 熊本大学総合診療セミナー
12	1	TMEC
	2	クリクラ第6ターム 振り返り会
	22	TMEC
	23	クリクラ第7ターム 振り返り会
1	11	令和4年度合同Webカンファレンス⑥
	18	レジデントデイ
	26	TMEC
	27	クリクラ第8ターム 振り返り会
2	8	令和4年度合同Webカンファレンス⑦
	16	TMEC
	17	クリクラ第9ターム 振り返り会
3	9	TMEC
	10	クリクラ第10ターム 振り返り会
	29	第12回 熊本大学総合診療セミナー

3. 活動報告

Ⅰ 地域医療支援(診療支援)

大学病院においては、「総合診療科」の外来診療を月曜日から金曜日まで実施し、専門診療科以外の受診を目的とした初診患者を中心に診療を行いました。また、大学病院の救急外来診療等も担当しました。

玉名教育拠点においては、「総合診療科」の外来及び病棟診療を行いました。また、同院の救急診療にも携わりました。その他の熊本県内の医師が不足している病院に対し、県からの要請に基づき、診療支援活動を行いました。

◆ 大学病院 総合診療外来

月	火	水	木	金
松田	松井	高柳	佐土原	北村

◆ 学外診療支援

医師	支援内容及び支援先医療機関
松井	2022.4～2023.3 くまもと県北病院 (週1回)
荒木	2022.10～2023.3 荒尾市民病院 (週1回) 2022.10～2023.3 上天草総合病院 (週1回)
佐土原	2022.4～2023.3 小国公立病院 (週1回) 2022.4～2023.3 阿蘇医療センター (週1回)
北村	2022.4～2023.3 山都町包括医療センターそよう病院 (週1回) 2022.4～2023.3 くまもと県北病院 (週1回)
松田	2022.4～2023.3 上天草総合病院 (週1回) 2022.4～2023.3 小国公立病院 (週1回 月2回当直)

Ⅱ 調査・研究

◆ 地域医療実習教育に関する調査研究

修学資金貸与による義務年限を有する学生を対象に、将来のキャリア支援と定着の要因の解析と、例年行ってきた地域医療特別実習の効果を見るために実習の前後で量的・質的なアンケートを実施しており、新型コロナウイルス感染症パンデミック前の令和元年(2019年)データ解析を行い、国内学会での発表を終えました。なお、令和5年(2023年)10月には、世界家庭医療機構(WONCA)での発表を予定しています。

また、その後はポストコロナ時代の地域医療特別実習のあり方についても実施の目処が立ち次第、調査に移る予定にしております。

◆ 総合診療専門医普及に関する調査研究

当講座では、日本専門医機構の基本領域専門医である総合診療専門医の育成を担っています。医師の働き方改革の解決策の一つのモデルを米国のホスピタリスト(病院総合医)に求め、日米の医療制度の違いや労働の実態を比較しました。平成30年(2018年)から継続した課題で、米国のホスピタリスト(病院総合医)にインタビューしたデータを質的に解析したものを国内学会発表し、令和5年(2023年)5月に米国総合診療医学会発表予定であり、現在、論文化の準備作業を進めています。

総合診療専門医のアカデミックな活動の支援として、令和元年(2019年)に兵庫医科大学臨床疫学共催でワークショップを行いました。その活動の一環で、令和3年(2021年)には、研究倫理ワークショップを開催しました。いずれも、AMED(日本医療研究開発機構)の臨床研究トレーニングに組み入れられた能動的研究倫理学習プログラムに準拠しており、令和4年度(2022年度)も同研究班での開発事業の協力者として活動しており、5年度も引き続き活動する予定です。

◆ 医療機関の勤務環境に関する調査研究

研修医が地域医療研修において困難を克己して安全な研修生活を送るためのキャリア支援につなげるために、研修医のレジリエンスと地域医療研修との関係について2019年から2021年までアンケート調査による縦断研究を行いました。会及び科学研究費助成事業の報告書として報告済みで、現在論文化を進めています。

◆ 教育拠点に関する調査研究

教育拠点に関する調査については、総合診療科、地域医療支援機構、各教育拠点と連携して、次のような取り組みを行っています。

くまもと県北教育拠点については、総合診療科専攻医の教育、初期臨床研修、地域医療・総合診療に係る学生実習の拠点として活動。現在1人の総合診療科の専攻医が勤務しており、くまもと県北病院との連携により本人のキャリア形成に向けた取り組みについて課題等の把握を行いました。

また、令和3年(2020年)4月から天草市立河浦病院に教育拠点を設置し、へき地の中心的な医療機関における地域で必要とされる医師の育成・教育機能向上を図る観点から調査を行っています。令和3年(2020年)10月から総合診療科の専攻医が配属になっており、今年度も引き続き当講座の教員の指導の下、診療を行い、課題等についての検証が進められました。

III 教育活動

◆ 卒前教育(カリキュラム外教育)

① 修学資金貸与学生の面談実施

熊本県修学資金貸与学生の今後の円滑なキャリア形成を図ることを目的に、地域医療支援機構と連携して熊本県医師修学資金貸与学生32名の面談を実施しました。今年度も新型コロナウイルス感染状況を踏まえて、対面及びリモートによる実施となりました。

将来の希望の聞き取りや学生生活の状況等を聞き取り、生活面、学習面等個人ごとに必要な助言をしました。また、6年生に対しては、将来のキャリアプラン等を聞き取り、進路について義務の履行とキャリア形成の両立に関して個別具体的なアドバイスを行いました。そのほか、熊本県医師修学資金貸与制度の周知、キャリア形成プログラムの内容の周知等を図り、将来地域医療に携わることにに対する意識が深まるよう努めました。

② 地域医療ゼミ

地域枠学生等(熊本県医師修学資金貸与学生)を主な対象に実施している地域医療ゼミは、今年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、主にリモートでの開催としました。「シネメディケーション」をはじめとする学生企画のゼミ、講演等、合計11回の活動を行いました。

この中で、地域医療支援センター企画の「制度とキャリア」においては、新専門医制度にかかる最近の動きについて当センター教員からの説明を受けるとともに、特に出産・子育てにかかる世代の医師の増加、女性医師・学生の増加等により近年関心が高まっている「出産・育児にかかる休暇・休業と義務の履行」等について県医療政策課からの説明を受けました。

また、今年度新たな企画として、9月、10月のゼミにおいて、修学資金貸与医師・学生、自治医科大学・卒業医師が義務履行期間中必ず勤務する必要のある第2グループの知事指定病院及び第3グループの病院

等のうち勤務期間の換算が第2グループ扱いとなる診療所の概要について、リモートでの説明会を実施しました。各病院に勤務する若手の医師から普段の医療活動の様子や専門医資格の取得等キャリア形成の実情等についての説明を受け、聴講した医師や学生にとって将来の勤務のイメージづくりに一定の役割を果たしました。説明会の様子は地域医療支援機構のホームページ上に動画を掲載しており、修学資金貸与学生、自治医科大学生を中心に視聴されています。

なお、第1回ゼミは、新入生の歓迎会を兼ねて対面で実施し、自治医大生、県外枠の修学資金貸与学生が参加できるようリモートでも対応できるハイブリット方式で行いました。また、第11回ゼミでは、6年生の卒業を祝って、追出しゼミとして対面で実施しました。

③ 夏季地域医療特別実習

夏季地域医療特別実習は、熊本県医師修学資金を貸与されている学生及び熊本県出身自治医科大学生を対象として毎年県内各地で開催しているところです。当実習は、将来地域医療に従事することが予定されている学生が地域の行政関係者及び医療・福祉関係者等に対する聞き取りを通して地域の問題点を探り出すとともに、自ら「見て」「聞いて」「体験」することで、地域を知り、地域との関係性を構築するとともに、地域医療に取り組む意欲を醸成するすることを目的としています。

今年度は、令和元年8月以来3年ぶりに実施することを目指し、天草上島地域(上天草市、天草市御所浦地域)を対象地域に8月上旬に実施することとして準備を進めてきました。特に新型コロナ感染対策については、①参加者全員にPCR検査を実施し、陰性者のみに参加を認める。②令和4年7月4日付け病院長発出の行動自粛通知を踏まえて、ア)実習中は食事等の場合を除きマスク着用を義務付け、イ)手洗い・手指の消毒こまめに行うこと、建物に入る際は必ず備え付けのアルコール消毒で手指を丁寧に消毒する、ウ)密閉、密集、近距離会話(「3密環境」を避け、参加者同士つねに一定程度の距離を設けること、特に、i：移動中のバスの車内では、一人分の椅子を必ず開けて座る、ii：食事は黙食、iii：実習期間中大声を出さない、を徹底することとして、参加者にも周知してきました。しかしながら、必要な準備もほぼ整いつつある中、新型コロナ第7波の感染拡大の影響により中止の判断となりました。

◆ 卒前教育(カリキュラム内教育)

地域医療システム学寄附講座を設置以来、これまでも医学科カリキュラムの実施に協力してきましたが、今年度も、地域医療・総合診療実践学寄附講座として、医学科長からの依頼に基づき、以下の実習及び講義を行いました。なお、地域医療支援センターへ依頼があった講義(※)も一緒に記載しています。

- ・1年生：医学概論※
- ・4年生：公衆衛生学、行動科学Ⅱ、総合診療学
- ・5年生：特別臨床実習
- ・6年生：特別臨床実習

【1年生】

医学概論	
2022/6/6	後藤 医師のキャリア形成、多様性推進

【4年生】

総合診療学		
2022/4/5	松井	「総合診療学概論 1（総論）」
2022/4/12	高柳	「総合診療学概論 5（家庭医療、BPS モデル、患者中心、継続性）」
2022/4/19	佐土原	「総合診療学概論 3（臨床推論）」
2022/4/26	松井	「総合診療学概論 2（EBM・診療ガイドライン）」
2022/5/10	佐土原	「総合診療学概論 4（身体診察）」
2022/4/5	松井	「総合診療学概論 1（総論）」
2022/4/12	高柳	「総合診療学概論 5（家庭医療、BPS モデル、患者中心、継続性）」
2022/5/17	高柳	「総合診療学概論 6（家庭医療・統合ケア・包括性）」
2022/5/24	小山	「総合診療学概論 7（病院総合診療等）」
2022/5/31	鶴田	「総合診療学概論 8（高齢者ケア・地域包括ケア）」
2022/6/7	北村	「臨床推論演習 1（体重減少）」
2022/6/14	中村	「臨床推論演習 2（倦怠感）」
2022/5/17	高柳	「総合診療学概論 6（家庭医療・統合ケア・包括性）」
2022/5/24	小山	「総合診療学概論 7（病院総合診療等）」
2022/5/31	鶴田	「総合診療学概論 8（高齢者ケア・地域包括ケア）」

公衆衛生学		
2022/6/21	佐土原	「地域保健、地域医療②」

行動科学Ⅱ（医療と社会）		
2022/5/23	後藤	「ストレス対策、リラクゼーション、マインドフルネス」
2022/5/30	後藤	「男女共同参画」

【5年生－6年生】

特別臨床実習（クリクラ：クリニカルクラークシップ）	
＜授業の目的＞	
診療チームに参加し、その一員として診療業務を分担しながら医師として最低限必要な医学知識、臨床推論、臨床判断・技能・態度などの能力を身につけることを目標としています。	
＜授業の概要＞	
現在、5 学年の 7 月から 6 学年の 9 月までの全 14 ターム（1 タームは 3 週間）で実施されている特別臨床実習において、当講座は、平成 26 年度から地域医療を提供しています。	

▼各医療機関の特別臨床実習「地域医療」および「総合診療＊」における学生受入人数

No.	施設名	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	累計
1	阿蘇医療センター	--	--	--	2	3	1	8	7	10	10	41
2	天草地域医療センター	--	--	--	5	5	12	13	9	3	5	52
3	荒尾市民病院	--	--	--	--	5	9	10	11	7	9	51
4	小国公立病院	4	8	9	3	6	4	4	7	7	12	60
5	上天草総合病院	3	10	13	4	0	2	6	8	11	8	65
6	菊池郡市医師会立病院	--	--	--	--	2	7	6	1		--	16
7	御所浦診療所	--	--	--	5	2	4	5	2	3	1	22
8	そよう病院	4	4	13	4	0	4	6	4	4	4	43
9	公立多良木病院	1	0	0	6	2	5	11	7	10	3	45
10	人吉医療センター	--	8	19	7	7	20	9	12	18	20	120
11	水俣市立総合医療センター	--	--	--	6	5	9	10	9	15	12	66
12	山鹿市民医療センター	--	--	--	--	5	8	11	9	7	9	49
13	熊本総合病院	--	--	--	--	--	7	13	11	11	13	55
14	熊本労災病院	--	--	--	--	--	10	11	10	13	15	59
15	公立玉名中央病院(クリクラ総診のみ)	--	--	5	17	16	4	15	8	--	--	65
16	河浦病院									1	2	3
17	栖本病院											0
18	新和病院											0
	合計	12	30	59	59	58	106	138	115	120	123	812

R2年度の地域医療はインタビュー実習等を含む
クリクラ総合診療科実習も含む

◆ 特別臨床実習：地域医療

5学年6月から6学年の9月までの全15ターム（1タームは3週間）で実施（第1～13ターム必須、第14、15タームは選択）されている特別臨床実習において、地域医療・総合診療実践学寄附講座は、平成26年度から地域医療を提供しています。今年度は、県内の16医療機関の協力を得て、5・6年生 延べ123に対し、地域医療実習を提供しました。

▼2021-2022年度 特別臨床実習「地域医療」の受け入れ人数

No.	実習受入先	ターム 年度 期間	11 2021 4/18- 5/13	12 2021 5/16- 6/3	13 2021 6/6- 6/24	14 2021 8/22- 9/9	15 2021 9/12- 9/30	1 2022 6/27- 7/15	2 2022 8/22- 9/9	3 2022 9/12- 9/30	4 2022 10/3- 10/21	5 2022 10/24- 11/11	今期										合計
			6 2022 11/14- 12/2	7 2022 12/5- 12/23	8 2022 1/10- 1/27	9 2022 1/30- 2/17	10 2022 2/20- 3/10	6 2022 11/14- 12/2	7 2022 12/5- 12/23	8 2022 1/10- 1/27	9 2022 1/30- 2/17	10 2022 2/20- 3/10	6	7	8	9	10						
1	阿蘇医療センター		1	1	1					1	1	1			1			1				1	10
2	天草地域医療センター					1	1								1	1	1						5
3	荒尾市民病院		1		1			1	1	1		1	1	1	1	1		1					9
4	小国公立病院		1		1			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1			12
5	上天草総合病院		1	1			1	1	1						1		1			1			8
6	御所浦診療所			1																		1	1
7	そよう病院					1	1				1									1			4
8	公立多良木病院							1	1	1													3
9	人吉医療センター		2		2			1	2	2	2	2	1	1	2	1	2	1	2				20
10	水俣市立総合医療センター			2	1			1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1			12
11	山鹿市民医療センター		1	1				1					1	1	1	1	1	1	1	1			9
12	熊本総合病院		1	1	1			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1			13
13	熊本労災病院		1	1	1	1		1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1			15
14	河浦病院			1		1																	2
15	栖本病院																						0
16	新和病院																						0
	合計		9	9	8	4	3	9	10	9	8	9	9	9	9	9	9	9	9	9			123

▼ 診療所・病院のスケジュール例

人吉医療センター					
	月	火	水	木	金
1 週目	オリエンテーション 総合診療・救急センター 総合診療	キャンサーボード 小児科	プライマリケアカンファレンス 病棟回診 訪問看護 訪問診療	五木村診療所	外科合同カンファレンス 総合診療 救急センター 訪問診療 訪問看護
2 週目	モーニングレクチャー ドクターズ会、病棟回診 総合診療 救急センター	五木村診療所	プライマリケアカンファレンス 病棟回診 選択診療科での実習	プライマリレクチャー 病棟回診 選択診療科での実習	外科合同カンファレンス 訪問診療
3 週目	モーニングレクチャー ドクターズ会、病棟回診 選択診療科での実習	五木村診療所	プライマリケアカンファレンス 病棟回診 総合診療・科学療法外来 訪問看護またはリンパ 浮腫外来	プライマリレクチャー 病棟回診 選択診療科での実習 総合診療・救急センター	外科合同カンファレンス 総合診療・救急センター まとめ

選択診療科：小児科、産婦人科、代謝内分泌内科(外来)、外科、整形外科、その他希望診療科

御所浦診療所					
	月	火	水	木	金
1 週目	朝礼 眼科外来/総合診療外来 総合診療外来	朝礼 検査 総合診療外来 船で横浦へ移動 府外来 外来終了後に訪問診療 御所浦島に帰島	朝礼 整形外科外来/総合診療外来	朝礼 検査 総合診療外来 船で横浦へ移動 外来 外来終了後に訪問診療 御所浦島に帰島	朝礼 検査 総合診療外来 スタッフミーティング 総合診療外来/訪問診療 振り返り・次週の予定確認
2 週目	朝礼 眼科外来/総合診療外来 総合診療外来	朝礼 検査 総合診療外来 船で横浦へ移動 府外来 外来終了後に訪問診療 御所浦島に帰島	朝礼 整形外科外来/総合診療外来	朝礼 検査 総合診療外来 船で横浦へ移動 外来 外来終了後に訪問診療 御所浦島に帰島	朝礼 検査 総合診療外来 スタッフミーティング 総合診療外来/訪問診療 振り返り・次週の予定確認
3 週目	朝礼 眼科外来/総合診療外来 総合診療外来	朝礼 検査 総合診療外来 船で横浦へ移動 府外来 外来終了後に訪問診療 御所浦島に帰島	朝礼 整形外科外来/総合診療外来	朝礼 検査 総合診療外来 船で横浦へ移動 外来 外来終了後に訪問診療 御所浦島に帰島	朝礼 検査 総合診療外来 スタッフミーティング 総合診療外来/訪問診療 振り返り（個人で）そ の後、総括

◆ 特別臨床実習：総合診療科

この実習は救急・総合診療部の実習ではなく、地域医療・総合診療実践学寄附講座として独立した「総合診療科」の実習となり、1ターム3週間の選択実習を行っています。

今年度、総合診療科としての実習は、大学病院、くまもと県北教育拠点及び河浦教育拠点の3か所で延べ44人の実習を提供しました。

くまもと県北病院					
	月	火	水	木	金
1 週目	新患・重症患者カンファ 新患・重症患者回診 外来研修 病棟研修 チーム回診 振り返り 自己研修	新患・重症患者カンファ 新患・重症患者回診 外来研修 多職種（リエゾン）カンファ チーム回診 振り返り 自己研修	プライマリケアレクチャー 新患・重症患者カンファ 新患・重症患者回診 外来研修 病棟研修 チーム回診 振り返り 自己研修	新患・重症患者カンファ 新患・重症患者回診 外来研修 病棟研修 チーム回診 振り返り 自己研修	新患・重症患者カンファ 新患・重症患者回診 外来研修 病棟研修 チーム回診 週間振り返り 自己研修
2 週目	新患・重症患者カンファ 新患・重症患者回診 外来研修 病棟研修 チーム回診 振り返り 自己研修	新患・重症患者カンファ 新患・重症患者回診 外来研修 病棟研修 多職種（リエゾン）カンファ チーム回診 振り返り 自己研修	プライマリケアレクチャー 新患・重症患者カンファ 新患・重症患者回診 外来研修 訪問看護 チーム回診 チーム回診 振り返り 自己研修	新患・重症患者カンファ 新患・重症患者回診 外来研修 病棟研修 チーム回診 振り返り 自己研修	新患・重症患者カンファ 新患・重症患者回診 外来研修 病棟研修 チーム回診 週間振り返り 自己研修
3 週目	新患・重症患者カンファ 新患・重症患者回診 外来研修 病棟研修 チーム回診 振り返り 自己研修	新患・重症患者カンファ 新患・重症患者回診 外来研修 多職種（リエゾン）カンファ チーム回診 振り返り 自己研修	プライマリケアレクチャー 新患・重症患者カンファ 新患・重症患者回診 外来研修 緩和ケア回診 チーム回診 振り返り 自己研修	新患・重症患者カンファ 新患・重症患者回診 外来研修 病棟研修 チーム回診 ジャーナルクラブ 実習総括	

◆ 卒後教育

① 地域医療に従事する修学資金貸与医師への支援

地域医療支援機構と連携して、地域医療に従事する修学資金貸与医師全員の面談を実施し、本人の専門医としてのキャリア形成と義務履行の両立が図られるように、一人一人の実状に沿ったアドバイスを行いました。

令和4年度の貸与医師の勤務先については、おおよそ地域の医療機関での勤務が始まる4年目の貸与医師32人中26人が知事指定病院での勤務となり、うち年度中途での移動も含めて13人が第2グループ、第3グループの病院等で勤務しています。

② 初期臨床研修医に対する指導

熊大病院群初期臨床研修プログラムで総合診療科を選択した初期臨床研修医5人に対し、総合診療・地域医療に関する教育指導を行いました。

施設名	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	研修受け入れ 総人数
熊本大学病院							1	1	1			1	
くまもと県北病院 ／くまもと県北教育拠点										1			
河浦病院 /河浦教育拠点													

③ 専攻医に対する指導

令和4年度は、熊本大学総合診療専門研修プログラムでは、プログラムを修了した専攻医1人が総合診療専門医の資格試験に合格しました。現在、引き続き専門研修に従事する5年目の専攻医が1人（うち1人が今年度終了予定）、4年目の専攻医が1人、3年目の専攻医が1人、2年目の専攻医が1人、1年目の専攻

医が1人それぞれ地域の病院で勤務しており、5年度からはさらに2人が新たに総合診療科の専攻医としてプログラム研修を始めることとなっています。

また、研修の支援・指導の充実を図るため、テレビ会議システムを活用し、総合診療に関する困難事例を情報共有すること、専攻医の抱える症例の共有化を図るとともに必要な助言を適宜行うことなどを遠隔で指導する「合同Webカンファレンス」を5回開催しました。併せて、専攻医等が経験した症例・事例の発表を、テレビ会議システムを通じて各病院へ配信しております。当寄附講座としては、専攻医の研修修了要件であるポートフォリオ(経験省察研修記録)の作成指導なども行っており、年5回のレジデントデイを開催することで専門研修の進捗状況の確認を図り、よりきめ細かい指導に努め、プログラム修了に向けてさらに丁寧な指導に心がけてまいりました。当寄附講座としては、このように地域で必要とされている総合診療医の育成に向けた取り組みを強力に進めているところです。

● 熊本大学総合診療専門研修プログラム

当プログラムは、日本専門医機構認定の総合診療医後期研修プログラムです。
熊本大学病院を中心として、熊本県内全域に広がる様々な医療施設の協力のもと、オール熊本として、総合診療専門医の育成に取り組むプログラムです。研修施設には、大学病院や地域中核病院に加え、小規模病院等も含まれ、県庁所在地である熊本市内のみならず、県内の各二次医療圏に研修施設があります。県内全域に広がる多くの施設がプログラムに参加することにより、異なる特性を持つ施設で、その地域に根づいた研修を行うことができ、本人の希望に応じた研修が可能となっています。
また、熊本県医師修学資金貸与の熊本大学卒業生(地域枠入学者を含む)や、熊本県出身の自治医科大卒業生に対し、総合診療専門医としてのキャリア形成支援に寄与することも目指しています。

◆ 研修プログラム

プログラム期間は原則として3年間で、総合診療専門研修、必修の領域別研修(内科、小児科、救急)、その他の選択研修で構成されます。将来の自分のキャリアプランに合わせてローテーション、勤務地の選択が可能です。

総合診療研修	総合診療Ⅰ（診療所・中小病院）	6ヶ月以上	合計
	総合診療Ⅱ（病院総合診療部門）	6ヶ月以上	18ヶ月以上
領域別研修（必修）	内科	12ヶ月以上	
	小児科	3ヶ月以上	
	救急科	3ヶ月以上	
選択科研修	皮膚科、整形外科、精神科、etc…	希望に応じて	

▼総合診療研修・必修領域研修機関一覧

総合診療Ⅰ		阿蘇医療センター	小国公立病院	河浦病院	栖本病院
		そよう病院	公立多良木病院	新和病院	沢田内科医院
		安成医院	御所浦診療所	惟原診療所	湯島へき地診療所
総合診療Ⅱ		熊本大学病院	熊本医療センター	上天草総合病院	くまもと県北病院
		人吉医療センター	天草地域医療センター	水俣市立総合医療センター	
内科		くまもと県北病院	上天草総合病院	人吉医療センター	天草地域医療センター
		熊本総合病院	くまもと森都総合病院	熊本赤十字病院	
小児科		阿蘇医療センター	くまもと県北病院	人吉医療センター	天草地域医療センター
救急科		熊本大学病院	熊本医療センター	くまもと県北病院	人吉医療センター
		天草地域医療センター			
その他の領域	外科	そよう病院	くまもと県北病院	人吉医療センター	天草地域医療センター
		熊本大学病院(消化器外科)	熊本大学病院(乳腺・内分泌外科)	熊本総合病院	山鹿市民医療センター
	産婦人科	人吉医療センター	熊本総合病院	天草中央総合病院	
	整形外科	くまもと県北病院	天草地域医療センター	熊本大学病院	熊本総合病院
	皮膚科	くまもと県北病院			
	泌尿器科	くまもと県北病院	天草地域医療センター	熊本総合病院	
	放射線科	くまもと県北病院	人吉医療センター	天草地域医療センター	天草中央総合病院
	精神科	熊本医療センター			
	麻酔科	くまもと県北病院			
	リハビリテーション科	くまもと県北病院			
	臨床疫学	熊本大学病院			

◆ 研修プログラムのスケジュール例

1. 熊本県医師修学資金貸与医師キャリア形成プログラム

① 総合診療コース(例)

卒後（年目）	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
① 勤務先の種別	基幹型臨床研修病院		第1グループ		第2グループ	第2グループ	第2又は第3グループ	第2又は第3グループ	後期研修（義務内）	義務年限修了
② 勤務（研修）先医療機関候補	臨床研修		専門研修							
	県内の基幹型臨床研修病院		・公立玉名中央病院 ・人吉医療センター ・熊本総合病院 ・天草地域医療センター		・阿蘇医療センター ・小国公立病院 ・そよう病院 ・公立多良木病院 ・上天草総合病院 ・河浦病院 ・新和病院 ・栖本病院	第2グループの医療機関	第2又は第3グループの医療機関	県内の医療機関		
③ 義務償還期間（年）	1	2	3	4	5	6	7	8	9	—

【備考（総合診療）】
○ 第1～3グループ、後期研修（義務内）の順序は入れ替え可能です。
○ 第2、3グループの医療機関での勤務期間においては、専門性の向上などを目的として、週1日、勤務先以外の医療機関で研修を行うことが可能です。
○ 研修先及び勤務先は、県内の威嚇地域における医師不足状況等を踏まえ、県及び地域医療

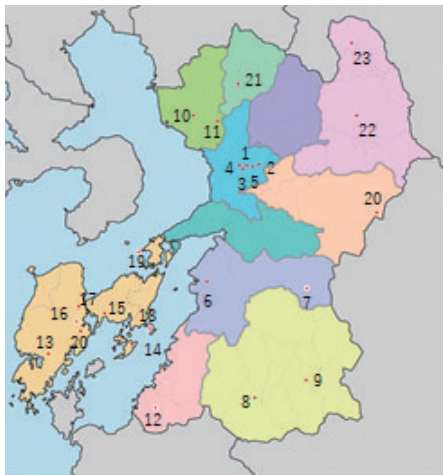
② 専門研修ローテート(例)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年目	くまもと県北病院 総合診療科 内科研修											
2年目	くまもと県北病院 小児科 小児科研修			熊本地域医療センター 救急科 救急科研修			上天草総合病院 内科 総合診療Ⅱ研修					
3年目	河浦病院 総合診療Ⅰ研修											

※ 玉名研修中に総診Ⅱ研修と並行して週1日の救急研修

◆ 研修施設一覧 令和4年度

1	くまもと森都総合病院	13	河浦病院
2	熊本赤十字病院	14	御所浦診療所
3	熊本大学病院	15	栖本病院
4	熊本医療センター	16	天草地域医療センター
5	沢田内科医院	17	天草中央総合病院
6	熊本総合病院	18	上天草総合病院
7	八代市立椎原診療所	19	湯島へき地診療所
8	人吉医療センター	20	新和病院
9	公立多良木病院	21	山鹿市民医療センター
10	くまもと県北病院	22	阿蘇医療センター
11	安成医院	23	小国公立病院
12	水俣市立総合医療センター	24	そよう病院



Ⅳ 専門医資格修得後のキャリア支援について

専門医資格取得後も、熊本大学病院総合診療科として様々なキャリア支援を実施。大学病院という診療・教育・研究機関の特色を活かし、個別のニーズに合わせ、臨床経験だけでなくアカデミックなキャリアも含め、様々な研鑽を積むことができることが特徴です。

専門医取得後の5年間は、これまでも増して重要な時期であるとの考えのもと、卒後6年目から10年目程度の若手医師を中心に様々な指導、支援を実施しております。もちろん、それ以上のキャリアをお持ちの方に対して、要望に応じた支援を行うことも可能となっています。

医師としての臨床能力を磨くことはもとより、指導医として医学生から専攻医までの様々な世代への教育の経験を積むことも可能としております。熊本県内に多数存在する連携機関の協力のもと、各人の要望に応じた多彩な研鑽を積むことができる場を用意しています。また専門医資格取得後、変化する各人の様々な要望に即し、総合診療領域外、あるいは関連する領域についての研修を行うことも支援します。各人の興味のある分野をさらに伸ばせるよう、熊本大学病院総合診療科がバックアップしております。令和3年度から、新たな専門医制度下での総合診療専門医資格修得者4名が、大学病院や地域の医療機関等に勤務しながら、当講座の支援を受けながら各人の希望に応じて研鑽を積んでおります。具体的には、現在、当講座の教員が地域支援先医療機関でカンファレンスや相談に応じるなどの支援を行っています、さらには、対象の医師に対して英語論文の執筆支援を行い、うち1人は症例報告を掲載予定となっております。

また、熊本大学の大学院へ進学し、医学博士の修得を目指す者の支援も実施しております。それまでの臨床経験の中で得た様々な疑問の解決を目指し、各人の興味に応じた臨床研究を推進し、学位の修得を目指した論文作成を指導しています。令和3年度から社会人大学院学生として、大学病院外で勤務しながら研究を行う2名の専門医資格修得者がこの博士課程に在籍しています。

更には、熊本県の医師修学金貸与制度や自治医大の卒業生など、地域での診療に従事する義務がある方々に対しても、義務の償還を行いながら、キャリア形成支援を継続することが可能であるのも特徴です。総合診療科と当寄附講座及び地域医療支援機構が一体となって、引き続きそれまでの研鑽で身に着けた能力を生かし、様々な施設、あるいは地域で活躍の場を見つけることを支援しています。

Ⅴ 講演会

● 2022年 6月22日

第9回 熊本大学総合診療セミナー 「ALPIにもっと光を！」

＜講師＞

飯塚病院 総合診療科 診療部長 清田 雅智 先生

● 2022年11月22日

第11回 熊本大学総合診療セミナー

「日常臨床をアップデートせよ！

～診療で使えるアプリケーション10選～

＜講師＞

医療法人社団孔和会 松本内科・眼科理事長

松本 朋樹 先生

「日常診療を一步先へ ～diseaseとillnessを学ぼう」

＜講師＞

阿蘇医療センター 内科 平賀 円 先生

● 2022年 9月13日

第10回 熊本大学総合診療セミナー 「社会的処方

～まちとのつながりで人が元気になる方法」

＜講師＞

川崎市立井田病院 西 智弘 先生

● 2023年 3月29日

第12回 熊本大学総合診療セミナー

「地域ケアの最前線！

総合診療医の能力を200%活かす

コミュニティホスピタルとは」

＜講師＞

医療法人 博愛会 頤田病院 総合診療科長

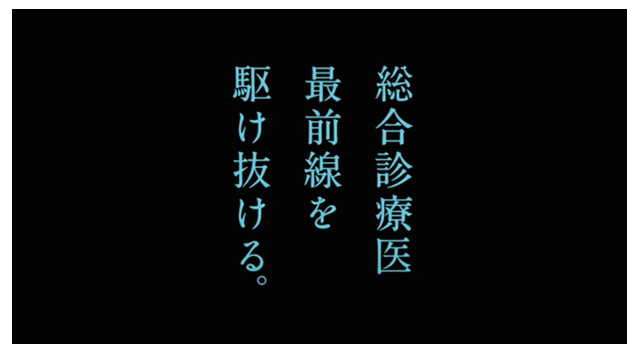
吉田 伸 先生

Ⅳ 総合診療医育成のためのPR活動

◆ 熊本大学病院総合診療プロモーション動画制作

地域における医療提供体制の実情と総合診療医へのニーズの高まり、そしてその魅力を医師の日々の医療活動を通して紹介し、若手医師及び医学生に地域医療マインドの涵養を図るとともに、総合診療医を目指す動機付けとすることができるよう、5分程度の総合診療プロモーション動画を作成しました。この動画は、総合診療科のホームページに掲載し、多くの皆さんに視聴いただくとともに、プライマリ・ケア連合学会学術集会等全国的な学会・イベントにおいて、熊本大学病院総合診療専門研修プログラムの紹介動画として活用こととしています。

プロモーション動画 「総合診療医 最前線を駆け抜ける。」
https://kumadaisoushin.com/training_program#tp_fi



熊本大学病院 総合診療科ホームページの開設
<https://kumadaisoushin.com/>

地域医療・総合診療実践学寄附講座としても、総合診療医を育成する観点から、広く関係者に総合診療科の活動をPRする総合診療科のホームページを開設しました。当寄附講座ホームページとリンクして、令和3年3月に新たに設置された熊本大学病院総合診療科の活動状況等を紹介し、総合診療の必要性、魅力、重要性等を医療関係者のみならず広く一般に情報発信し、理解を深めてもらうこととしています。



4. 専攻医の声

● 早川 香菜美 先生

令和4年度は人吉医療センター総合診療科で勤務をしておりました。外来、病棟、救急、五木村診療所に加えてCOVID19の対応など幅広く経験することができ、大変ではありましたが、とても充実した1年間となりました。今まで経験の少ない分野の症例も多数経験させていただき、他の専門医の先生にご助言をいただいたり、自分で調べたりなど試行錯誤しながら日々の診療にあたっておりました。その時は目の前のことに一生懸命で、きついなと思うこともありましたが、思い返してみるとその経験が自分の力になっていると感じます。

総合診療専門研修の内科分野の研修を行わせていただき、無事、すべての専門研修プログラムの課程を修了することができました。関係各所の皆様には大変お世話になりました。

● 下地 徹 先生

2020年1月から2023年3月までくまもと県北病院で勤務しました。その間、内科全般、総合診療科、小児科研修を行いました。2022年度は総診研修を行いました。外来、救急外来、一般病棟、HCUといった病院診療の中で、多彩な急性期～慢性期疾患、COVID-19診療、訪問診療、多職種連携、看取りなども学ぶことができました。印象に残っているものは書き切れませんが、その一つに地域連携があります。くまもと県北病院は地域医療連携室が非常に頑張っており、退院調整を含め、地域の医療機関との連携には無くてはならない役割を担っています。困難症例に当たる度に連携室でじっくりと相談させていただくことができ、患者・家族との面談に必ず同席いただけました。あの環境で地域医療や福祉を学べたことが、自分の成長につながったのではないかと考えています。

今後ですが、4月からは熊本大学病院にて救急研修、7月からは天草市立河浦病院で総診研修を行う予定です。今後とも皆様からのご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

● 本田 宏介 先生

河浦病院に来て1年半が経ちました。ここは患者さんの年齢層が高く、外来患者さんの平均年齢は70代後半～80代、入院患者さんの平均年齢は80代後半～90代です。重度の難聴や認知症、方言で話す方も多く、簡易拡声器などを用いてコミュニケーションをとっています。僻地で交通の便が良くないので、なかなか病院への通院ができない方のために訪問診療も行っています。訪問診療では聴診器と簡易超音波検査機器しか持っていけないため、問診や身体診察が重要になります。

地域柄、ムカデ咬傷やマダニ咬傷の患者さんも多く、専用の器具で除去しています。年齢層が高いため、転倒後の体動困難や骨折、脊椎圧迫骨折など整形外科的疾患の患者さんも多いです。小さい病院の利点で各診療科間の垣根が低く、整形外科の先生に指導していただいています。都会では珍しい地域ならではの疾患、地域の方々との親交や信頼関係構築など、まだまだ勉強すべき事はたくさんありますが、楽しく頑張っています。

● 松岡 隼平 先生

こんにちは。専攻医3年目の松岡隼平と申します。私の前年度の活動について簡単にご報告させていただきます。

前年度は、くまもと県北病院総合診療科、同院小児科、熊本医療センター救急科、上天草総合病院内科、診療所勤務、学校医、訪問診療なども経験させて頂き、かなりバラエティに富んだ研修内容でした。医師という職業の需要の幅広さを実感できました。

特に自分の中で印象的だったのは、家庭医という存在の公衆衛生上の重要性です。日々一日20人程の外来患者を見ていたのですが、ほとんどは安定している人ですが、私たち医療従事者から見たら信じられないような医療リテラシーの低い方と出会うことが多々あり、適切に教育を行い生活習慣病、ひいては重大疾患へ進展するのを予防することの重要性が直感でわかりました。

今年は、専門医の先輩の元、自分の診療スキルの洗練と手技の上達を課題に上げ研鑽していこうと思っています。ご指導ご鞭撻の程を何卒よろしくお願い致します。

● 西富 友哉 先生

2022年3月に天草地域医療センターでの初期研修を終え、4月より熊本大学病院総合診療科へ入局しました。4月から7月まではくまもと県北病院に勤務し、外来診療、入院診療、救急外来、コロナ外来などを行いながら、地域の基幹病院における総合診療科の役割を学びました。8月からは大学病院へ異動し、10月までは救急外来、その後は救急外来と総合診療科外来を並行して学びました。初期研修、くまもと県北病院、大学病院と施設が変わるたびに患者さんの層や求められる診療内容も変わり、一口に総合診療科と言ってもその守備範囲が多岐に渡ることを改めて実感した年でもありました。一方で、類似した症例を繰り返し診る機会が少なく、知識や技術の定着という意味では課題となったように思います。

2022年はオミクロン株の流行やウクライナ戦争、世界的なインフレなど、多くの国や地域にとって試練の多い年でありました。今後の情勢がどうなっていくのか予測できませんが、将来様々なフィールドで貢献できるよう、2023年も一つ一つ経験を積んで行きたいと思っています。

4 教育拠点

くまもと県北教育拠点

1. 活動概要

くまもと県北教育拠点は2015年4月、公立玉名中央病院に地域医療の支援及び地域医療の実践教育を行うべく開設されました。2名の常駐寄附講座教員でのスタートでしたが、2021年3月、玉名地域保健医療センターと合併し、新たに「くまもと県北病院 くまもと県北教育拠点」として移転し、2023年3月現在、指導医5名、総合診療専門医研修の専攻医1名に加え、さらに地域医療・総合診療実践学寄附講座から人的サポートもあり、病院の診療支援および実践的な教育の提供を継続しています。

2022年卒後臨床研修プログラム研修医(基幹型1年次:8名、2年次:4名、協力型:計1名)特別臨床実習(クリニカル・クラークシップ)の「総合診療科」の受け入れも積極的に行っております。地域医療・総合診療実践学寄附講座スタッフは、医学生、初期研修医、専攻医とともに総合診療科として救急外来、一般外来、入院、在宅医療に取り組み、地域の医療を支援しつつ、実践的な教育を行っています。8年経過した現在までに、診療面については救急車応受率4%を下回り、救急車受け入れ台数も2800台/年以上を維持し(いずれも県北地域最高の成績)、入院患者数も右肩上がりの業績を達成しております。その結果、2022年度は基幹型研修医は定員の8名がフルマッチを達成し、2023年度も7名がマッチしました。

新型コロナウイルス感染(COVID-19)についても、田宮医師が対策委員長として指揮し、総合診療科も院内の感染対策チーム、有明保健所、郡市医師会および近隣の感染症指定病院と連携をとり、COVID-19のトリアージ業務、外来・入院診療ローテーションに感染チーム医師・呼吸器内科医師とともに参画しています。

一方で、コロナ後に向けた取り組みも既に開始し、中でも国際交流の機会を広げるべく、拠点が中心となり、タイ国のメーファールアン大学との教育協力の再開が決定しました。

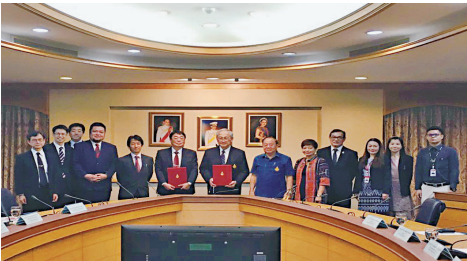
2021年10月に田宮医師が病院長に任命され、新体制の下、くまもと県北病院及び当拠点は、地域医療において円滑に発展し、行政並びに玉名郡市医師会とも引き続き協力し、更に発展すべく、尽力する次第です。



タイ国チェンライのメーファールアン大学病院

2. 年間活動実績

月	日	行事
4	1	オリエンテーション
	1, 5, 8, 12, 15, 19, 22	郡市医師会新型コロナウイルス会議
5	13	玉名在宅ネットワーク会議
6	6, 10, 13, 17, 20, 24, 27, 31	郡市医師会新型コロナウイルス会議
	8	玉名在宅ネットワーク会議
7	1, 5, 8, 12, 15, 19, 22, 26, 29	郡市医師会新型コロナウイルス会議
	12	玉名在宅ネットワーク会議
8	2, 5, 9, 12, 16, 19, 23, 26, 30	郡市医師会新型コロナウイルス会議
	9	玉名在宅ネットワーク会議
9	11	有明地区研修医合同カンファレンス
	2, 6, 9, 13, 16, 20, 27, 30	郡市医師会新型コロナウイルス会議
10	14	玉名在宅ネットワーク会議
	4, 7, 11, 14, 18, 21, 25, 28	郡市医師会新型コロナウイルス会議
11	11	玉名在宅ネットワーク会議
	1, 4, 8, 11, 15, 18, 22, 25, 19	郡市医師会新型コロナウイルス会議
12	9	玉名在宅ネットワーク会議
	2, 6, 9, 13, 16, 20, 23, 27	郡市医師会新型コロナウイルス会議
1	13	玉名在宅ネットワーク会議
	6, 10, 13, 17, 20, 24, 27, 31	郡市医師会新型コロナウイルス会議
2	10	玉名在宅ネットワーク会議
	3, 7, 10, 14, 17, 21, 24, 28	郡市医師会新型コロナウイルス会議
3	17	玉名在宅ネットワーク会議
	3, 7, 10, 14, 17, 28, 31	郡市医師会新型コロナウイルス会議
	14	初期臨床研修 修了式



2019年 最初の教育協力協定調印式

3. 活動報告

① 教育活動

◆ 特別臨床実習

熊本大学医学部の1チーム3週間の特別臨床実習(総合診療科 クリニカル・クラークシップ)をくまもと県北教育拠点で受け入れています。

本年度も各学生に入院患者の担当を割り当て、それぞれが日常診療業務に医療スタッフの一員として診療に参加し、診療の中から自らのクリニカルクエストを見出し、これに基づいた論文検索から担当患者への適応までを期間内で実践することとし、学習成果の発表を抄読会形式で実施し、評価の場としております。

新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い、時に訪問看護実習が中止されたり、実習そのものが中断されることがあり、院外実習のカリキュラムが十分に遂行できない状況がありました。そんな逆境の中でも訪れた学生は積極的に実習に参加し、コロナ禍でこそ経験できた実習を含め、最低限の成果は得られたものと考えます。

2022年度以降、依然としてCOVID-19診療を行いつつ、診療を通じた教育を更に発展させ実行する為には、科学に基づいた予防策を十分に実施し、指導医、専攻医、研修医、医学生の「屋根瓦式」の指導・教育体制が不可欠です。今後の引き続き多くの医学生が満足できる地域での医学教育の環境、質の向上に努めたいと思います。

ゆっくりだけど、確実に前進



救急外来に設置された安全キャビネットとLAMP機器

くまもと県北教育拠点における週間スケジュール

1 - 2 週					
	月	火	水	木	金
7:30			プライマリケア レクチャー	プレゼン研修	
8:00	救急合同 カンファ	モーニング レクチャー			
8:30	医局ミーティング/総合診療科入院患者棟回診				
9:00	外来研修	外来研修 or 訪問看護	外来研修	外来研修 or 訪問看護	外来研修
13:30	外来レビュー	外来レビュー	訪問診療 or 緩和ケア回診 (不定期)	外来レビュー/ 各種講義	外来レビュー
15:00	病棟研修	リエゾン カンファ		病棟研修	病棟研修
16:30	患者 カンファレンス	病棟研修			皮膚科合同 カンファ
17:00	振り返り				週間振り返り
17:30	自己研修				

3 週					
	月	火	水	木	金
7:30			プライマリケア レクチャー	プレゼン研修	
8:00	救急合同 カンファ	モーニング レクチャー			
8:30	医局ミーティング/総合診療科入院患者棟回診				
9:00	外来研修	外来研修 or 訪問看護	外来研修	外来研修 or 訪問看護	外来研修
13:30	外来レビュー	外来レビュー	訪問診療 or 緩和ケア回診 (不定期)	外来レビュー/ 各種講義	外来レビュー
15:00	病棟研修	リエゾン カンファ		病棟研修	病棟研修
16:30	新患 カンファレンス	病棟研修		TMEC	皮膚科合同 カンファ
17:00	振り返り				週間振り返り
17:30	自己研修				

- プライマリケアレクチャー：
熊本県地域医療支援機構で受講可能なオンラインレクチャー
- モーニングレクチャー：
臨床のみならず、地域医療に関するレクチャー
- リエゾンカンファ：
総合診療科入院患者の退院に向けての目標設定、艦長調整を多職種で検討するカンファレンス
- TMEC：
クリニカルクラークシップ医学生による担当症例についての発表会



◆ 初期臨床研修(総合診療科研修)

2022年度はくまもと県北病院の基幹型研修プログラムに8名の研修医がマッチし、基幹型2年次4名と国立熊本医療センタープライマリケアコースの協力型として1名、計13名の初期臨床研修医(研修医)を受け入れました。くまもと県北教育拠点は、総合診療科研修および地域医療研修を担当し、指導を行いました。

まず総合診療科研修で研修医は、外来・入院・訪問診療を研修し、自らが診療の始めから終わりまでを一貫して実践し、研修医中心の参加型研修を実践しました。研修医は患者を「主治医」として担当し、指導医との連携の中で中心的な役割を担います。この事で、研修医からは「自分の患者」という意識が芽生え、責任感と医師になったことの実感が得られたとの評価を得ています。

今年度は、コロナウイルス感染拡大の影響を受けつつ、十分な予防策を取った上、可能な限りの実習を実践しました。

結果、2023年度の基幹型卒後臨床研修医は7名マッチを達成しました。

◆ モーニングレクチャー

モーニングレクチャーとは…

- * 各診療科、部署のエキスパートから実践に即した知識や技術を学ぶ場です。写真は、眼科医による眼底鏡の使い方指導の風景です。
- * 指導は医師に限らず、様々な職種のスタッフに協力していただき、幅広いテーマの研修が可能となっています。



◆ 講演会・セミナー

コロナウイルス感染の蔓延で講演会・セミナーは多くがオンラインとのハイブリッド開催となりました。その中で「日本内科学会九州地方会」「有明地区研修医合同カンファレンス」「日本プライマリ・ケア連合学会九州地方会」はWEB開催となり、初期研修2年次の嶋永先生が症例発表を行いました。尚、嶋永先生は内科学会地方会で奨励賞を受賞されました。

◆ 総合診療専門医(専攻医)研修

くまもと県北教育拠点およびくまもと県北病院では、熊本大学総合診療専門研修プログラムの「総合診療Ⅱ」、「内科研修」、「小児科研修」および「救急研修」を実施しており、2022年度は1名の専攻医が研修しました。彼らは自らの診療研修にとどまらず、初期研修医、医学生の教育の一端を担っています。この為、病院機能もかなりの部分で専攻医に依存する部分も多くなっており、専攻医の負担を軽減するシステムの構築(働き方改革)と総合診療専門研修プログラムへのリクルートは重要になっています。その様な中、2023年度からは2名の新しい専攻医を迎えることになり、今後の発展に期待されます。

Ⅱ 診療

くまもと県北病院で、総合診療科での外来および入院診療を行っています。また、他診療科からの相談(院内コンサルテーション)や救急診療にも携わりました。

総合診療科での診療に当たり、くまもと県北教育拠点に常駐する指導医5名(内科専門医・指導医、プライマリケア認定医・指導医、病院総合診療認定医・指導医、リウマチ専門医、総合診療専門医、家庭医療専門医、血液内科専門医)の他、研修医、地域医療・総合診療実践学寄附講座の教員も外来診療、救急医療に携わりました。

くまもと県北病院 総合診療科外来担当医表

月	火	水	木	金
小山	小山	田宮	松井	小山
草野	草野	草野	小山	中村
中村・下地	中村	下地	下地	
佐藤(午後)				佐藤(午後)

Ⅲ 年間診療報告

玉名拠点開設から8年目となりますが、医学生、初期研修医、専攻医および地域医療・総合診療実践学寄附講座スタッフがチームを形成し、総合診療科外来として外来診療および他診療科からのコンサルト対応を行うとともに、平日の救急外来を担っています。コロナ禍で受診控えで受診患者数が減少する中でも、入院患者数は徐々に増加傾向にあります。

また、救急診療では受入件数もくまもと県北地域最多を維持しており、不応需率も低い値で推移しています。



2022年度 研修医 全12名
くまもと県北病院基幹型：11名(1年次：8名、2年次：3名)
熊本医療センター：1名(2年次)

河浦教育拠点

1. 活動概要

河浦教育拠点は2021年に天草市立河浦病院に設置され、その年の10月よりレジデント1名の受け入れを開始しました。また、クリクラとして総合診療、地域医療で熊本大学医学部の学生を受け入れています。2022年度も総合診療5名、地域医療2名を受け入れました。今後もさらに受け入れ数を増やすことを目標にしています。

2. 年間活動実績

クリクラとして総合診療、地域医療ともに希望がある際に受け入れを行う。同時に1～2名程度。

3. 活動報告

I 教育活動

- クリクラ
総合診療 5 名、地域医療 2 名。その他、個人的に申し入れがあった他大学学生の病院見学・実習あり。
- 初期研修
熊本赤十字病院より 4 名
- 後期研修
総合診療科 本田医師

II 診療

- 外来担当
鶴田：月・火・水
本田：木・金

III 年間診療報告

◆ 診療

外来患者数、入院患者数、在宅診療患者数とも、1年前と比較して患者数の増加があります。1年前は途中までレジデントがおらず総合診療科医一人だったため、医師数増加したことも患者数増加の一因ではありますが、それだけではなく、特に外来、在宅については着実に総合診療科への患者の認知、定着があると考えられます。実際、自分自身の外来予約患者数は昨年に比較し増加しています。また、レジデントは特に発熱外来で外来診療に大きく貢献してくれました。

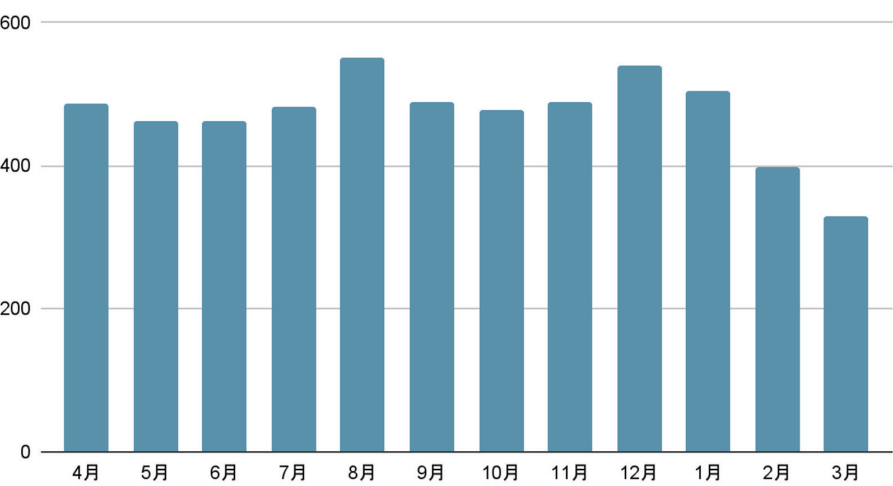
◆ 院内活動

在宅業務の院内職員を中心に、院内活動の活性化を図ってきました。2022 年春からは、院内多職種メンバーの意欲から、Advanced Care Planning（ACP）についての活動を院内外で行っていくことを開始しました。そのため、ACP 委員会を院内に設置し、勉強会や広報活動などを開始するようになりました。また、院内外での勉強会などの活動を行ううえで必要なファシリテーションスキルを磨きたいと院内有志から希望が挙がり、ファシリテーションの勉強会を不定期ですが行うようになりました。現在も院内スタッフのスキル向上に取り組んでいます。その他、パソコンや携帯電話操作が苦手な職員を対象に ZOOM の使い方講習を行い、オンライン勉強会への参加を促す取り組みも行いました。

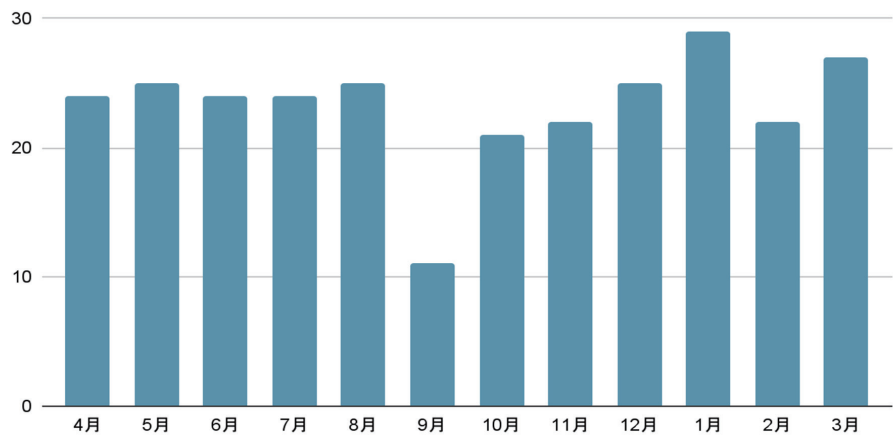
◆ 地域活動

天草西部地区地域の多職種合同の連携チーム「しきちの会」のメンバーとして多職種とのかかわり、研修会などの取り組みをおこなってきました。一般向けの勉強会はコロナ禍のためなかなかおこなえませんでした。3月の河浦地区での祭りには病院として参加し、健康に関する啓発活動を行いました。また、行政と連携し、河浦地域で比較的多い糖尿病への啓発活動、健診の啓発活動、病院との関わりのない高齢世帯への訪問調査などの検討や実施を行ってきました。その他、当院は国診協関連病院であることもあり、国診協若手の会世話人として全国規模で国診協の勉強会などを行うメンバーとして活動しています。

外来患者数



訪問診療数



IV セミナー・勉強会等

- 6月22日 院内勉強会（成人学習）
- 6月頃放送 ケーブルテレビ健康講座（フレイルについて）
- 9月14日 症例勉強会（肝内胆管癌症例：本田先生発表）
- 10月26日 地域多職種勉強会（ACP）
- 11月1日 社会福祉協議会講演会（糖尿病）
- 11月25日 国診協若手の会勉強会（診療所経営）
- 2月24日 国診協若手の会勉強会（行政との付き合い方）
- 2月27日 院内勉強会（ACP）



5 熊本県医師修学資金貸与制度

1. 地域医療ゼミ

I 概要

熊本県医師修学資金貸与制度を利用している学生は32名おり、毎月1回、地域医療に関する興味・関心を深めることを目的として、学生達で企画した内容を中心に「地域医療ゼミ」を開催しています。

今年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、主にリモートでの開催となりました。そのような中、遠隔地の講師によるセミナーの開催等、オンラインの利点を生かしたゼミを開催することが出来ました。

なお、第1回ゼミは、新入生の歓迎をかねて自治医大生、県外卒の学生も参加できるよう対面とリモート（Zoom）のハイブリット方式で実施し、また、第11回ゼミは、6年生の卒業を祝って追出しゼミとして対面で実施しました。

1年生	1人
2年生	5人
3年生	5人
4年生	7人
5年生	6人
6年生	8人

II 活動報告

◆ 第1回地域医療ゼミ（2022年4月21日／対面とオンラインのハイブリット方式で開催）

新たに熊本県医師修学資金貸与学生として入学した1年生と自治医大の1年生の自己紹介、学年を超えたグループを作って歓談を行うなど、学生間の親睦を深めました。

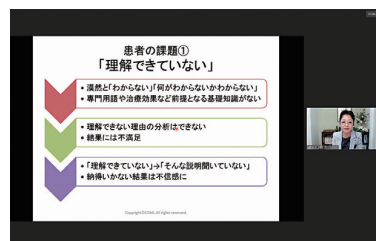


◆ 第2回地域医療ゼミ（2022年5月19日／オンラインにて開催）

熊大生が語る、熊本大学のキャンパスライフとキャリアと題して、自治医生も聞くという観点から熊本大学医学部の6年間や地域卒の義務とキャリアについて、熊本大学の学生から発表がありました。

◆ 第3回地域医療ゼミ（2022年6月16日／オンラインにて開催）

多職種連携について、ささえあい医療人権センター COMLの山口育子氏から「患者と医療者が協働する医療を目指して」と題して講演をいただき、患者が医師に求めるインフォームドコンセントとは、患者が医師の説明を理解するために、医師として何をするべきか等について講師のお話をお聞きしました。



◆ 第4回地域医療ゼミ（2022年7月21日／オンラインにて開催）

8月9日、10日で予定されていた夏季地域医療特別実習について、地域医療・総合診療実践学寄附講座及び地域医療支援センターの教員からの説明を受けました。学生たちは、夏季実習のスケジュール、当日の各自の行動、新型コロナ感染防止対策等について、それぞれ確認をしていました。しかしながら夏季実習については直前に中止が決定しました。

◆ 第5回地域医療ゼミ（2022年9月15日／オンラインにて開催）

熊本県医師修学資金貸与医師・学生、自治医科大学生・卒業医師が義務履行期間中必ず勤務する必要がある第2グループの知事指定病院及び第3グループの病院等のうち勤務期間の換算が第2グループ扱いとなる診療所について、リモートでの説明会（第1回）を実施しました。

第1回は、上天草総合病院、公立多良木病院、湯島へき地診療所の3施設から説明を受けました。参加

した学生・医師たちは、そこで勤務する医師から普段の医療活動の様子や専門医資格の取得等キャリア形成の実情、勤務先での指導状況等についての説明を受け、将来の勤務についてイメージを膨らませていました。

◆ 第6回地域医療ゼミ（2022年10月20日／オンラインにて開催）

熊本県医師修学資金貸与医師・学生、自治医科大学生・卒業医師が義務履行期間中必ず勤務する必要がある第2グループの知事指定病院及び第3グループの病院等のうち勤務期間の換算が第2グループ扱いとなる診療所について、リモートでの説明会（第2回）を実施しました。

第2回の説明会では、阿蘇医療センター、小国公立病院、河浦病院、栖本病院、新和病院、御所浦診療所からの説明を受けました。



◆ 第7回地域医療ゼミ（2022年11月17日／対面にて開催）

シネメデュケーションとして、医療をテーマにした動画を視聴し、グループに分かれて感想を話していました。災害時トリアージについての内容に、熊本地震と度々起こる災害の経験を重ね、改めて医師としての責務を学べた貴重な時間になりました。

◆ 第8回地域医療ゼミ（2022年12月15日／オンラインにて開催）

今回は、自治医科大生の企画で、実施しました。自治医科大の概要について説明を受けた後、グループに分かれて、メディア授業のメリット・デメリット、自治医大卒の現役医師へのインタビューをとおして、現役医師のオンライン活用事情について理解を深め、内容に関する感想を話しました。

◆ 第9回地域医療ゼミ（2023年1月19日／オンラインにて開催）

「制度とキャリア」をテーマにゼミを開催しました。最初に当センターの教員から、専門医制度の内容や運用の状況について説明を受け、次に県医療政策課から9月に更新された熊本県キャリア形成プログラムの説明、女性のライフイベントと義務年限の取り扱いについて説明を受けました。そして最後に3人の初期臨床研修中の修学資金貸与医師から臨床研修の現状についての報告がありました。

◆ 第10回地域医療ゼミ（2023年2月17日／オンラインにて開催）

熊本県医師会が主催し、熊大病院地域医療支援センターと日本医師会が共催となる「令和4年度医学生・研修医等をサポートするための会セミナー」に参加しました。今回のテーマは、「医師の育休とキャリアについて考える」で、育児休業を経験した2人の男性医師から講演いただきました。また、講演後「育休とキャリア」をテーマにグループワークも行われました。

◆ 第11回地域医療ゼミ（2023年3月24日／対面にて開催）

今年度最後となったゼミは6年生の追いゼミとして、対面による開催となりました。学生18名が参加し、卒業生挨拶、花束贈呈で6年生の卒業を祝いました。また、皆勤賞、功労賞の表彰、次年度より新たな幹事学年となる4年生代表からの挨拶や来年度の地域医療ゼミの実施計画についても説明がありました。



2. 令和4年度卒業生

● 吉田 梨紗

心折れては立ち直りを繰り返し、崖の端にしがみつくような心地にもなりつつ何とかここまで上って来ることが出来ました。それもこれも両親や友人、寄附講座の先生方を始めとする周囲の皆様の助力あつての事であり、この場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。また修学資金貸与制度による金銭的不安面の解消にも大いに助けられて参りました。その御恩の大きさによって採らずに済んだ選択もあり、これからの人生報いる思いで貢献をしていきたい所存です。

お世話になった手前、今までの大学生活の後悔を包み隠さず述べるからこそ必要なのではないかと思いますが、そうした思いで全てを総括する境地には誠に残念ながら未だ心が至れておりません。それでも書けることがあるならば、もっと私は人の優しさを信じるべきでした。人間悩みは尽きぬものですが、独りで抱え込むより周りに小出しにする方が恐らく総合的に幾分かマシな結果を招いたのと思います。

その独りで思うことの危うさを実感した例を一つ。先日、所属する弓道部で数年ぶりに追い出しコンパと射会が開催されました。入学当初は弓道経験者で電車通学生だったことから足繁く通った弓道場も、最近は忙しさやコロナ禍等で随分と遠くなり。そうして離れてしまった日々の中では部活と言うと幹部時代の失敗や引退後の後悔ばかり思い起こされるようになってしまい、遂には先の会への参加でさえ一瞬の逡巡が生じるほど部への所在がなくなっておりました。しかし、最後に在校生から送られたアルバムには忘れてしまっていた自らの弾けるような笑顔が沢山載っており、後輩の心遣いと懐かしさに感涙しました。この思い出を無視してしまっていたのかと愕然とするほどまでに物の見方は心境と環境に左右されるのだから、たまには他者の視点を取り入れることを意識せねばと強く思う出来事でした。

未だ道半ばであり、今後も険しい道のりと思いますが、反省を胸に出来る限り抱え込み過ぎず前に進めればと思います。

● 天野 ゆり

念願だった医学部に入学が決まり、胸が高鳴りながら入学式に臨んだのもついこの間のこのように感じます。浪人を経ての入学なので、自転車で通い始めた通学路はとても感慨深いものでした。1年次は部活の新歓や専門・教養科目で黒髪・本荘キャンパス間を行ったり来たりし、部活が決まると放課後の練習や強練、大学間の対抗戦、西医体などで本当に毎日が慌ただしく過ぎていきました。2年次は、親しい友人もでき大学にも慣れてきた頃で少しは楽になるかと思いきや、解剖実習・座学・合間の車校通い・部活の幹部交代であっという間に過ぎ、…。3年次になると勉強内容も医学総論から各診療科に変わり、ようやく医学を学んでいるという実感がわき始めました。医学部は入学してから試験が多いとは伺っていたのですが、3年次後期～4年次前期にかけてのポリ前試験やCBT、OSCEは長期間ずっと試験勉強が続くので私にとって精神面でとても鍛えられた期間でした。

実習が始まると朝が早くて冬の時期は大変でしたが、身体診察のとり方や手技を見る機会も得られ、患者を通してこれまで勉強してきた内容への理解がより一層深まりました。地域枠では部活で中々ゼミに参加することができなかったのですが、1～2年の夏期実習で天草と水俣に行ったことをよく覚えています。私は熊本市内の生活しか経験したことがなかったのですが、実際に其々の地域に行ってみると美味しい食べ物や特産物、素敵な景勝地があったりと地域の魅力に触れることができました。一方で高齢化や診療科の偏り、医療・公共交通機関へのアクセスのしにくさなど地域ごとに抱える問題も異なり、医療者として熊本の地域医療の実情を把握していく責務があると感じました。大学での6年間には楽しいだけでなく、自身の将来に悩んで苦しかった時期もありましたが支えてくれる家族や友人、周囲の方々の存在は大変大きかったです。これから医師としての人生が始まりますが、志を忘れず時にはリフレッシュしながら、患者に寄り添う医師になれるよう精進したいと思います。6年間大変お世話になり、誠にありがとうございました。

● 野口 実奈

6年前に地域枠の学生として入学してから、時がたつのは早いもので卒業しようとしています。6年間の勉強は入学前に想像していたものよりもとても大変で、多くの苦労や努力がありましたが、仲間と切

磋琢磨しここまで来ることが出来ました。みんなと過ごした6年間は自分の人生の中で忘れられない思い出です。特に国試前には勉強部屋で、みんなで励ましあいながら勉強をしたのも今ではいい思い出です。

低学年の頃は座学がメインになりますが、学年も上がってくると実習が増え、楽しみも増えました。座学はよくわからないと思うことが多いですが、学年が上がるにつれ以前学んだ基礎がとても大切であることを身に染みて実感しました。

高学年になると、朝は早く夕方まで実習と大変なことも多かったですが、あと数年後には自分もこうやって働いていくという自覚も出てきて、楽しい日々を過ごすことが出来たと思います。特に地域医療では町の方たちとより近くで話をすることができ、手技の面でも多くの経験をさせて頂きました。どの実習よりも一番楽しく参加できたと思います。

ここ数年はコロナ禍ということもありしばらく開催されていませんが、私が入学したばかりのころは夏季合宿が行われていました。他の学生と異なり夏の合宿に参加し、熊本の地域のことについて調べ、その土地の方々と話をしたり郷土料理を食べたりと交流をするというのは本当にいい経験になったと感じています。熊本の地域について深く知ることができ、将来地域で働くことがより楽しみになりました。

4月からは人吉医療センター、来年の1月からは熊本大学病院で研修させていただく予定です。この6年間で学んだことがしっかりと生かせるように頑張ります。

● 松岡 直樹

6年間大変お世話になりました。入学時は6年間も学生をするなんて長いなと思っていましたが、今思い返すとあっという間の6年間でした。

熊本地震に被災しながら浪人を経験し、現役の頃から志望していた本学へ合格した日の喜びを昨日のこのように覚えております。思い返せば主に部活にバイト、勉強三昧の大学生活でしたが、6年間で様々な経験を通じて人間的に成長できたのではないかと感じます。

大学1年生では高校まででやってきた勉強との質の違いに慣れず、2、3年生では覚える知識量の多さに戸惑っていたのを思い出します。4年生に進級する頃から新型コロナウイルスの流行が始まり、今までの生活から一変し、様々な場面で制約が生まれ戸惑う毎日でした。地域ゼミでの夏季実習もここ数年無く、自治医科大学の学生、後輩や先輩、諸先生方との交流な少なかったのがとても残念でなりません。4年生からの病院実習では座学で学んだことがどの様に臨床現場で使われているのか、新しい知識を常に学ぶことの大切さなど、様々なことを学ぶことができました。6年生では卒業試験に落ちて1年生以来の再試になってしまいかなり精神的に参っていました。ただ自分の甘さを自覚しそこから更に勉強に励めたので、結果的には良い経験だったと思います。

4月からは国立病院機構熊本医療センターで初期研修が決まっております。いよいよ医師として社会に出ることに期待と不安の両方を感じております。正直私なんか先輩方の様に働けるのか、という不安の方が大きいですが、初期研修を通して知識・技術の研鑽に励めたらと思います。まだまだ未熟ではありますが、これからは熊本の地域医療に少しでも貢献できるように頑張っていく所存です。

最後になりましたが、地域医療・総合診療実践学寄附講座の先生方、スタッフの皆様に感謝申し上げます。大変お世話になりました。ありがとうございました。

● 渡邊 光紗

医学部6年間を振り返るにあたり、まずは写真を見返しました。初めての自炊、部活動のイベント、組織学のスケッチ、西医体、夏季実習で訪れた天草・人吉、ポリ前授業のメモ書き、旅行の写真などがあり、充実した大学生活を送ることができたと感じています。Covid 19の流行以降は、ほとんどが勉強に関するスクリーンショットとなり、合間合間には自然や動物の写真が多く見受けられ、癒しを求めているのだと思います。医学生にとって、自宅でじっくりと学習する時間が増えたことは結果的に良かったと思うと同時に、人との関わりが途絶えてしまった時に、一縷の不安を覚えたことが思い出されます。5・6年生時の実習も一部は非対面での実施となり、実際に患者さんとコミュニケーションを取る機会が少なくなったことは今でも心残りです、今後取り返して行かなければと思っています。

地域枠として入学して以来の活動に絞って振り返ると、近年は制約もありましたが、毎月地域医療ゼミや夏季実習、国保地域医療学会、COCODE！の対談など様々な活動に参加させていただき、地域医

療に関する見聞を深められたこと、大変有り難く感じております。特に夏季実習では、実際に各地域を訪れ、情報を収集し、現地の方々の意見を踏まえて自分たちなりの対応策まで考えるという良く練られた実習計画のお陰で、地域で本当に求められる医師像とは何か、自分が将来目指すべき地域医療の在り方とは…などと深く考えさせられました。それらが叶ったのは、地域医療・総合診療実践学寄附講座の皆様、の企画運営と県庁医療政策課の職員の方々のサポート、その他にも夏季実習や講演会などでお世話になった方々のご尽力あってこそだと思います。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。いつも暖かく気遣ってくださり、誠にありがとうございました。

最後になりますが、今後も益々精進を重ね、熊本の地域医療を支える立派な医師になるべく努力することを誓い、結びとさせていただきます。6年間ありがとうございました。

● 相星 景子

国家試験が終わり新生活の準備で片付いた部屋を眺めていると、6年という月日を熊本大学で過ごしたのだと急に自覚して、誇らしくも少し寂しい気持ちが湧きあがります。

私が地域医療ゼミの一員となったのは二年生からでした。途中からの参加、そして熊本県外出身者で物珍しい存在であったのにも関わらず踏み込んでみようと思えたのは、同級生の存在も勿論のことですが先生方やスタッフの方々の温かい歓迎があったからこそだと思います。試験や部活、バイトに明け暮れて低学年を過ごしているうちにコロナ禍になってしまい、ゼミのメインイベントだと聞いていた夏季合宿に参加することなく6年間を終えてしまいましたが、ゼミの中心となった5年生では同級生の助けを多く借りながら企画するのは私にとって大きな経験と、熊本の地域に対する愛着のようなものがより深まったように感じます。

そして何より私にとって一番有り難く感じていたのは、年度始めに毎年設けていただいていた先生方との面談でした。高校生までとは違ってなかなか先生方に一学生として見ていただけることが少ない大学生活を心細く感じていたのですが、面談の時に勉強や進路のことだけでなく普段の生活や私個人の意見までもを聞いてくださる先生方に、不安や将来の展望などを表現できる場があったことが本当に有り難かったです。一学生に目を向けてくださるゼミの先生方やスタッフの方々、そして県庁の方々の温かい支援があったからこそ、途中からゼミに参加したことを後悔することは今まで一度もありませんでした。ご支援をしてくださった皆様や、6年間支えてくれた仲間達と過ごした熊本の地に感謝しています。

最後になりましたが、地域医療・総合診療実践学寄附講座の先生方、スタッフの方々、そして県の医療政策課の皆様、これまで多大なるご支援を誠にありがとうございました。これからもお世話なることと思いますが、少しでも県の地域医療のお力になれるよう尽力するとともにゼミのより一層の発展をお祈りいたします。本当にありがとうございました。

6 地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座

1. 活動概要

本講座は、熊本県の地域医療連携ネットワーク構想を推進するため、県知事が各医療圏域に指定する「地域医療拠点病院」への医師派遣により専門医療を実践するとともに、行政や医師会と協力しながら地域医療連携強化に努め、また、医師修学資金貸与医師や自治医科大学卒業医師へのキャリア形成支援、各医療圏域における医療機能の向上を図るための調査・研究を行うことを目的に、熊本県の寄附を得て、令和元年度から3年間を予定して設置されました。その後、それまでの実績に基づき、令和4年度からさらに3年間の予定で、本講座が継続されています。

本年度は、熊本大学病院の各診療科より選出された24名の専門医が本講座に所属し、ネットワーク推進医として地域医療拠点病院に派遣されました。ネットワーク推進医は、派遣先病院が求める専門医療に応じて派遣され、各医療圏域で不足する専門医療の提供に貢献しました。これにより、患者様がお住まいの地域で治療の完結が可能となり、一方で、より高度な医療を必要とする患者様に対しては、熊本大学病院をはじめとする高度医療機関への適切な紹介が進められました。また、若手医師と共に診療を行う中で専門的知識と技術の供与・指導が行われました。さらに、人的ネットワークの構築と共に情報ネットワークの構築に向けて、ICTを活用したくまもとメディカルネットワーク(KMN)の利用普及促進にも努め、その利用が徐々に浸透してきております。

2. 地域医療の現状分析と考察

各ネットワーク推進医からは、派遣先病院での勤務の中で見えてくる各医療圏域の現状や課題が報告され、その解決策の考察や提案がされています。それによりますと、ネットワーク推進医の派遣による専門医療の実践が、医師不足の解消のみならず、医療圏域全体の医療の連携を促進していることが見えてきます。また、今後患者様の高齢化がさらに進むことにより、多くの合併症を複数診療科でケアする状況が増え、単一病院での対応が困難になることが想定され、同じ医療圏域の病院が不足する医療資源を互いに補完し合うための体制の構築などが提案されています。

次年度も、ネットワーク推進医一同、熊本県の地域医療連携ネットワークの構築に貢献して参ります。

令和4年度(2022年度)地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座 教員等一覧											
部門	診療科名	定数	特任教員氏名 (ネットワーク推進リーダー)	職名	派遣先拠点病院	部門	診療科名	定数	特任教員氏名 (ネットワーク推進リーダー)	職名	派遣先拠点病院
内科	腎臓内科	12	泉 裕一郎	特任准教授	宇城総合病院	外科	消化器外科	4	小川 克大	特任助教	水俣市立総合医療センター
	呼吸器内科		猪山 慎治	特任助教	人吉医療センター、 山鹿市民医療センター		宮田 辰徳		特任助教	水俣市立総合医療センター	
			坂田 晋也	特任助教	阿蘇医療センター、荒尾市民病院		後藤 理沙		特任助教	くまもと県北病院	
			赤池 公孝	特任助教	小国公立病院、荒尾市民病院		脊川 卓也		特任助教	人吉医療センター	
	消化器内科		階子 俊平	特任助教	くまもと県北病院	成育医療	小児科	2	松尾 倫	特任助教	小国公立病院、 水俣市立総合医療センター
			具嶋 亮介	特任助教	阿蘇医療センター、熊本労災病院		宮村 文弥		特任助教	小国公立病院、 水俣市立総合医療センター	
			血液内科、 膠原病内科	宮本 英明	特任助教	山鹿市民医療センター	感覚・ 運動	整形外科	5	徳永 琢也	特任助教
	糖尿病・代謝・ 内分泌内科		坂田 康明	特任助教	熊本労災病院、熊本総合病院	久永 哲				特任助教	宇城総合病院
			小野 薫	特任助教	小国公立病院、上天草総合病院	湯上 正樹		特任助教		阿蘇医療センター	
			循環器内科	山本 正啓	特任助教	くまもと県北病院		松村 智世		特任助教	小国公立病院
	木山 卓也			特任助教	公立多良木病院	渡邊 文香		特任助教		小国公立病院	
	平川 今日子			特任助教	そよう病院	脳・神経・ 精神	神経精神科	1	日高 洋介	特任助教	熊本県立こころの医療センター
	合計 24 名										

派遣先地域医療拠点病院名	宇城総合病院
氏 名	泉 裕一郎
診療科名	腎臓内科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

ネットワーク推進医の業務として、週1回の腎臓内科外来診療と夜間維持血液透析患者の透析管理を行った。他診療科からの外来・入院患者のコンサルトに対応し、適宜診察・治療介入を行った。くまもとメディカルネットワーク(KMN)の利用普及のため、地域連携室、医療秘書課、総務課とのミーティングを重ね、院内利用体制の構築を進めた。各種講演会で、熊本県の地域医療の現状や、KMNの有用性などを紹介した。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

別紙データに示されるように、本事業が開始され腎臓内科が派遣される前(2018年)に比べ、2021年、2022年で外来初診・再診患者数は高い水準が持続している。近隣のクリニックからの患者紹介や、健診後の精査目的の受診が、患者増加の主な理由である。また、腎臓内科派遣の常勤医の診療活動により、入院患者数も増加が維持されている。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

2021(令和3年)度は、腎臓内科におけるKMNの文書送受信機能の利用普及を進めたが、2022(令和4年)度は、利用診療科を広げるため、地域連携室・医療秘書課・総務課と適宜ミーティングを行い、文書送受信機能の院内利用体制の構築に努めた。別紙データに見るように、連携施設のKMN利用増により文書受信数が増加するとともに、当院からの文書送信数も増加している。特に、本年度9月より、地域連携室・医療秘書課による文書送信体制が確立し、文書送信数が大幅に増加している。また、医師署名ありの文書数も増加してきている。KMNの新規参加者数も2021年度に比し増加しており、KMNの利用体制の構築が着実に進められている。

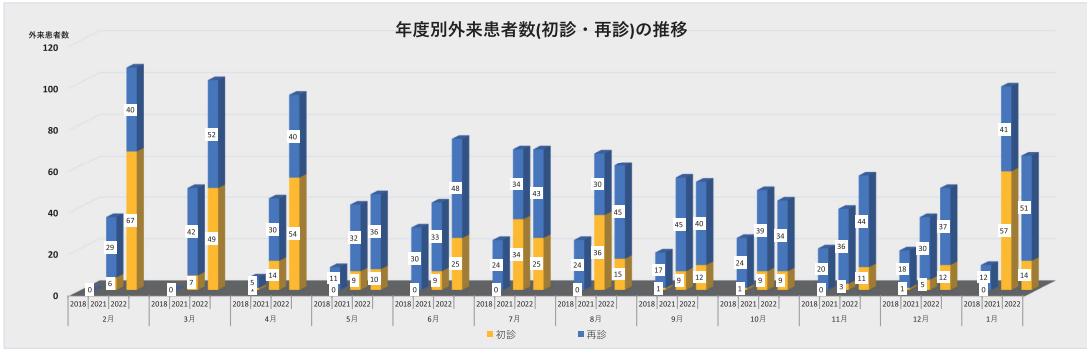
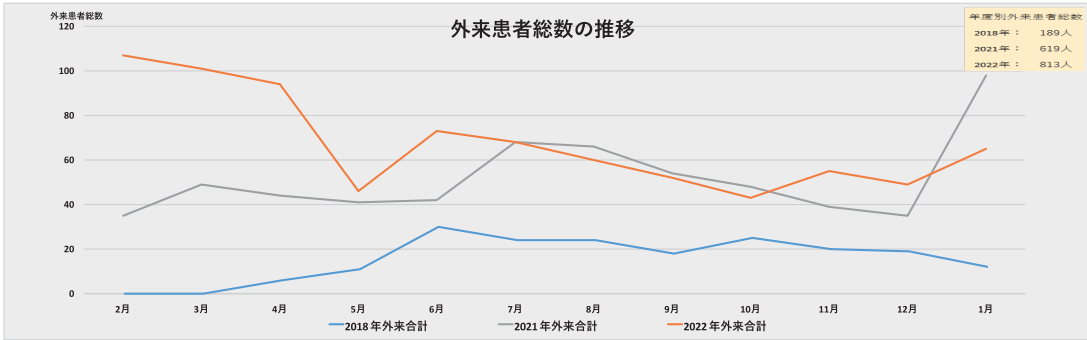
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

宇城総合病院は、宇城圏域の中核病院であり、地域の救急医療を行うとともに、高度医療機関への紹介や、急性期・回復期リハビリから転院までの調整も行い、他機関への橋渡しを行うハブ的な役割を担っている。人口対医師数の比較的多い熊本圏域と八代圏域に挟まれた、医師数の少ない地域にあり、東西に広い圏域の地域医療を支える上で、同院の役割は大きい。高齢者の多い地域で、地域包括ケアシステムの充実も求められており、地域連携室を中心に周辺施設との連携を維持している。今年度は、地域包括ケアシステムにおいてKMNを導入するために関連施設で会議を立ち上げるなどの活動も行い、地域医療拠点病院としての役割を積極的に果たしていると思われる。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

宇城総合病院の診療活動は、30名ほどの医師によって成り立っているが、そのうちの約3割は、ネットワーク推進医も含めた非常勤医師に頼る状況であり、同院にとって医師の確保は依然として重要な課題である。また、新たな医師の確保が難しい中で、他の地域と同様に、医師の高齢化が徐々に進んできており、今後の医師不足に拍車がかかる可能性が高いと感じられる。当科が関わる透析医療に関しても、腎臓内科より派遣のネットワーク常勤医が主に業務を行い、推進医(報告者)と定年後の嘱託勤務医師2名がそれぞれ週に1カールの診療を担当することでなんとか維持されている現状である。高齢で状態の安定しない患者も少なくない中、約80名の透析患者を管理するには不安な体制であり、今後も人的支援の継続と拡充が望まれる。

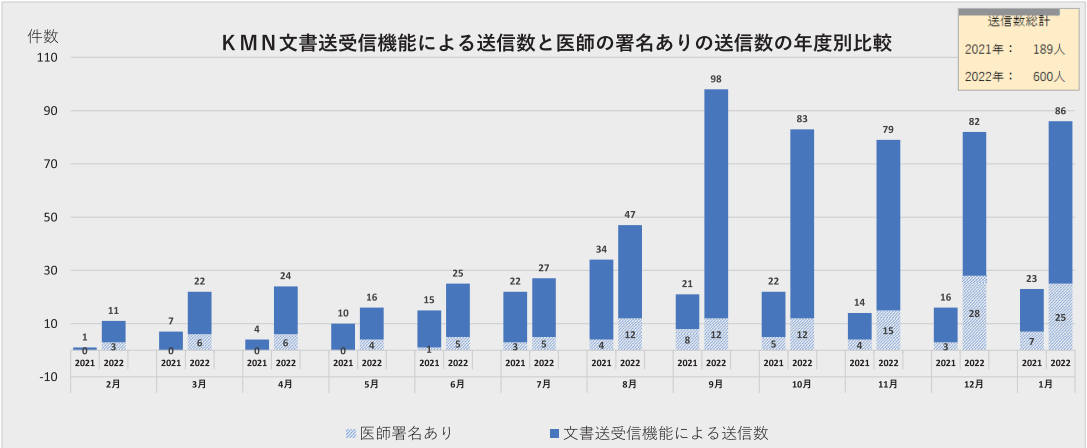
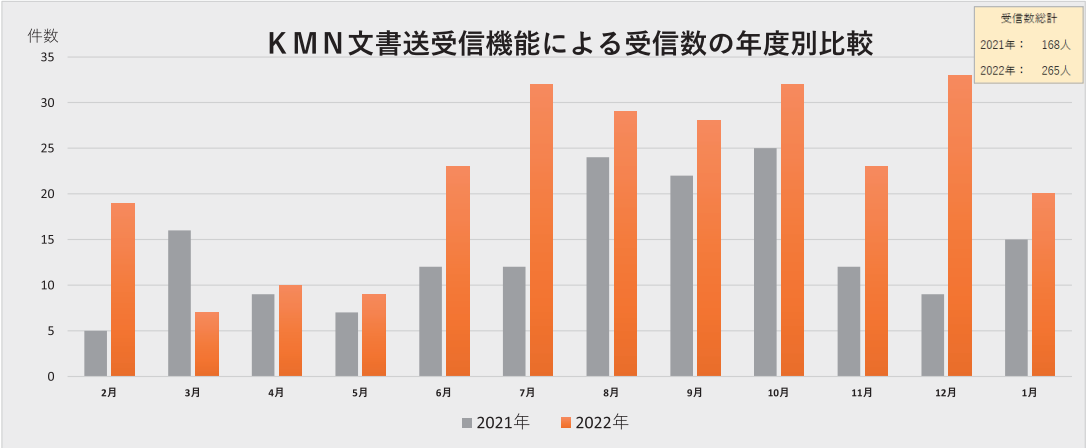
宇城総合病院 腎臓内科



新規参加者数総計

2021年：211人

2022年：263人



派遣先地域医療拠点病院名	山鹿市民医療センター、人吉医療センター
氏 名	猪山慎治
診療科名	呼吸器内科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

近隣のクリニック、医院からの紹介患者の診断治療、再紹介を行いながら、くまもとメディカルネットワークの推進のために、近隣医療機関への紹介、参加加入依頼を行ってきた。

呼吸器内科若手常勤医の症例相談、診断、治療方針のアドバイス、学会報告のアドバイス等を行ってきた。呼吸器内科常勤医不在の病院に対しては、他科常勤医からの呼吸器疾患コンサルト対応、診断、治療方針のアドバイスを行ってきた。また人吉医療センターでは、研修医を対象とした呼吸器疾患の診断に関するレクチャーも行い、研修医教育にも貢献している。

地域医療拠点病院に外来支援で貢献している一方、呼吸器内科医不足のため、常勤医不在の病院に対しては、入院治療が必要な呼吸器疾患の紹介を受けづらい状況は続いている。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

山鹿市民医療センターでの外来支援を行っているが、外来患者初診、再診患者は減少している。常勤不在の影響や発熱外来等に対応して頂く患者が増えた影響が考えられる。入院が必要な患者は、山鹿市民医療センター以外の病院に紹介されている可能性があり、常勤不在の病院の限界を感じる。

対照的に常勤医2名の人吉医療センター外来患者初診、再診患者は増加しており、呼吸器疾患の診療支援を十分に行え、地域住民の貢献は出来ていると考える。

常勤医師の有無は紹介患者数に影響があると感じる。全国的に呼吸器内科が少ない一方高齢化に伴い疾患ニーズは高い。呼吸器内科を志す医師を増やす努力を続けていきたいと思います。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

派遣先においてメディカルネットワークの送受信は増加している。

4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

- ①専門医療実践による診療支援：地域住民に専門的診断、治療を行った。
- ②若手医師への指導：学会報告や論文作成の指導、専門医取得の支援を行った。
- ③地域住民・医療従事者への啓蒙活動、専門的知識の提供：研修医向けの講義を行った。
- ④くまもとメディカルネットワークの普及：送受信数は増え、新規加入者も増加している。
- ⑤各医療圏における地域医療の現状と新たな方策の検討

人吉球磨地区の医療は常勤2名の負担が大きく、外来支援で何とか出来ているが、疲弊もみられ、時間外労働も多く、もう一名の常勤医の追加が必要である。

山鹿地区の医療は常勤医不在であり、外来支援のみではあり、他科の常勤内科の負担はある。常勤医の増加が望ましい。1名の常勤医だけであると負担が大きく、最低2名の常勤医の増加が望ましい。

呼吸器内科を志す医師を増やす努力を続けていきたいと思います。

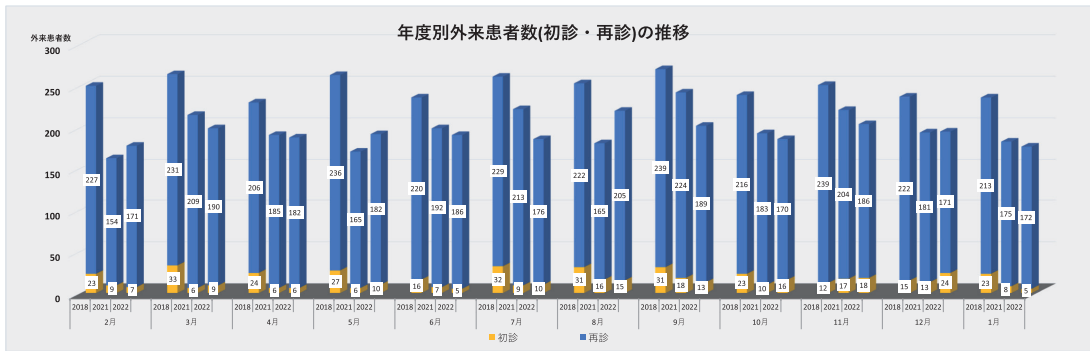
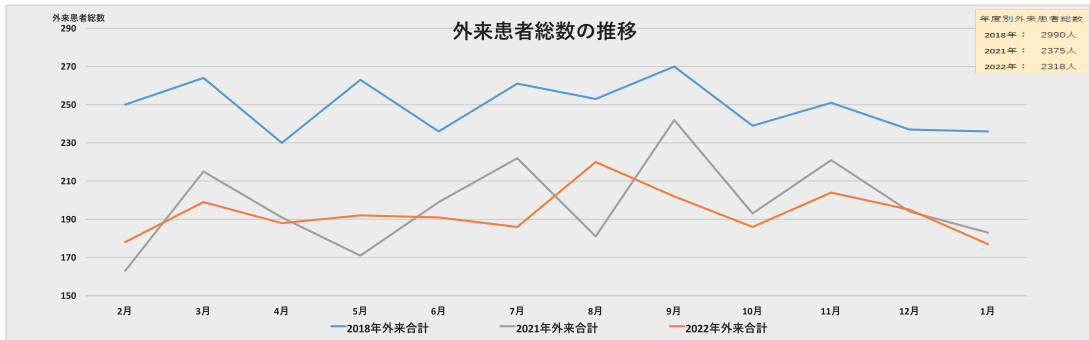
5. 地域医療における今後の課題・解決策等

地域枠医師や自治医大卒業医師を有効に地域拠点病院で勤務いただくため、専門外領域の疾患を診ていく必要があると考えます。地域枠医師にとって専門である狭い医療だけでなく、幅広い医療の提供が地域医療にとって望ましいと思います。地域枠医師にとって専門外の領域を診るのは不安でしょうから、初期研修医から専攻医の時期に専門医に加えて総合診療のトレーニングをつんで頂き、地域拠点病院派遣後も熊本大学からの外来派遣や熊本大学専門医との連携で垣根のない相談が出来る環境づくりを行って頂きたいです。

相談の際に、くまもとメディカルネットワークを利用しての相談が個人情報漏洩の心配がなく、利用しやすいと考えています。

地域医療においても最適な専門医療を患者さんに提供できるように、今後も努力していきたいと思います。ご支援の程、何卒宜しくお願い致します。

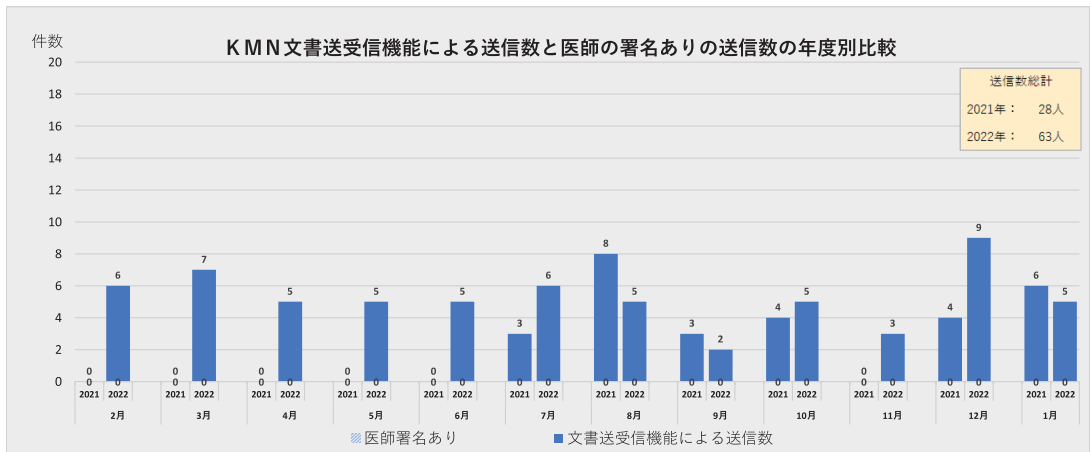
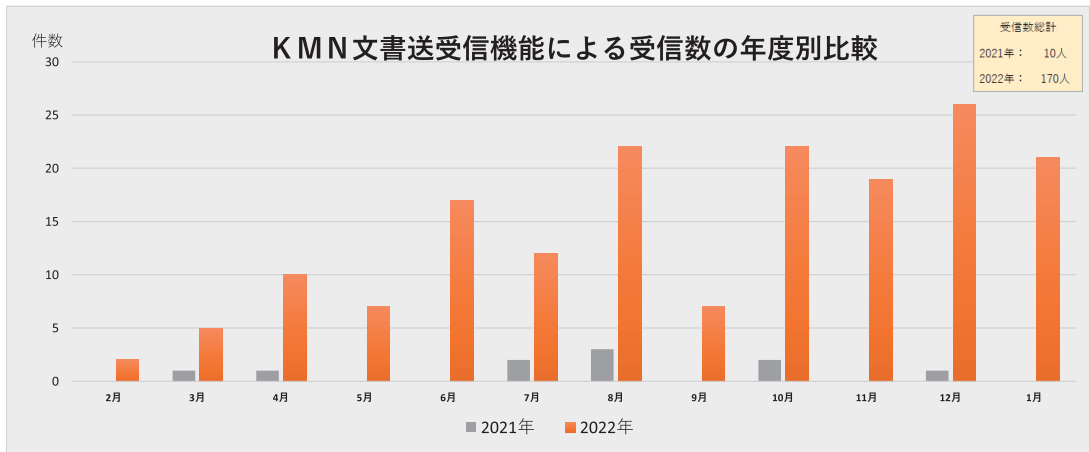
山鹿市民医療センター 呼吸器内科



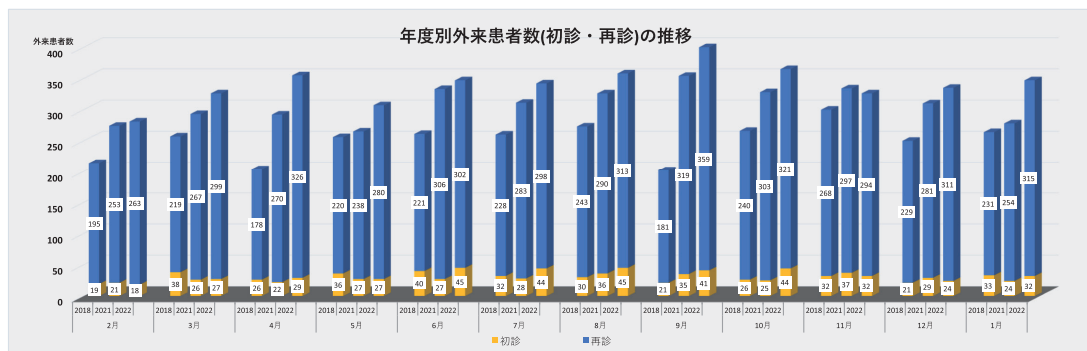
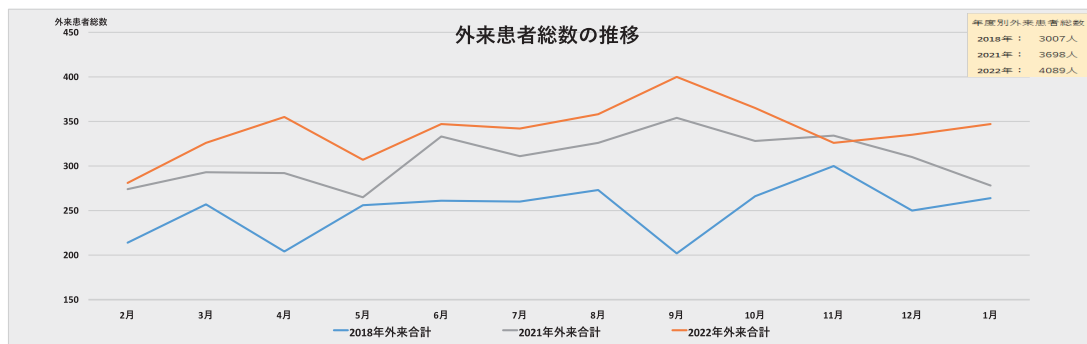
新規参加者数総計

2021年：33人

2022年：518人



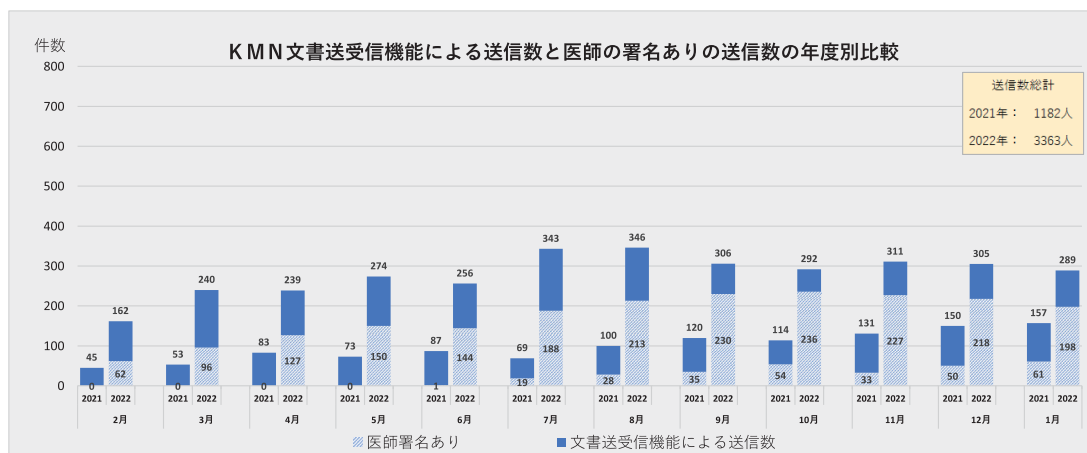
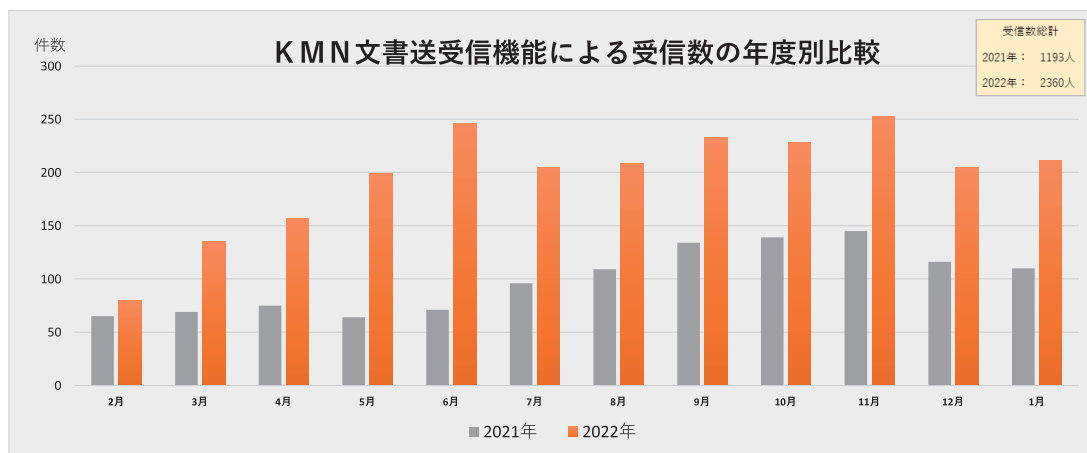
人吉医療センター 呼吸器内科



新規参加者数総計

2021年： 人

2022年： 人



派遣先地域医療拠点病院名	阿蘇医療センター、荒尾市民病院
氏 名	坂田晋也
診療科名	呼吸器内科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

【阿蘇医療センター】

- 毎週火曜日の外来診療を中心に勤務している。
- 阿蘇の医療圏においては呼吸器内科専門医療施設がなく、阿蘇医療センターの外来において呼吸器疾患に対する専門的な医療の提供を実践している。
- 阿蘇医療センターは、医局内で診療科間の垣根が低く、症例の相談を行いやすい雰囲気がある。呼吸器疾患に関しても、気軽に相談して頂けるような状況である。
- また、自治医科大学卒業医師が勤務しており、院内コンサルト症例を通して呼吸器疾患に対する専門的な知識の指導を実施している。

【荒尾市民病院】

- 毎週金曜日の外来診療を中心に勤務している。
- 荒尾市民病院には呼吸器内科の常勤医師がおらず、呼吸器疾患に対する専門的な医療の提供、院内コンサルトの対応を中心に行っている。重症度が高い症例や専門的検査を要する症例など必要に応じて近隣の呼吸器内科専門施設との連携を取りながら地域医療を実践している。本院より呼吸器内科専門医師の派遣を行うことにより、他診療科で診療に難渋している症例などのコンサルトがより円滑となり、医師同士のネットワークも広がってきており病院内での専門医療の提供体制が充実してきている状況である。
- 荒尾市民病院は臨床研修医が多く勤務しており、肺炎や肺腫瘍、COPD、気管支喘息、急性呼吸不全といった呼吸器疾患のコンサルト症例に対して、必要に応じて研修医への指導も実施している。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

【阿蘇医療センター】

- 呼吸器内科の外来診療患者数は下記のグラフに詳細なデータを示す。阿蘇医療センターにおける呼吸器内科外来の設置、専門医療の提供体制について、近隣のクリニックでの認知度も年々高まってきており、年間を通して患者数は増加傾向にある。クリニックからの紹介や院内コンサルトも定期的にあり、月に4-10例程度の初診外来症例を担当している。

【荒尾市民病院】

- 1カ月当たりの外来診療患者数は約30～50名程度である。
- 荒尾市民病院では、以前より呼吸器内科の外来でフォローしていた再診患者様の数が多く、金曜日の外来の予約枠が全て埋まっていることが少なくなかったが、令和3年度から4年度にかけて、専門的治療の後に安定した症例については、かかりつけ医や近隣のクリニックと連携を取りながら逆紹介も行っているため、再診の受診症例数はやや減少している月もある。外来診察枠にゆとりができた分、院内コンサルト症例を受ける件数は増加している。また、外来診療当日に臨時での院外からの緊急紹介依頼や院内の緊急コンサルト症例も引き受けている。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

【阿蘇医療センター】

- KMN文書送受信機能による受信数は、下記グラフの通り年間を通してやや増加傾向である。
- 地域連携室の担当者と連絡を取りながら、KMNに参加している病院への紹介時など病診連携にて利用を推進している。
- 医師署名ありの文書送信数がまだ少なく、今後他院紹介の際には医師署名ありでの送付数を増やしていくように接触的に推進していきたい。

【荒尾市民病院】

- 呼吸器内科の専門施設で最寄りの病院が大牟田天領病院、次いで近い病院がくまもと県北病院である。大牟田天領病院は福岡県にあるためKMNの利用ができないが、くまもと県北病院呼吸器内科へ紹介する際や、荒尾市内及び近隣のクリニックおよび病院への診療情報書の送受信にてKMNを活用している。
- これまでに、荒尾市民病院内でのKMN普及のため地域連携室の担当者を含めたWebミーティングを開催や、実際に呼吸器内科外来より地域連携室へ出向いて、データの取り込みや送付の手続き等、KMNを用いた病診連携の推進に取り組んだ結果、KMNの利用数は増加傾向にある。

上記のいずれの病院においても、KMNの利用件数は増加傾向であるもののまだ医師署名ありの文書送信数は少ない。本寄附講座によるネットワーク推進医師の派遣により、今後更にKMNの普及を推進することができると考える。ネットワーク推進医師を軸として各病院の担当者や他科医師を含めKMNの更なる普及を行っていきたい。

4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

熊本県地域医療拠点病院としての役割には、紹介患者に対する医療提供、へき地診療所への医師派遣等による地域のかかりつけ医の支援、地域の研修医、専攻医への教育、勤務環境改善に向けた取り組みがある。

【阿蘇医療センター】

地域のかかりつけ医からの紹介患者に対する医療提供が実施されている。特に、救急医療については阿蘇地域における救急診療を一手に担っている状況であり、かかりつけ医からの信頼が厚いと感じる。常勤医師によるへき地診療(波野診療所)で定期的な外来診療も実施されている。また、呼吸器疾患については当科への研修医や内科専攻医からの院内コンサルト症例を通じて専門医療の知識・技術の指導を実施している。

【荒尾市民病院】

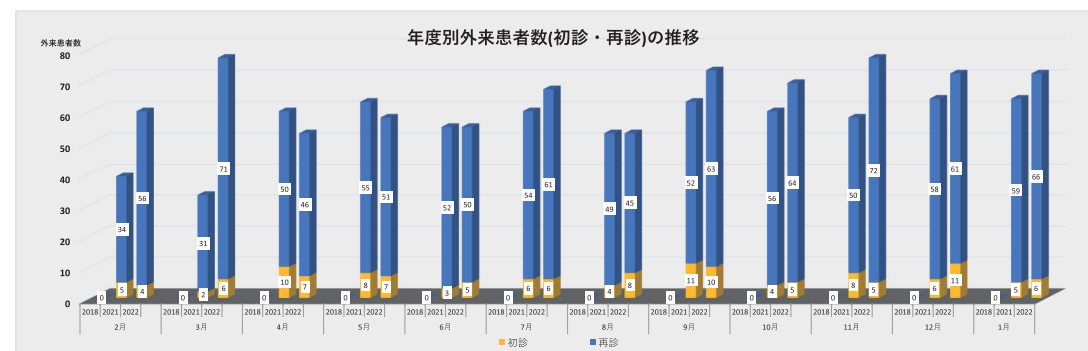
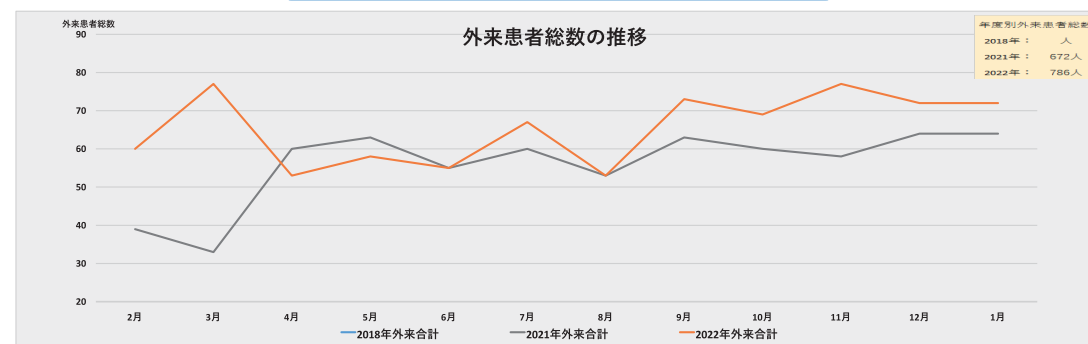
地域のかかりつけ医からの紹介患者に対する医療提供が実施されている。呼吸器疾患についても、呼吸器内科への院内コンサルトで専門的助言を受けながら可能な限り自院内で治療が完結できるよう努力されている。そのような症例でも、呼吸器内科の専門施設でなければ検査あるいは治療などの対応が難しい症例については、近隣の専門機関への紹介を提案している。勤務する研修医の数が多く、救急医療を含めた地域医療研修に熱心に取り組まれていると感じる。また、呼吸器疾患については当科への研修医からの院内コンサルト症例を通じて専門医療の知識・技術の指導を実施している。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

荒尾市民病院では院内に呼吸器内科常勤医師がおらず、また近隣のクリニックでも呼吸器内科を専門とする医師が不在である。肺炎や気胸、気管支喘息発作をはじめとした呼吸器疾患で入院加療が必要なケースは内科、外科を含め各診療科が主治医となり対応しており、呼吸器内科への院内コンサルトや共診にて治療を行っている。また、胸膜炎・膿胸や間質性肺炎、肺癌など専門的加療を要する疾患については、近隣の呼吸器内科専門施設への転院なども含め対応している。課題としては、高齢者が多い施設であり呼吸器疾患以外に複数の重い基礎疾患を有している症例があり、症例によっては近隣の呼吸器内科専門施設でも総合的なケアが難しい場合がある点である。近隣の呼吸器内科専門施設でも基礎疾患毎に対処可能な専門医師、ないしは総合的な対処が可能な内科医師の配置が必要と考える。

阿蘇医療センターも院内に呼吸器内科常勤医師がおらず、また近隣のクリニックにも呼吸器専門医が不在という状況である。また、呼吸器内科以外の専門診療科についても常勤医師の数が少ない点が課題と考える。地域で完結出来るような医療提供の実施のためには、各専門領域の医師の配置が必要と考える。また、救急医療についても地域の中核となる病院であるため、救急部の専属医師の配置が望ましいと考える。

阿蘇医療センター 呼吸器内科

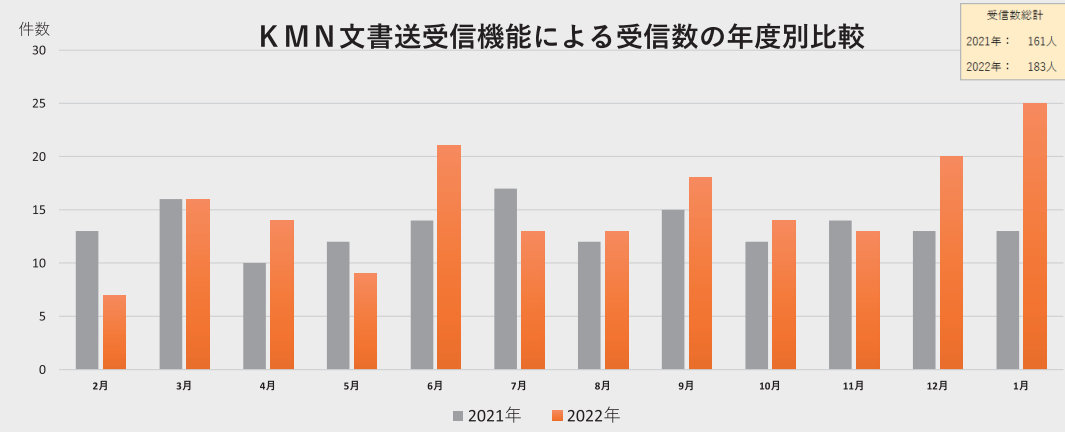


新規参加者数総計

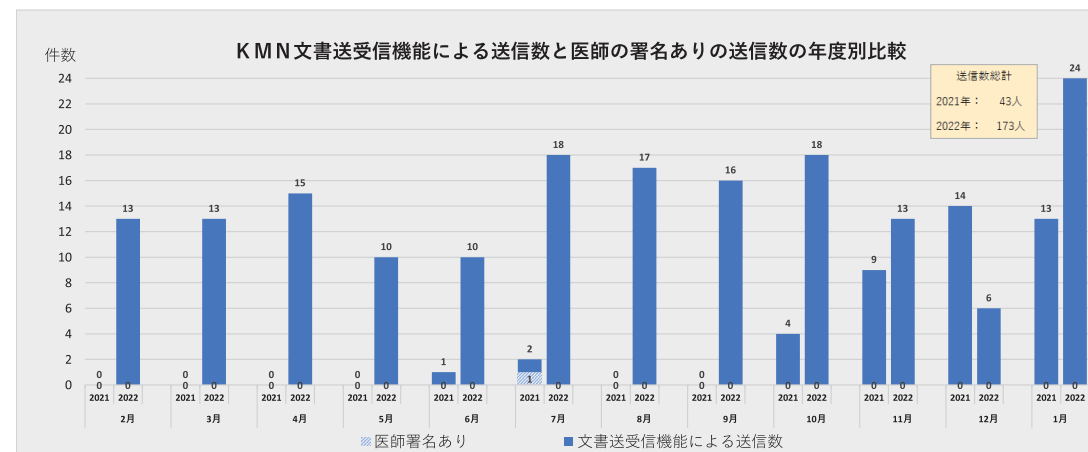
2021年：222人

2022年：201人

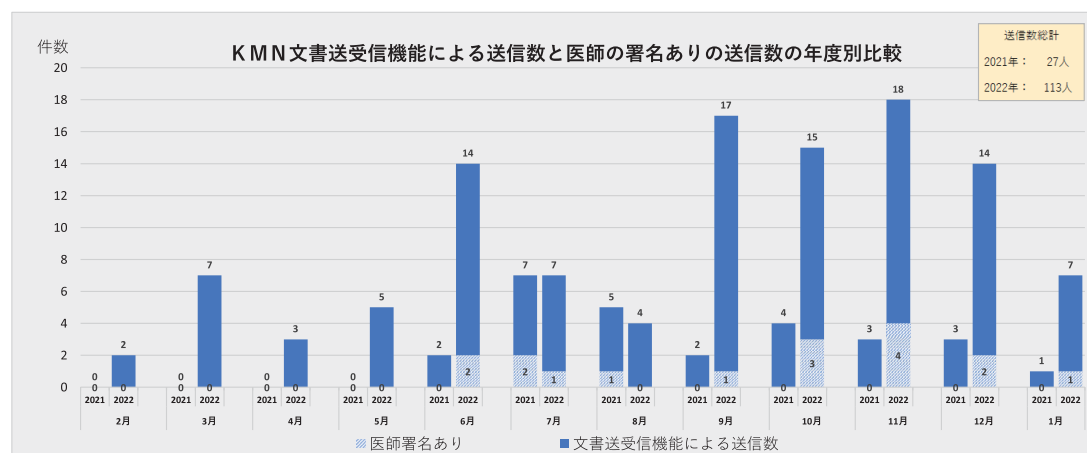
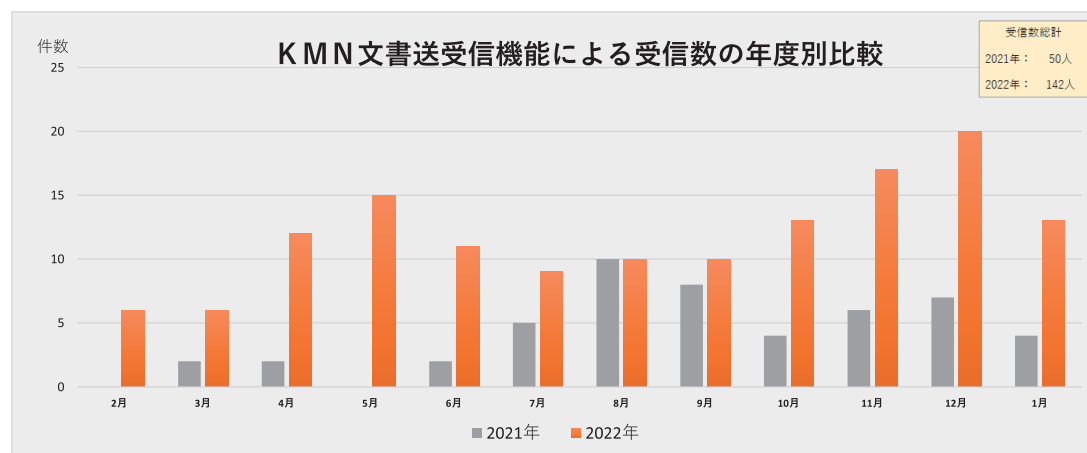
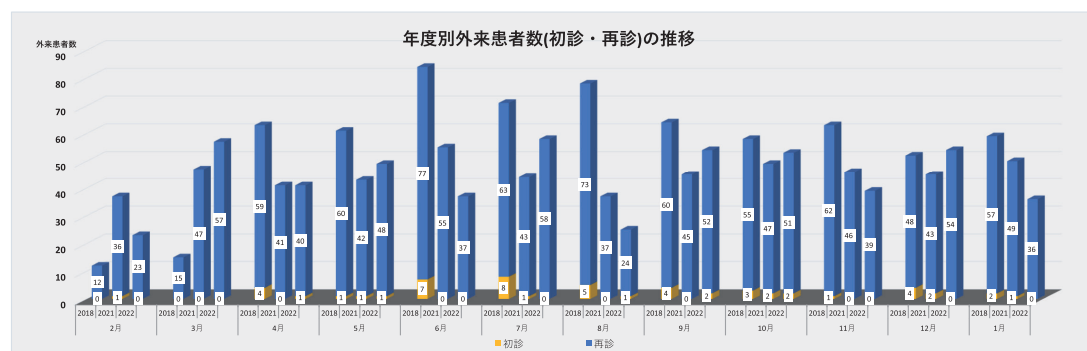
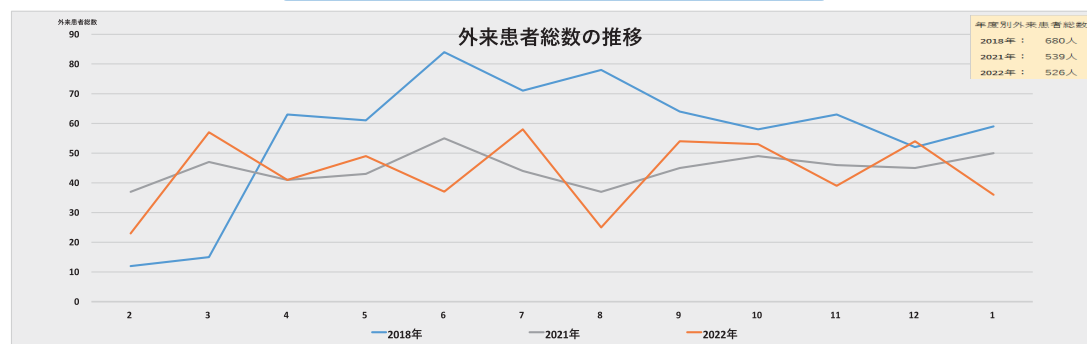
KMN文書送受信機能による受信数の年度別比較



KMN文書送受信機能による送信数と医師の署名ありの送信数の年度別比較



荒尾市民病院 呼吸器内科



派遣先地域医療拠点病院名	荒尾市民病院
氏 名	赤池公孝
診療科名	呼吸器内科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

比較的、KMNが使用されている病院でしたが、使用者自身の不慣れな状況が続いていることや、診療が診療時間を超えることもあり、慣れている紙媒体での対応することが多かった印象です (KMN使用時は事務の方を診療室まで来ていただきお願いする必要があるため)。今後はKMNを意識的に使用するよう心掛けたいと考えます。

また、外来受診症例はコロナの影響と思われますが、経時的には増加傾向を認め、同院への呼吸器内科の必要性がうかがわれます。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

上記1.にも記載しましたように、外来患者数は経時的に増加しており、呼吸器内科の認知度が増してきていると考えます。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

上記1.にも記載しましたように、KMNの使用において、送受信ともに増加傾向にあり、活発化している印象です。しかしながら我々、大学職員がKMNを外勤先で行う場合は、限られた時間での完結が必要であり、特に各病院でKMNのサイトまでの診療情報資料のuploadの方法が異なるため、その点は各病院の事務の方の周知が必要で、KMNの病院への情報提供は自動的にKMNを使用するなど、ある程度の強制があるとさらにスムーズになっていく印象です。

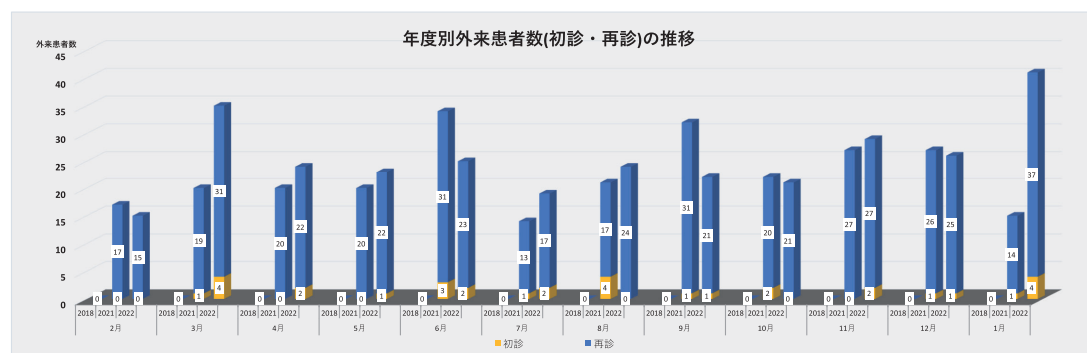
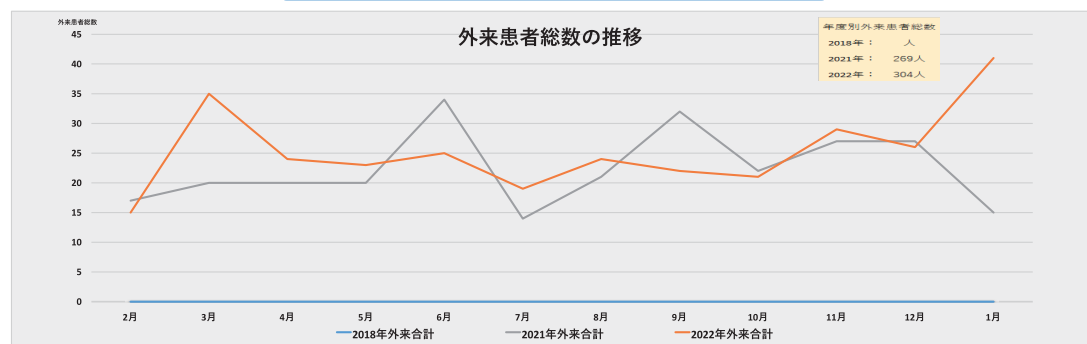
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

病院内および周囲のかかりつけ医からの専門領域の疾患の評価・治療を行い、安定した場合は、かかりつけ医での継続診療を基本としています。その診療行為が周知されつつあり、それに伴い紹介・受診患者の増加につながっているものと考えます。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

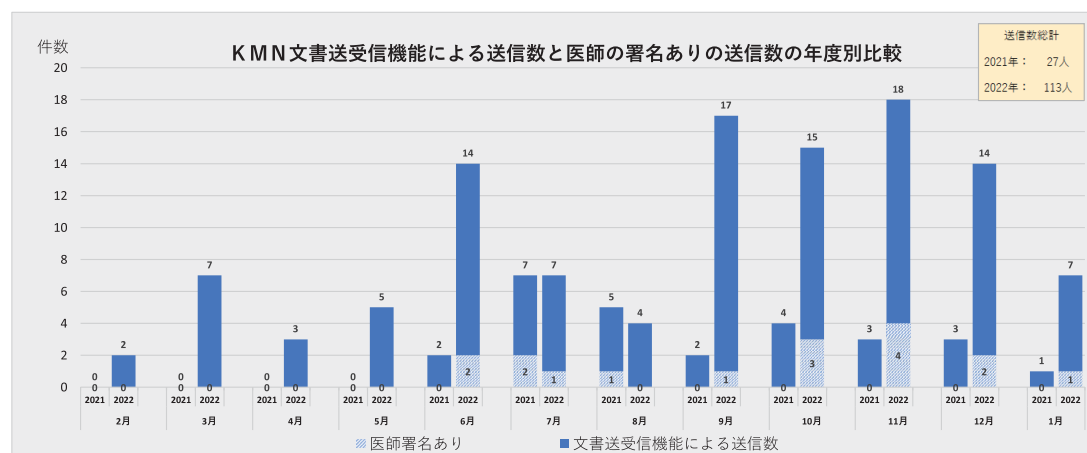
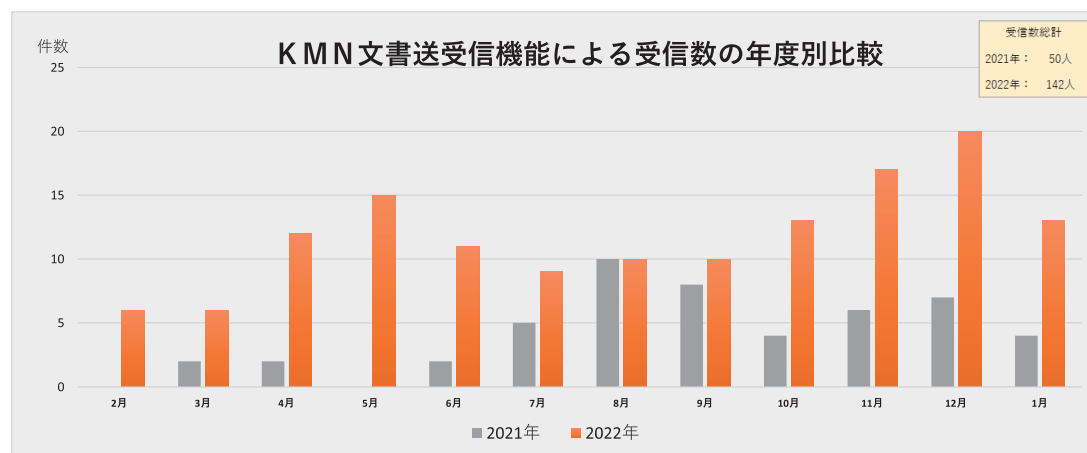
呼吸器内科は同院に常勤医が不在のため、肺癌化学療法や間質性肺炎の精査・治療は他病院との連携が必要になります。今後、同院に常勤医ができましたらその問題もさらによくなり、患者さんへの医療的還元が得られるかと考えます。

荒尾市民病院 呼吸器内科



新規参加者数総計

2021年：148人
2022年：168人



派遣先地域医療拠点病院名	小国公立病院
氏 名	赤池公孝
診療科名	呼吸器内科(総合診療科)
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

元々、小国医療県内での既存のネットワークがあったため、KMNへの移行がなかなか進みにくい状況です。現在はシステムの構築を進めていく途上にあります。

KMNに関しましては、新規参加者が2021年39名から2022年には153名まで増加しています。また、送受信において特に他病院への送信がまだまだ機能していない状況ですが、受診に関しては徐々に増加している状況です。

また外来受診症例は総合診療科としてはほぼ横ばいがありますが、呼吸器疾患の相談および大学病院治療後のfollowなどを主に受け持ち対応している状況です。

2. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

上記1.にも記載しましたように、総合診療科の外来患者数はほぼ横ばいですが、呼吸器疾患の対応を行っています。特に健診時期の8月に受診が増加傾向を示しています。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

受診に関しては少しずつ対応できている状況ですが、送信に関してはKMNのサイトに診療情報をupすることが難しい状況のようです。そこがうまくいくようになると件数は増えるかと考えます。

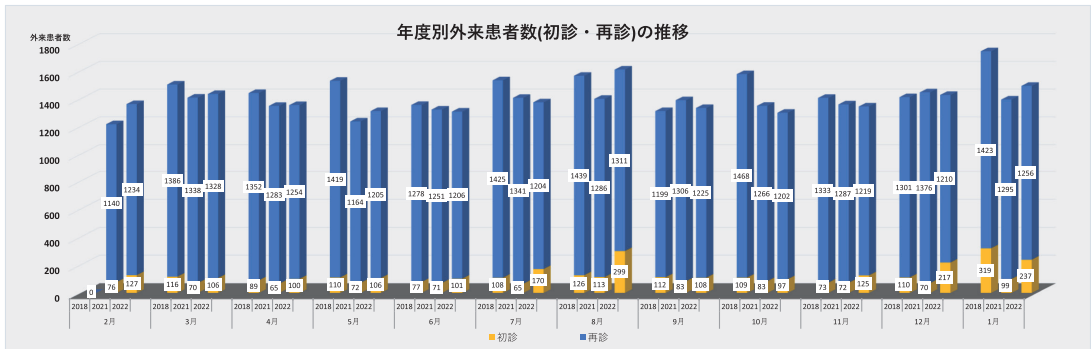
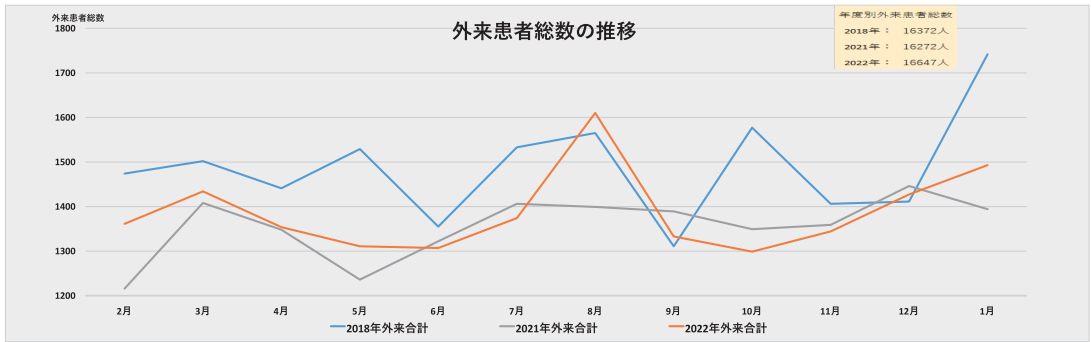
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

病院内および周囲のかかりつけ医、検診からの専門領域の疾患の評価・治療を行います。特に、肺癌や間質性肺炎など一般診療では対応できない症例において同院での可能な限りの検査・治療提示、若年や家族のサポートなどある方においては熊本市内への病院への橋渡しを行っています。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

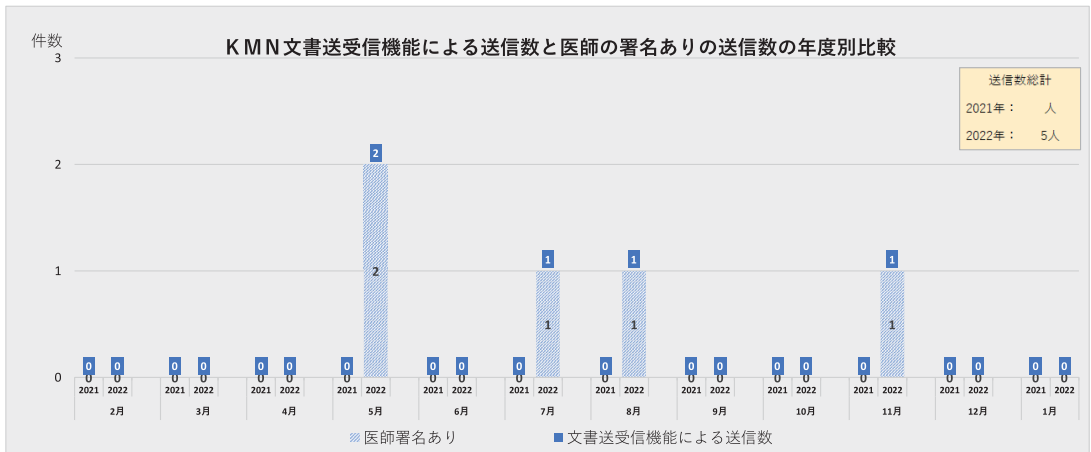
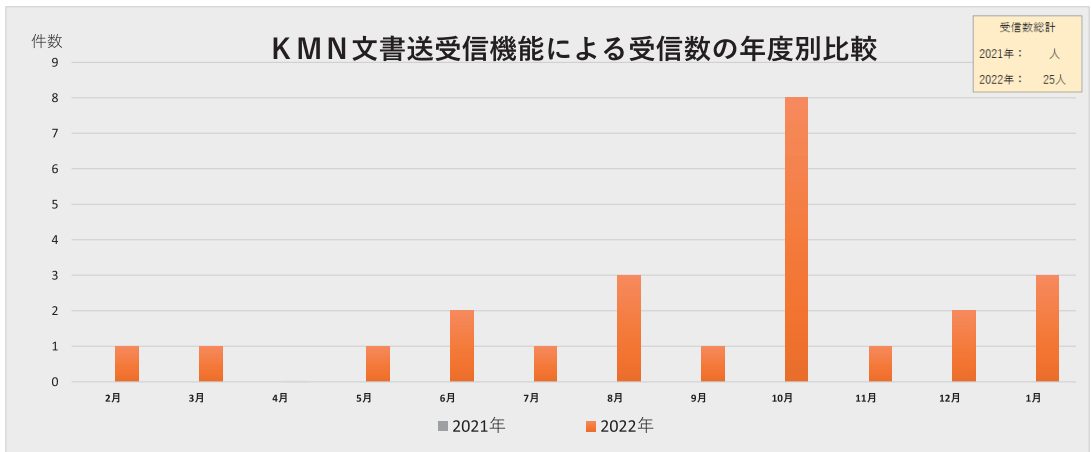
高齢化・独居など地域性・社会的問題が強く、専門医というより総合内科としての面も必要かもしれません。

小国公立病院 呼吸器内科



新規参加者数総計

2021年： 39人
2022年： 153人



派遣先地域医療拠点病院名	くまもと県北病院
氏 名	階子俊平
診療科名	消化器内科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

主に消化器内視鏡検査、治療の診療支援を行っている。
特に一般内視鏡医では施行が困難である胆膵内視鏡の指導を中心に行っている。
従来は同院での検査・治療が困難であった患者様の診療が可能となっている。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

Covid-19診療下での診療体制となっており、健診内視鏡件数など、感染状況によって影響はあるものの、概ね増加傾向で推移している。
特に胆膵内視鏡(ERCP関連処置)についての指導を行っており、継続的な指導を行うことにより、指導医が不在時もある程度の手技が同院で完遂できるようになってきている。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

右記のようにメディカルネットワーク利用は昨年度と比べ明らかに増加しており、今後も利用が増加していくと思われる。

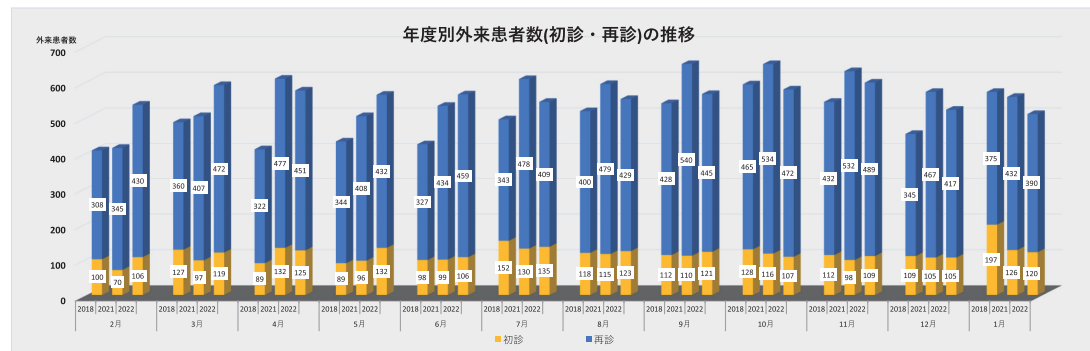
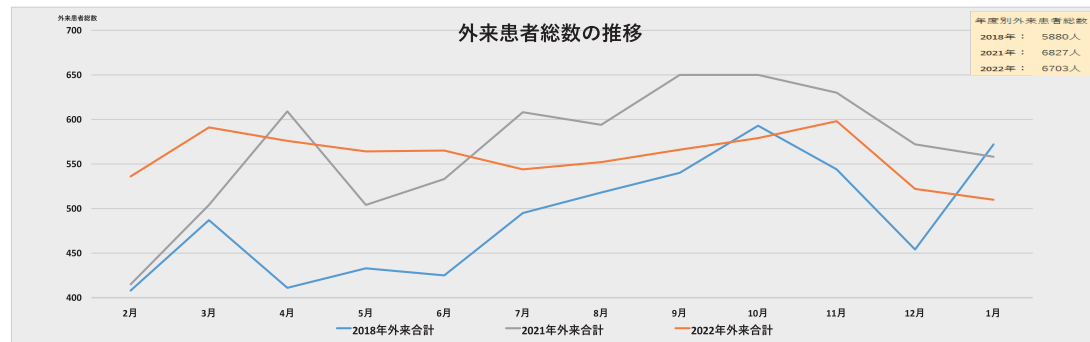
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

新病院になったことにより、近隣病院からの紹介患者様が増加している状況であり、より地域医療拠点病院としての重要性が増している。
大学病院との密な連携を行うことで、最新の治療を患者様に提供することができ、また地域で治療を継続することが可能な患者様も増加している状況である。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

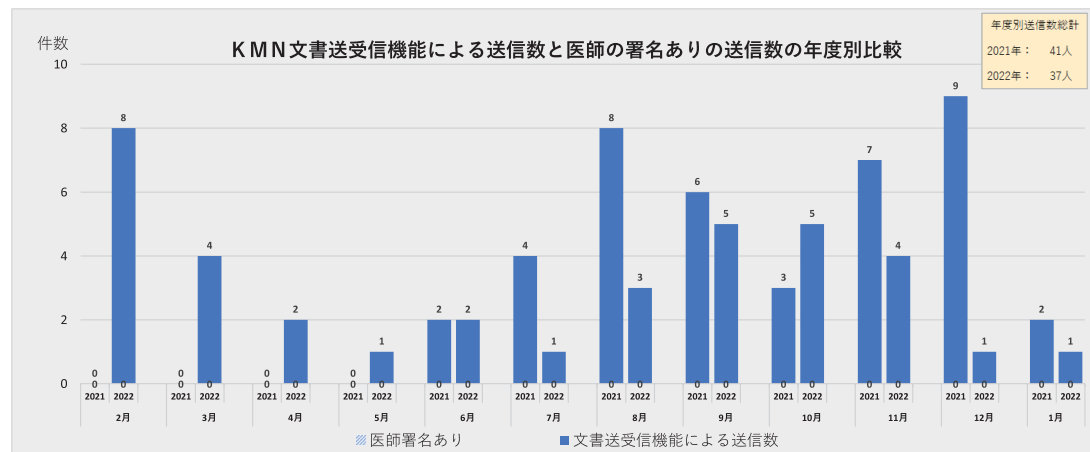
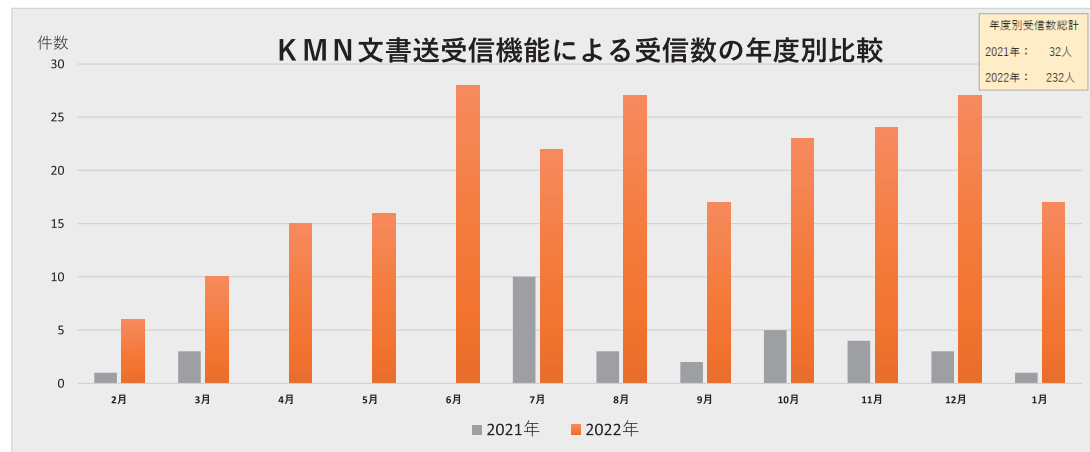
医師の都市圏偏在は今後もすすむと思われ、今後の超高齢化社会を迎えるにあたっては、コメディカルも含め、医療スタッフの確保が重要となってくる。
長期的には子育て支援、地域教育水準の確保など魅力ある都市づくりが、住民だけでなく、医療スタッフの確保につながるものと思われる。

くまもと県北病院 消化器内科



新規参加者数総計

2021年： 181人
2022年： 361人



派遣先地域医療拠点病院名	阿蘇医療センター
氏 名	具嶋亮介、飯尾悦子
診療科名	消化器内科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

阿蘇地域の消化器疾患の外来診療や内視鏡検査、治療を行っている。

特に肝疾患に関しては、専門性が高く、近隣の病院では専門的な診断や治療が難しく、紹介患者が多い。また消化管疾患に関しては、炎症性腸疾患の治療を大学と連携して行い、これまでは熊本市内で治療していた患者が、阿蘇地域で同様の治療を行うことができています。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

内視鏡検査が診療支援の主であるが、外来診療においても約90～100人/月の診療を行っている。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

病院全体としては2021年と比較すると2022年はKMNの受診数は変わらないものの、送信数が増えている。診療科としては、大学から阿蘇医療センターへの紹介状はKMNで送信するものの、阿蘇医療センターから他院への紹介に関しては、文章は送信できるものの、画像がうまく送信できないため、なかなか普及が進まない。画像送信が改善されれば、よりKMNの普及が進むと思われる。

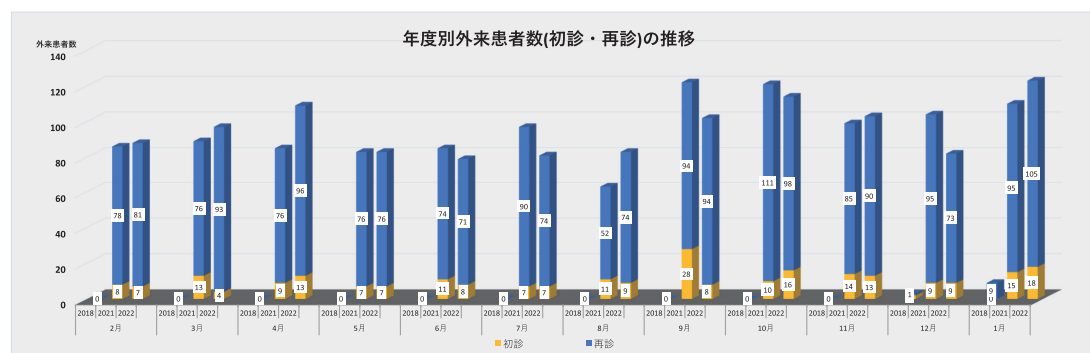
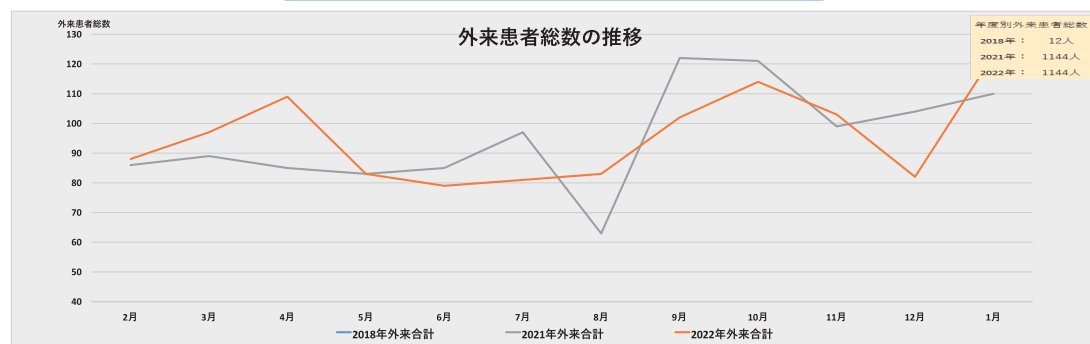
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

阿蘇の地域医療拠点病院として、当科の医師が派遣されることによって貢献していると考えますが、常勤医が不在であることから、すべての患者を受け入れることは困難で、重症患者等は熊本赤十字病院や熊本大学病院へ転院搬送している。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

阿蘇地域は医師が不足しており、すべての診療科を阿蘇地域で診療するのは難しいのが現状である。常勤医が増えれば解決する可能性があるが、働き方改革でどの病院も医師不足であることから、なかなか医師を派遣できないのではと考える。熊本大学医学部の地域枠で入学した学生が、今後医師になって地域の病院に派遣できれば、改善の見込みがあるかもしれない。

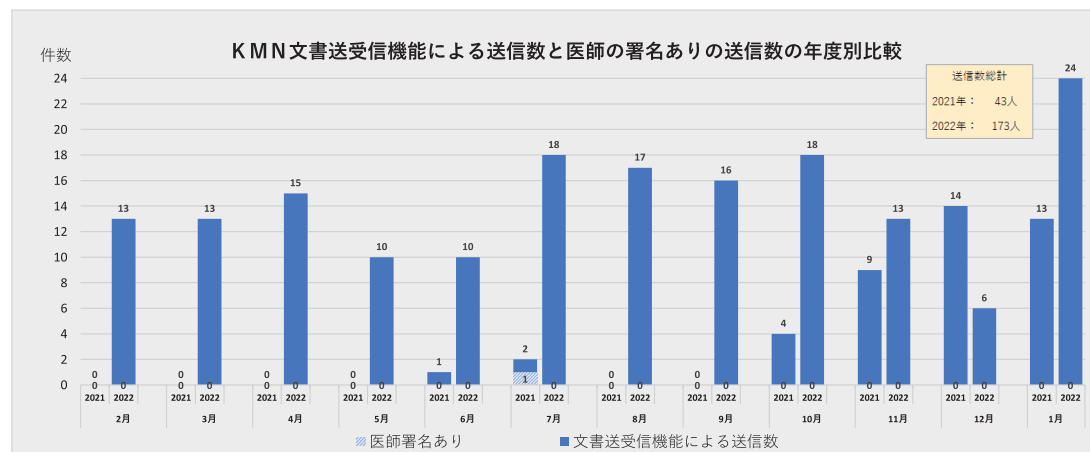
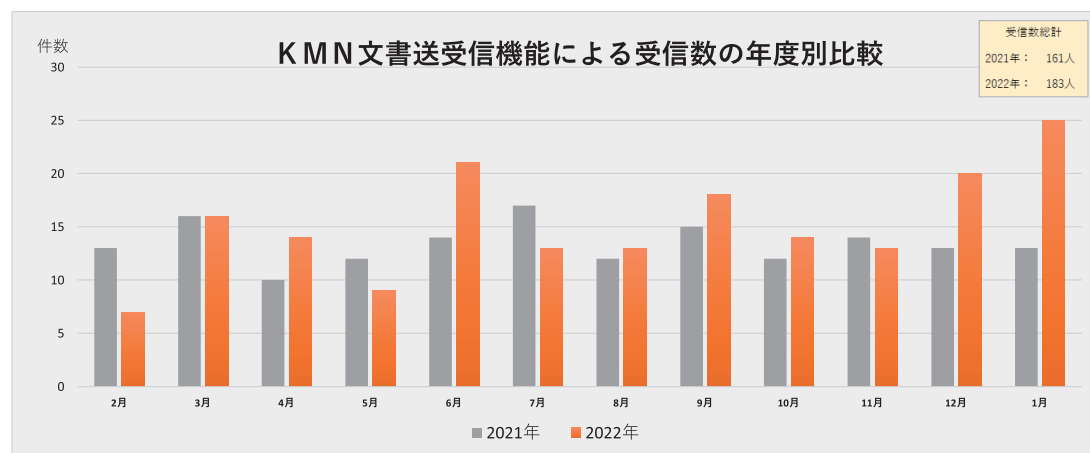
阿蘇医療センター 消化器内科



新規参加者数総計

2021年： 222人

2022年： 201人



派遣先地域医療拠点病院名	熊本労災病院
氏 名	具嶋亮介
診療科名	消化器内科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

熊本労災病院は八代圏の救急医療の中心で、救急疾患の患者が多い。消化器内科の医員も十分ではなく、我々が内視鏡検査のサポートと、若手医師の内視鏡治療の指導を主に行っている。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

外来診療のサポートは行っていないが、データの通り外来患者数は増加傾向で、それに伴い内視鏡検査や治療も増加することが予想され、診療支援の成果は出ていると思われる。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KMNの文章の送受信の数は県内の病院でも多い。ただ画像の連携がシステムの問題かうまくいっておらず、その点が今後のシステム改善として要望したい部分である。

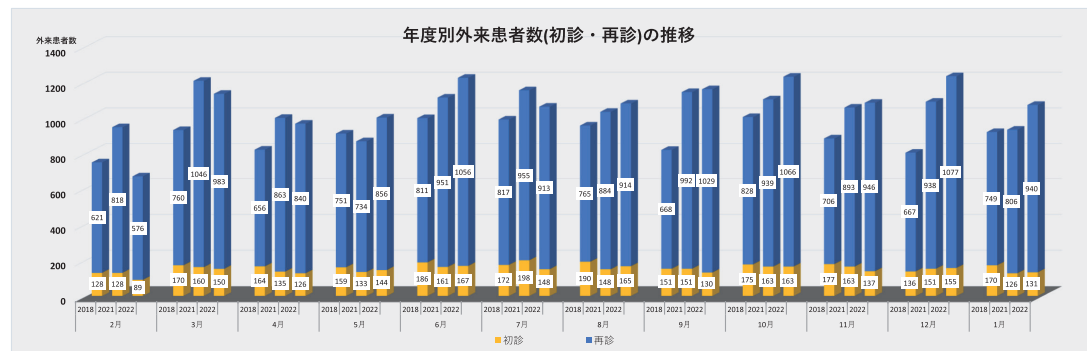
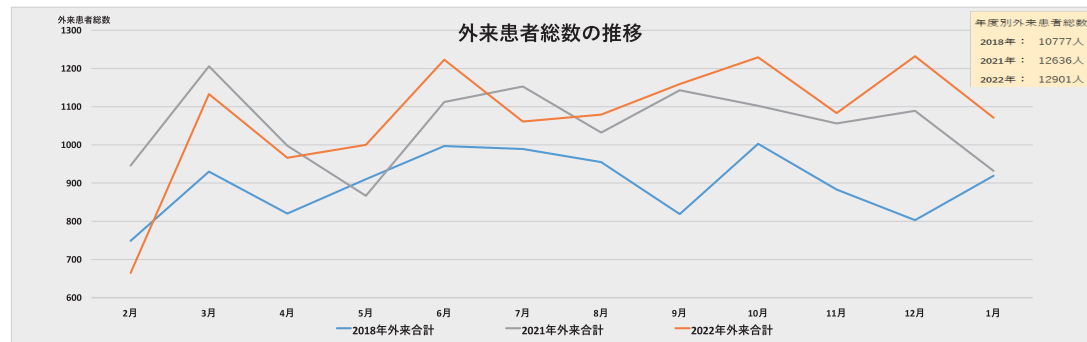
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

熊本労災病院は八代だけでなく、水俣や宇城の医療圏からの患者も対応しており、地域医療拠点病院として重要な役割を担っている。特にコロナ禍では各病院がなかなか救急患者の受け入れが難しい中で、八代近隣地域の救急疾患の受け入れも積極的に行い、その役割を十分に果たしている。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

救急疾患の多い消化器内科としては、医師数が十分とは言えず、今後は医師の働き方改革も始まり、より人材の確保が必要になる。医師数の増加が望ましいが、医局員を派遣するほどの余裕が医局にはなく、現状のように診療や検査のサポートを続けていくしか手段がない。解決策はなかなかないのが現状である。

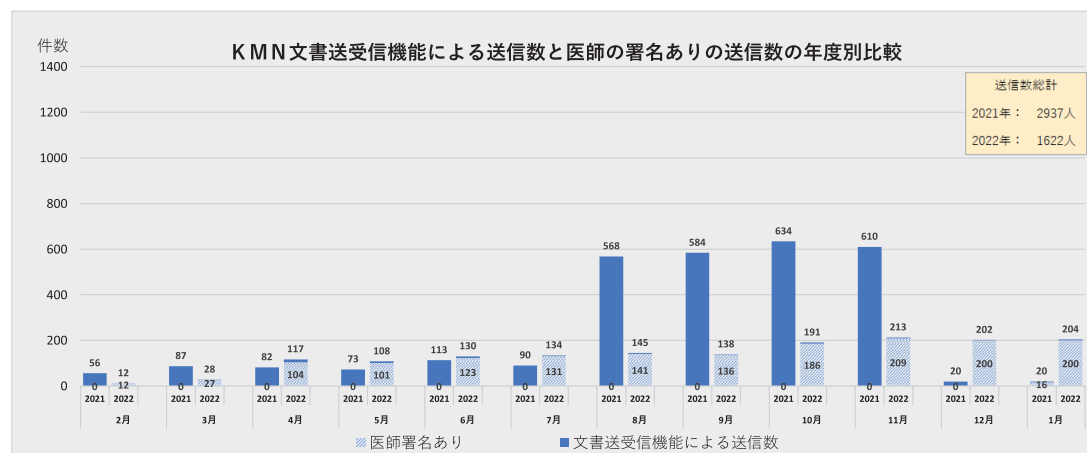
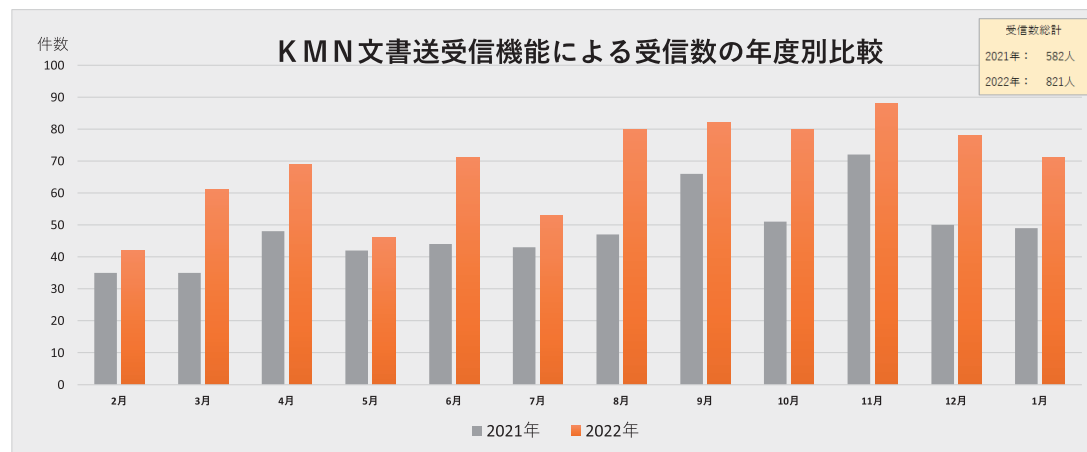
熊本労災病院 消化器内科



新規参加者数総計

2021年： 168人

2022年： 203人



派遣先地域医療拠点病院名	山鹿市民医療センター
氏 名	宮本英明
診療科名	消化器内科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

がん薬物療法指導医としての活動：山鹿市民医療センターでは、2020年3月に腫瘍内科医師が退職することになり、外来化学療法の継続が難しい状況であった。特に消化器癌の症例が多かったため、2020年4月より腫瘍内科外来を引き継ぎ、毎週金曜日に消化器癌に対する化学療法外来を行っている。また、消化器外科、消化器内科外来や、入院での抗がん剤治療について、助言を行っている。

消化器内視鏡学会指導医としての活動：山鹿市民医療センターでは、消化器癌の内視鏡治療における熟練者がおらず、指導が必要な状況であった。そのため、化学療法外来が終了後に、内視鏡治療に立ち合い助言を行っている。難易度が高い症例は、熊本大学病院で治療を行い、経過観察を山鹿市民医療センターで行っている。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

2018年と比べ、2021年、2022年の外来患者数は増加している。特に初診患者数は、2021年より2022年で増加している。入院患者数に関しては、2018年、2021年と比べ2022年では著名に増加しており、地元で治療を受けたいという患者の希望を満たせていると考える。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

2021年ではKMNを用いた情報提供は極めて少なかったが、2022年から担当事務とネットワーク推進医で協力し、入院支援室と共に同意取得推進に向けて取り組み、主に大学病院との情報の共有をKMNを用いるようになったことで、KMN文書送受信件数が著明に増加した。

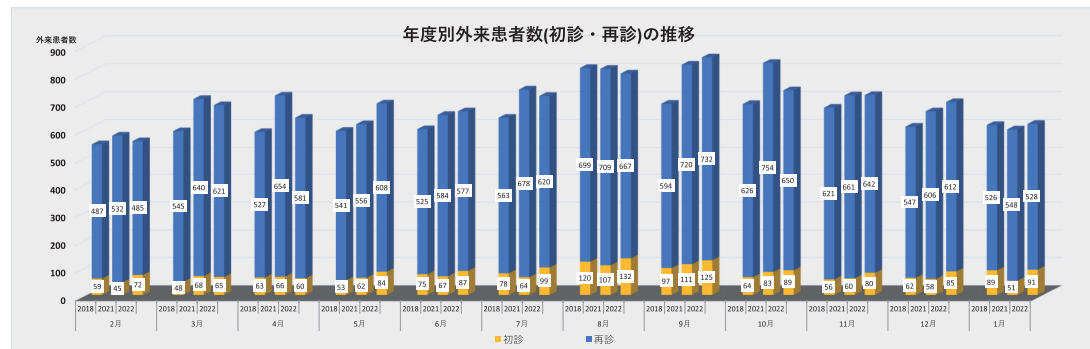
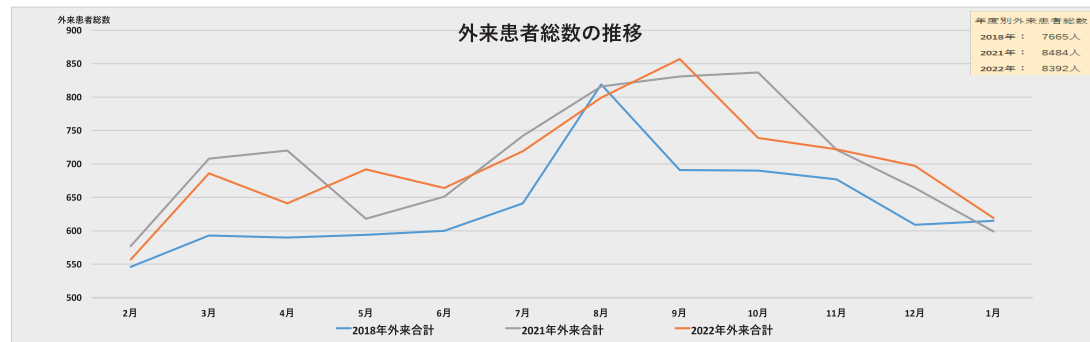
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

山鹿～菊池地区の医師を対象とした、化学療法や内視鏡治療についての講演を定期的に行っている。また、多職種によるがん総合診療チームの一員として、がん診療を部門横断的にを行い、より効率的な個別化治療を確立することを目的に活動している。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

近年抗がん剤治療の領域では、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害剤を使用する症例が増加しているが、その毒性は多岐に渡る。常勤医のいない診療科に関連する毒性が生じた場合には、対応が難しい場合がある。そのような場合には市内の病院に搬送されるが、近隣の病院同士で足りない診療科をカバーし合うシステムを構築できれば、より迅速に対応できると思われる。

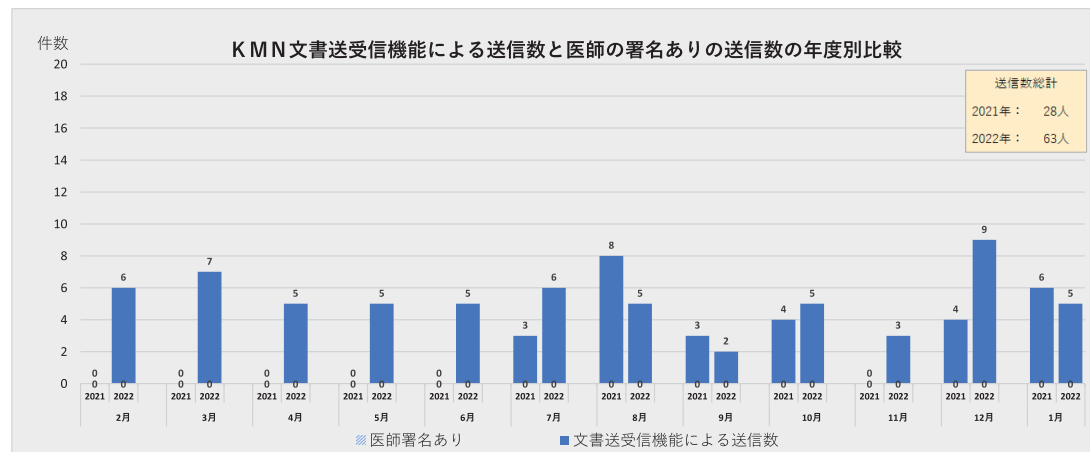
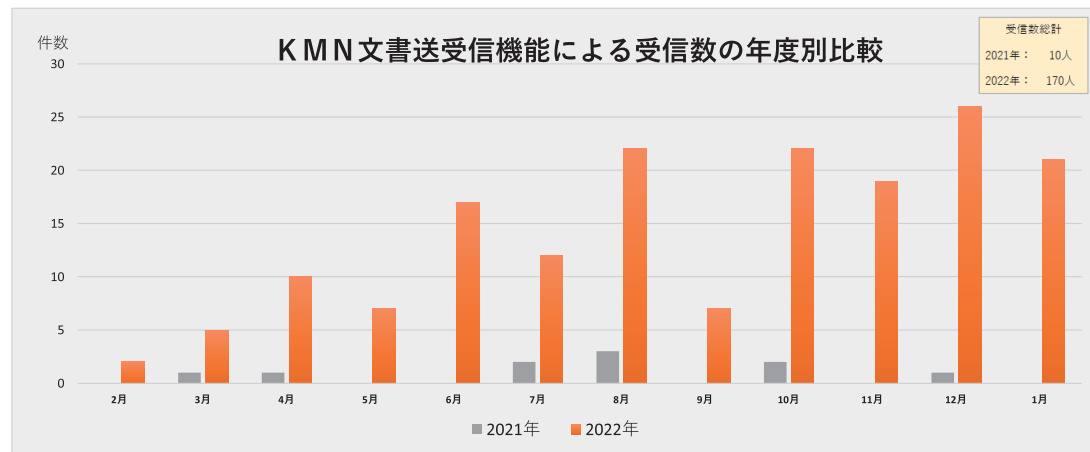
山鹿市民医療センター 消化器内科



新規参加者数総計

2021年： 33人

2022年： 518人



派遣先地域医療拠点病院名	令和4年4月1日～令和5年3月31日
氏 名	血液・膠原病・感染症内科
診療科名	坂田康明
事業期間	熊本総合病院、熊本労災病院

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

地域連携ネットワーク推進として、八代地域の2基幹病院において外来診療業務及びKMNネットワークの普及に努めた。外来患者数やKMNネットワークの利用件数の増加に加えて、地域の医師の先生方との研究会を行い交流を深め、県南地区の膠原病診療の充実を図ることができた。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

八代地域の膠原病専門領域の診療支援として、熊本総合病院及び熊本労災病院に月2回ずつ外来診療を行なった。2022年度血液・膠原病内科の外来患者数は、熊本総合病院においては9133人(前年比+1038人)、熊本労災病院においては3829人(前年比 -299人)であった。

膠原病外来については熊本市内には複数拠点があるが、県南地域には専門医が不足しており、八代地域のみでなく人吉、芦北、水俣地域の患者層を含めカバーしている。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

2022年度の熊本総合病院における新規参加者数は105人と前年と同程度で、KMNを通じた受信数 567件(前年比 +91件)、送信数71件(前年比 +52件)と利用状況の増加が見られており、今後さらなる利用普及が期待できると考えられる。

熊本労災病院においては、新規参加者数203人と増加しており、受信数821件(前年比 +239件)、送信数1622件(前年比 -1315件)であり、こちらは前年同様の高い利用実績を認めている。

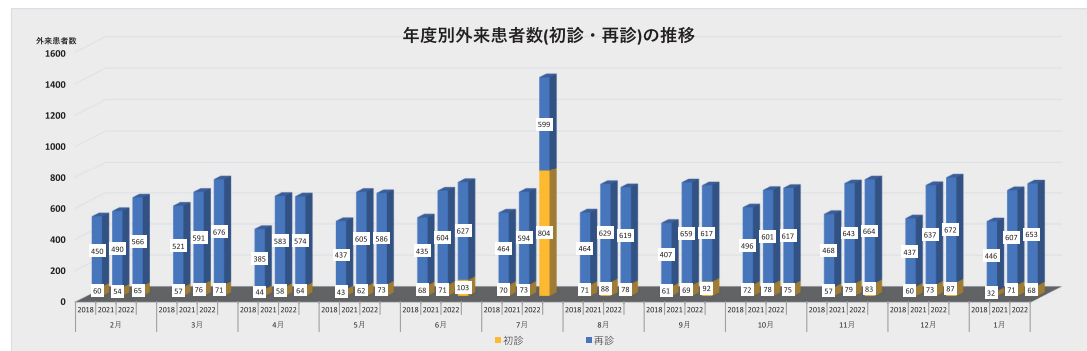
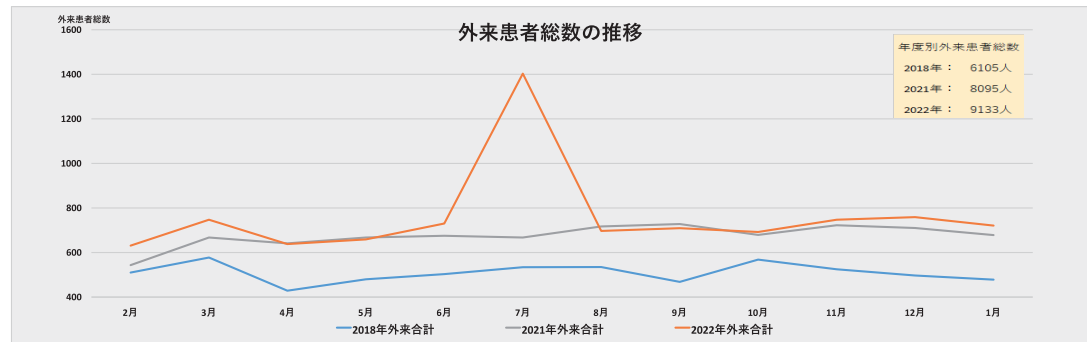
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域医療拠点病院として、地域の病院や診療所等からの紹介を受け、医学的対応と専門的情報の共有を行っている。同院に学ぶ研修医や医学生が当科外来の見学を行うこともあり、指導を行っている。膠原病疾患は他領域にわたるため、県南医師を対象とした交流会として、県南の皮膚科や整形外科を交えた講演会にも参加し、情報共有と交流を行った。多彩な症状を呈する膠原病疾患であるからこそ診療科の垣根を超えた協力が必要であり、県南で膠原病診療が完結できるような仕組み作りに取り組んでいる。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

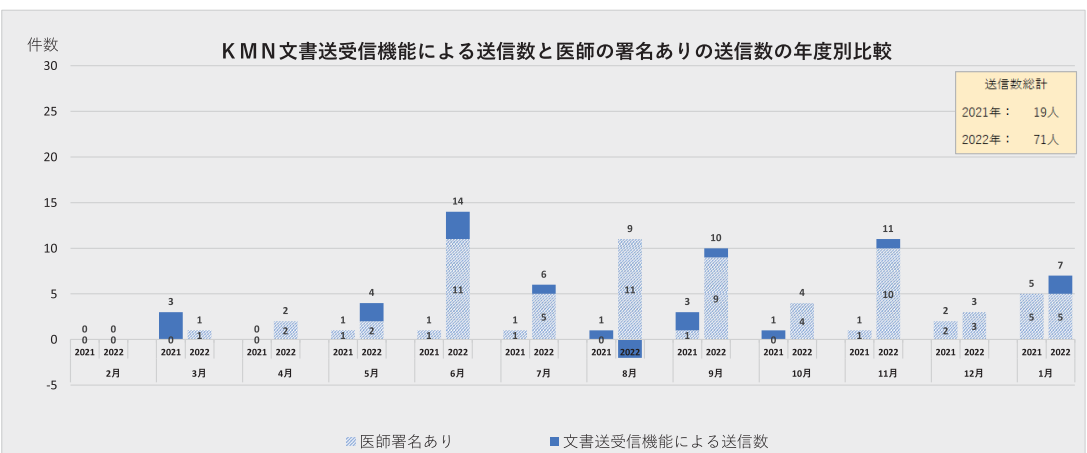
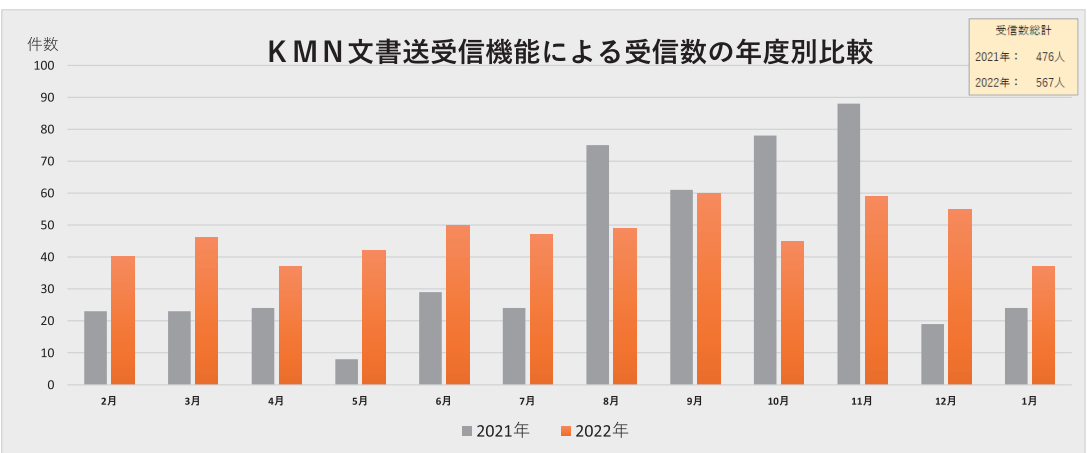
膠原病は慢性の自己免疫疾患であり、発症した後は完治することはないため長期の維持療法が必要である。そのため一外来に通院する患者は増えていく傾向にあり、定期の診療時間でこなすには厳しくなりつつあり、比較的安定している患者は近くの診療所などへフォローを依頼する必要があるが、紹介先として十分な診療経験を有し受け入れ可能な医療機関が多くはない。また近年膠原病領域においては新規薬剤が多数承認され治療方針なども見直されつつあるが、それらの情報が十分に行き渡らず、不十分な治療のままで紹介が遅れるケースなども見られる。今後、交流を増やしていく中で垣根の低い協力体制を確立していく必要がある。

熊本総合病院 血液内科・膠原病内科

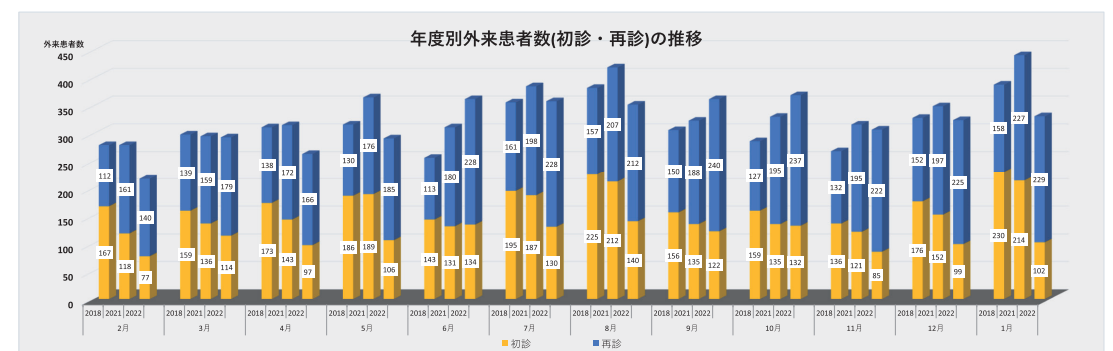
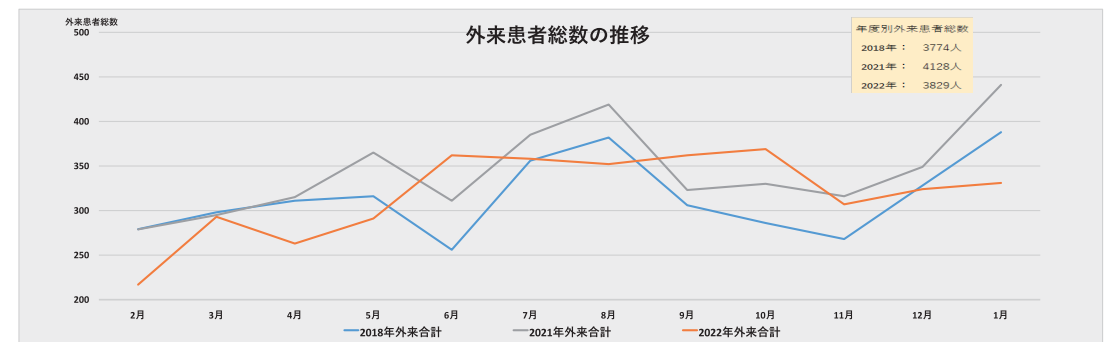


新規参加者数総計

2021年： 325人
2022年： 105人

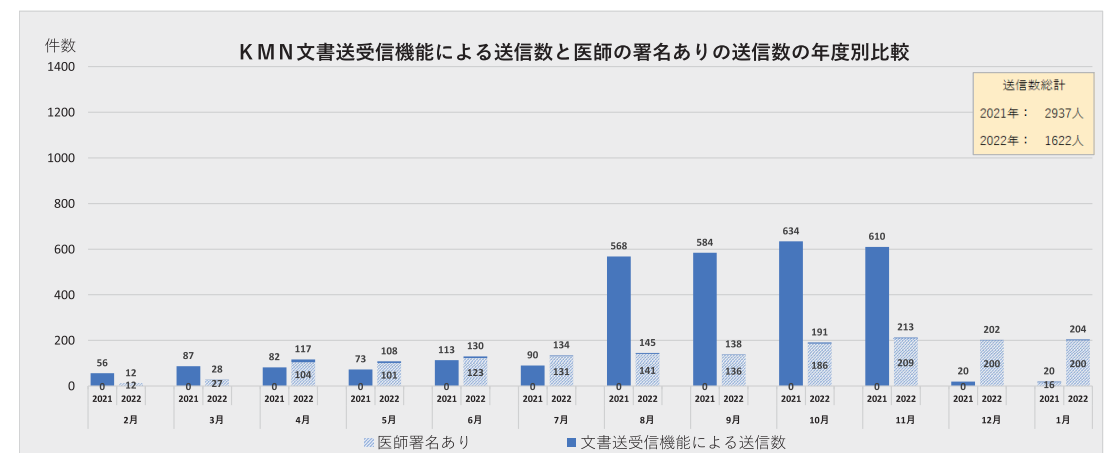
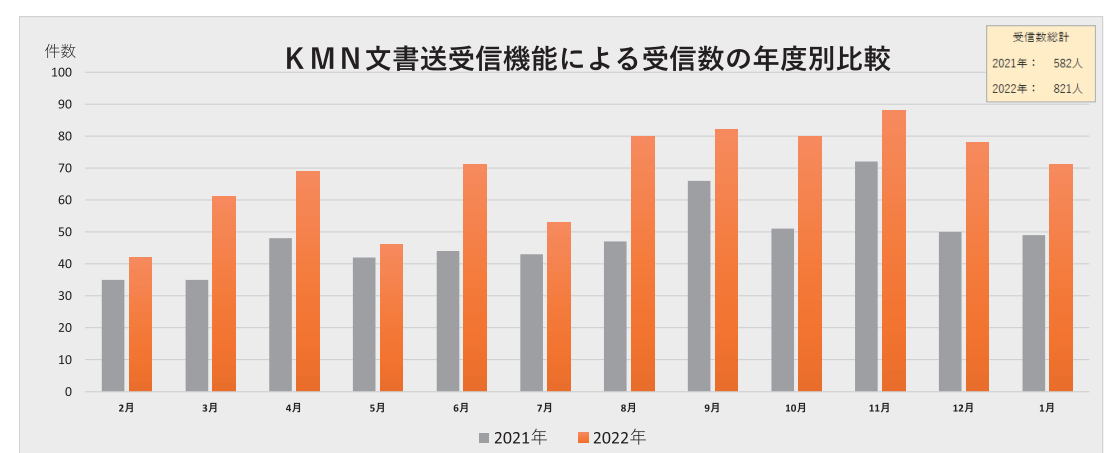


熊本労災病院 血液内科・膠原病内科



新規参加者数総計

2021年： 168人
2022年： 203人



派遣先地域医療拠点病院名	小国公立病院
氏 名	小野 薫
診療科名	糖尿病・代謝・内分泌内科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

週1回、午前・午後で外来業務を行っている。健診で耐糖能異常を指摘された者や、近隣開業医では血糖コントロールが難しい患者、インスリン療法の導入を目的とした患者などが受診するようになり、専門性が高まった結果、現在ほぼ糖尿病患者のみの外来となっている。患者数は増加傾向にあり、高齢化を理由に、熊本市、大分県日田市の医療機関からの紹介されてくる患者も増えている。糖尿病合併症として、網膜症に関しては、同院眼科や阿蘇地域の眼科医と連携している。また糖尿病性腎症に対しては阿蘇医療センター腎臓内科と連携し診療にあたっているが、地理的な点から日田市の医療機関への紹介もある。

月に1回、小国郷糖尿病対策チームブルーの定例会に参加している。病院スタッフや、小国圏域の保健師で構成された糖尿病対策チームであり、毎月40名ほどの患者について受診状況、生活状況や保健指導の内容などの情報を共有し、糖尿病合併症予防につなげている。会議の際に、糖尿病の薬物療法や合併症について一般的な知識、最近の傾向、留意する点などのアドバイスを行っている。町民などに対する啓蒙活動は、新型コロナウイルス感染症の蔓延から進んでおらず、院内勉強会なども行っていない。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

外来全体の数はここ数年横ばいである。代謝内科としての診療枠はなく、総合診療科の枠で他の医師と診療にあたっているため、数字の把握が困難であるが、担当する外来患者数は増えている。専門性が増した結果、糖尿病教育を主目的とした大学病院への紹介も増えた。

糖尿病に関しては、研修医が初期対応した患者や、治療に難渋している患者などについて主治医から相談いただき、適宜診察・アドバイスを行っている。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KMNの利用は病院全体としても明らかに少ない。派遣医師の努力不足、また病院としても周知されていないのが現状ではないかと思う。診療情報提供書に関しては、KMNの送信作業は医師が行っている（システムエラーなのか、電子署名ができない）。送受信の数については、地理的に、日赤や市民病院、日田市の医療機関（済生会日田病院など）への紹介・逆紹介が多いことも一因と考える。今後、派遣医師から使用数を増やすよう努力する。

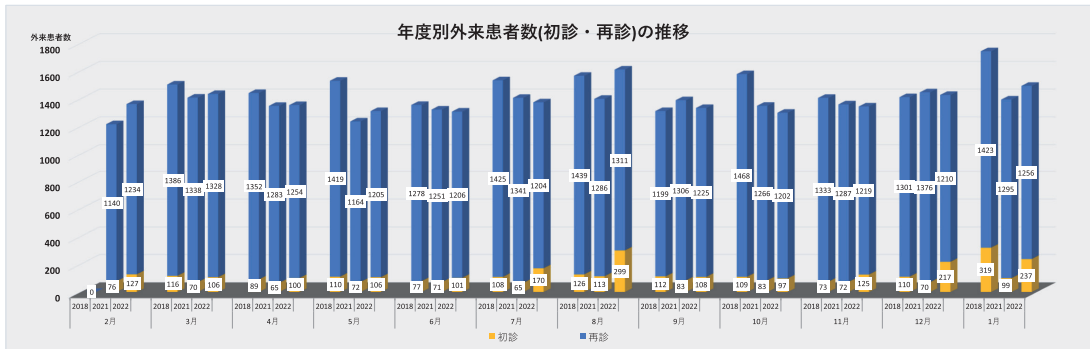
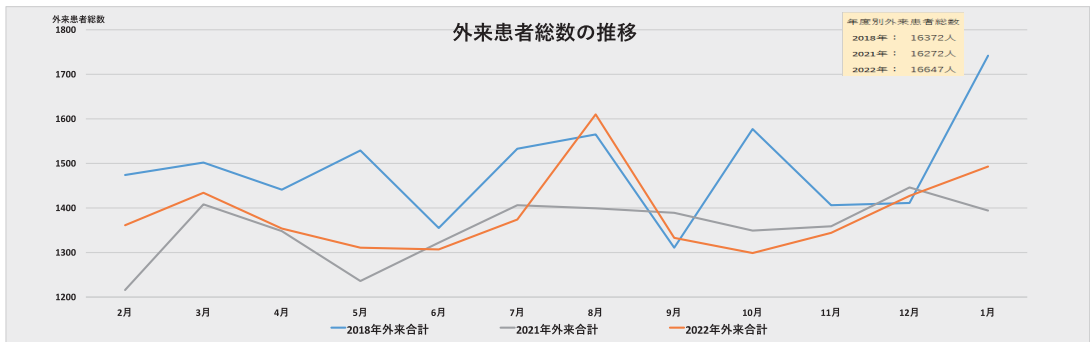
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

小国公立病院は県境にあることから、中核病院としての役割が大きいと思われるが、外来を見ていると総合内科的な側面が大きい印象で、中核病院と診療所の両方のニーズを担っているのではないかと思う。担当する外来枠は週1回だが、患者数は増えるためマンパワーとしては心もとない。病診連携を積極的に行き、円滑な医療提供を行えるようにするのが課題と考えている。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

糖尿病は、一部を除けば、基本的に予防できる疾患である。しかし患者と話をすると、糖尿病に対する一般的な知識、理解に乏しい印象がある。地域住民が糖尿病の知識を得られるような活動を行うことが、長期的に見て効果があるのではないかと考える。

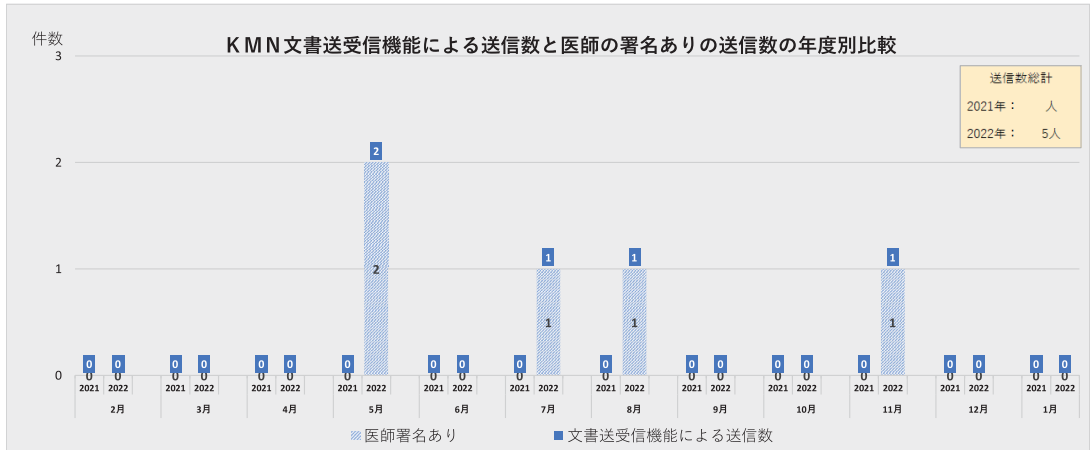
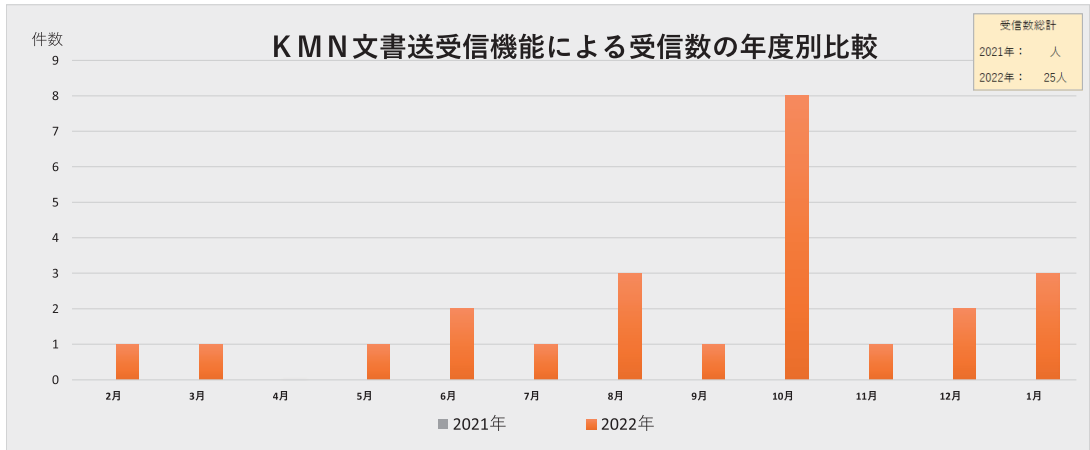
小国公立病院 糖尿病・代謝・内分泌内科



新規参加者数総計

2021年： 39人

2022年： 153人



派遣先地域医療拠点病院名	上天草総合病院
氏 名	小野 薫
診療科名	糖尿病・代謝・内分泌内科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

毎月第3、5週の金曜日に午前、午後で外来業務に従事している。代謝内科常勤の岸川秀樹医師、熊本大学病院 糖尿病・代謝内分泌内科からの非常勤派遣も合わせて週3日の専門外来が行われている。長年、大学病院から代謝内科医師を派遣していたため、患者は一定数あったものの、近年は全国的な糖尿病患者の増加の影響か、患者数は増加傾向である。外来は2型糖尿病に加え、1型糖尿病、その他疾患による糖尿病(膵摘出後、肝硬変等)などがあり、一般外来に比べ専門性が高い。また内分泌科としても甲状腺疾患や下垂体、副腎疾患(特定疾患含む)など、多岐にわたる。専門医が中心に派遣されていることから、糖尿病に関してはある程度、同病院内で完結していると思われる。内分泌疾患に関しては、精査加療が必要な状況であれば熊本大学病院への紹介となるが、治療後はおおむね逆紹介して頂いている。市民に対する啓蒙活動は、新型コロナウイルス感染症の蔓延から進んでおらず、院内勉強会なども非常勤医は行えていない。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

外来のコマ数は増えていないものの外来患者数は増加傾向にある。1.で述べた通り、糖尿病に関しては、教育入院含め同院で完結できており、この点は評価できる点ではないかと考える。また糖尿病合併症に関しては同院の眼科、腎臓内科などと連携している。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

熊本大学病院や中核病院から頂く紹介状に関しては、KMNを介していただくことも増えてきた。グラフのように徐々に件数も増えている。

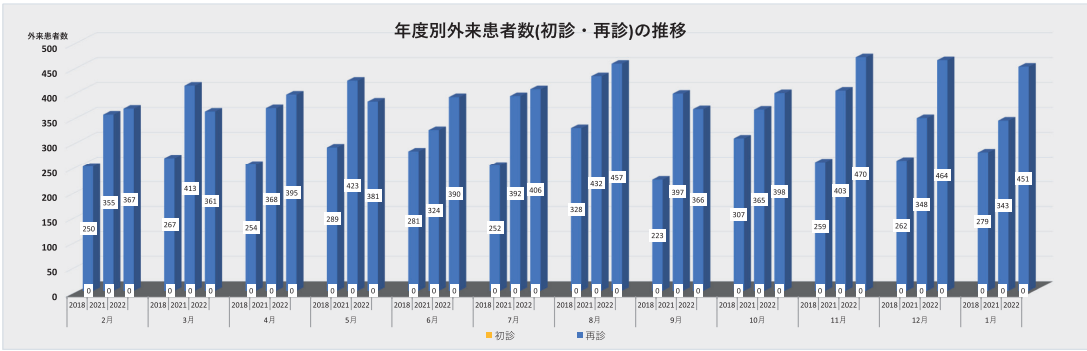
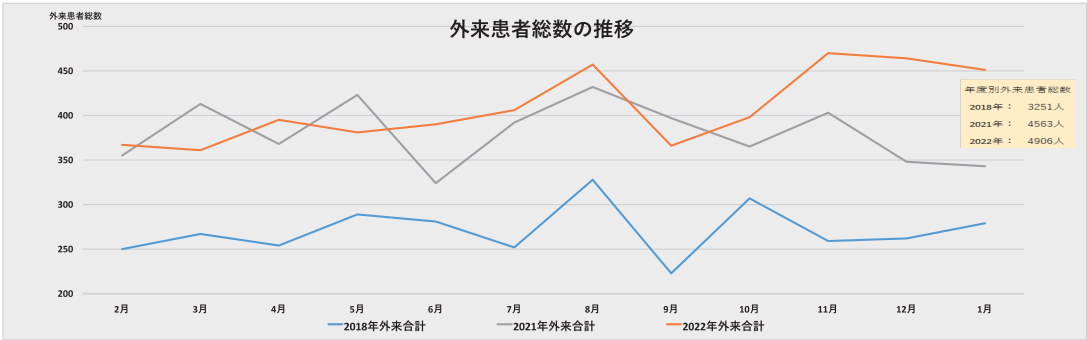
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

専門外来が週3日あるということで、患者にとっても近隣開業医の先生方にとっても安心感があると思われる。医療の均てん化の面からも、マンパワーがあるため、効果的だと感じている。また逆に、大学病院などへ紹介は、派遣医師が先に対応することで、ある程度の鑑別・検査が進み入院紹介がスムーズにいくことが多い。この点も意義があると感じている。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

近隣医療機関への糖尿病の啓蒙活動が不十分と考えている。多くの糖尿病薬が開発されて市場に出ることから、糖尿病治療の標準化を目指す意味でも、勉強会など情報提供が必要と考えている。またかかりつけ医作成にも難渋しているが、こちらの解決は難しいと思われる。

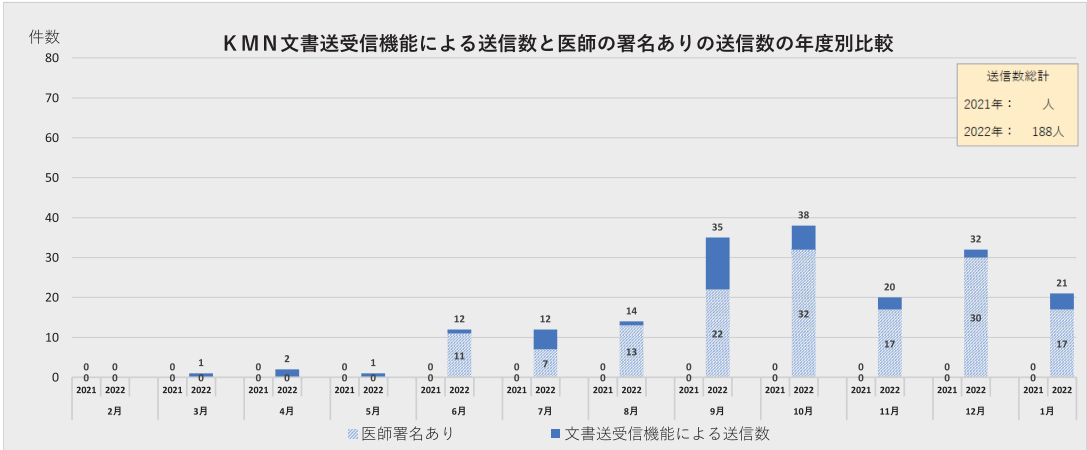
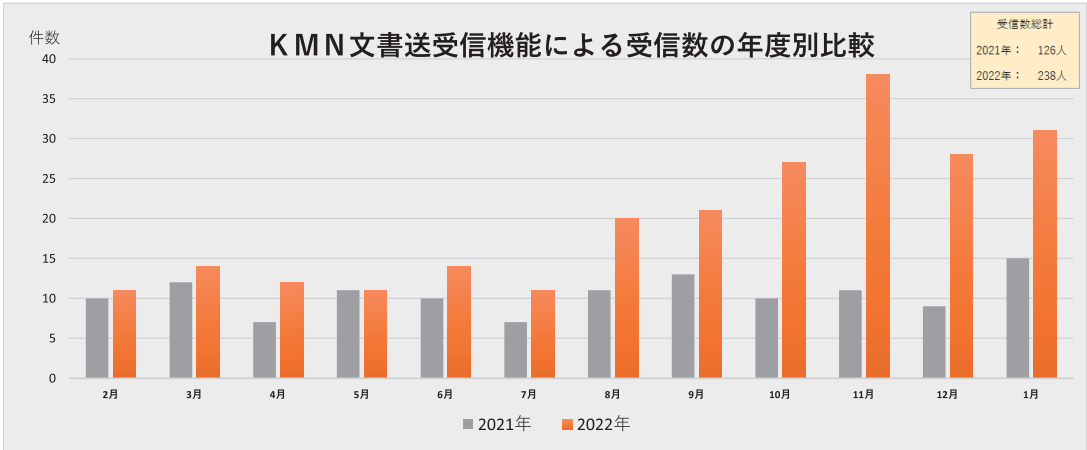
上天草総合病院 糖尿病・代謝・内分泌内科



新規参加者数総計

2021年： 人

2022年： 人



派遣先地域医療拠点病院名	くまもと県北病院
氏 名	山本正啓
診療科名	循環器内科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

週1回 火曜日の午前中に、外来、検査の診療支援を実施しました。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

循環器外来数も多く、積極的な支援が実施できました。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

くまもとメディカルネットワーク受診はしばしば実施しております。送信に関してはまだこれから積極的に増やしていく必要があると考えます。

4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

循環器専門医療の提供

救急・総合内科としての貢献

地域開業医の先生方との密な病病連携

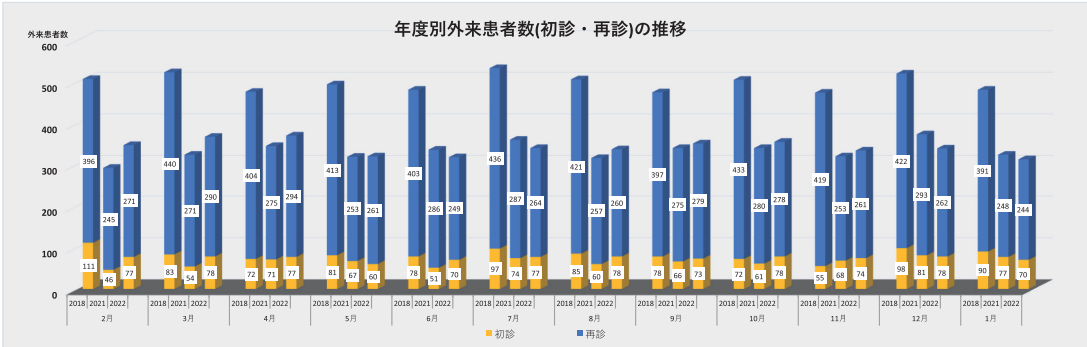
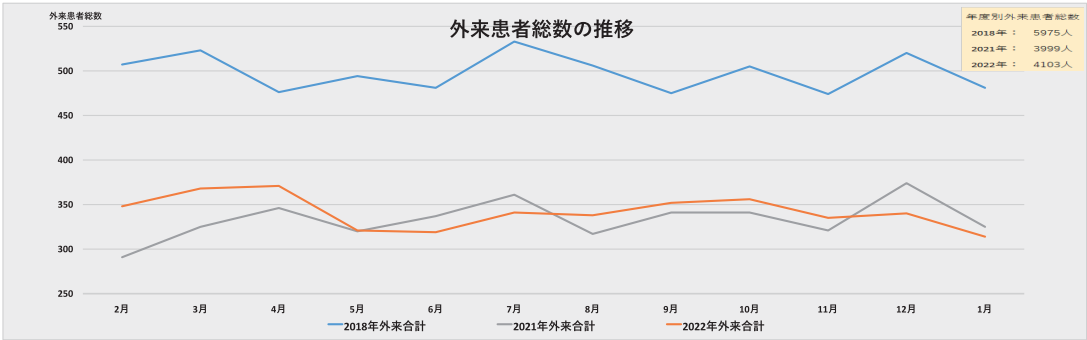
積極的な一般の住民向けの勉強会の開催

など貢献は多岐にわたっており、実施されているとお見受けしております。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

素晴らしい取り組みが実践されているものと認識しております。

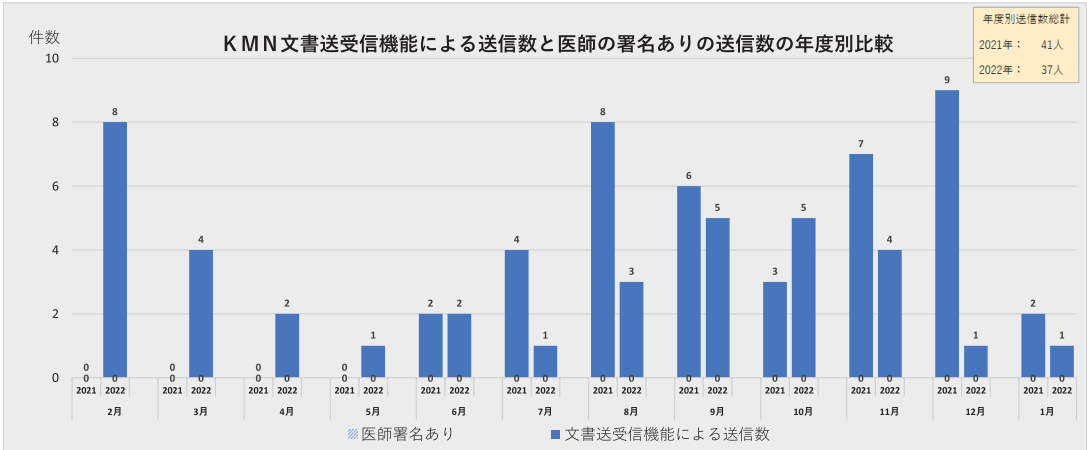
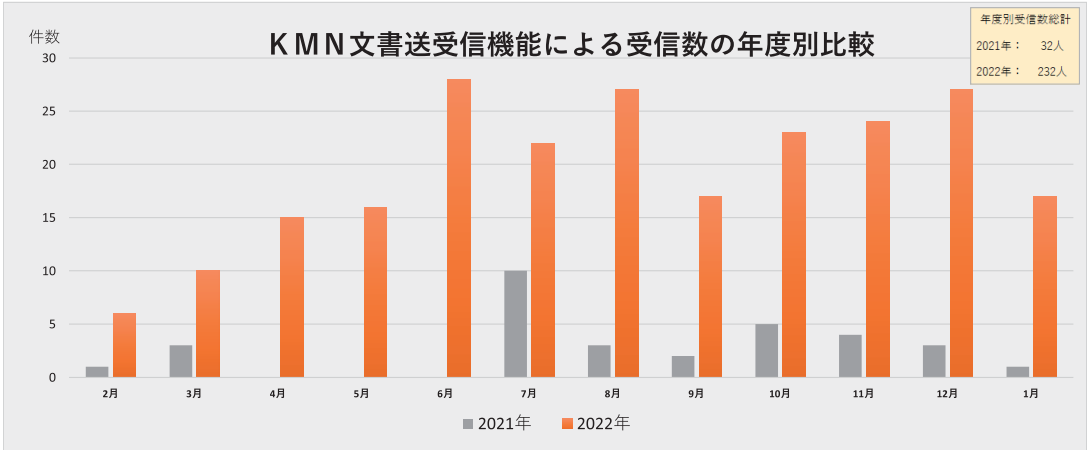
くまもと県北病院 循環器内科



新規参加者数総計

2021年：181人

2022年：361人



派遣先地域医療拠点病院名	公立多良木病院
氏 名	木山卓也
診療科名	循環器内科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

公立多良木病院の月曜日の循環器内科定期外来の支援を実施しております。

公立多良木病院の方針として、新患、再診に関わらずwalk inや救急搬送依頼のあった患者の受け入れは基本断らない為、毎週のように多くの外来患者の紹介を受けております。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

外来患者、入院患者の総数に関しては2021年から2022年にかけて横ばいで明らかに目に見える増加は認めませんでした。

外来に関しては、やはり基本的にかなり高齢の患者様のフォローが多く、外来のブースは常に目一杯使用されている状態で、自身での平均外来患者数も20～30人で、そこに新患者様や場合によっては救急対応もそこに入ってくる状態です。新しく外来でフォローする患者様も増える一方、高齢による老衰をメインとして来院が難しくなるケースや死亡による外来患者の減少がある為、見かけ上は増加していないのではないかと推測しております。

入院患者に関しましても、病床使用率は高く、時折待機やコンサルトなどで病棟上がった際にも病床が空いている印象は受けておらず、こちらから外科へ手術依頼してもすぐに対応頂けております。しかし、入院している患者様もかなり高齢であること、また近隣に回復期の病床を持った病院が全くないことから、急性期から慢性期まで公立多良木病院で担っており一人当たりの入院期間が長くなっていることが入院の患者総数の増加がしない一因ではないかと考えられます。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

2021年から2022年にかけては、新規でのメディカルネットワーク患者の総数は減少していましたが、熊本メディカルネットワーク(以降KMN)文書送受信機能による受診者数については、2022年4月頃より増加し2021年と比較しても2倍以上の受診数となっております。(2021：215人→2022：455人)

また、KMN文書送受信機能による送信数についても3倍以上の送信数となっており(2021：115人→2022：350人)、年々 KMNによる地域連携ネットワークの構築が徐々に進行していつている印象を受ける結果となっております。

4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

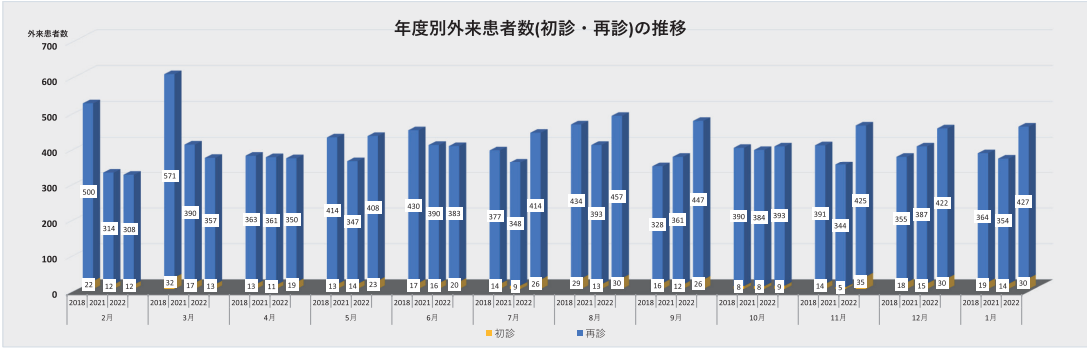
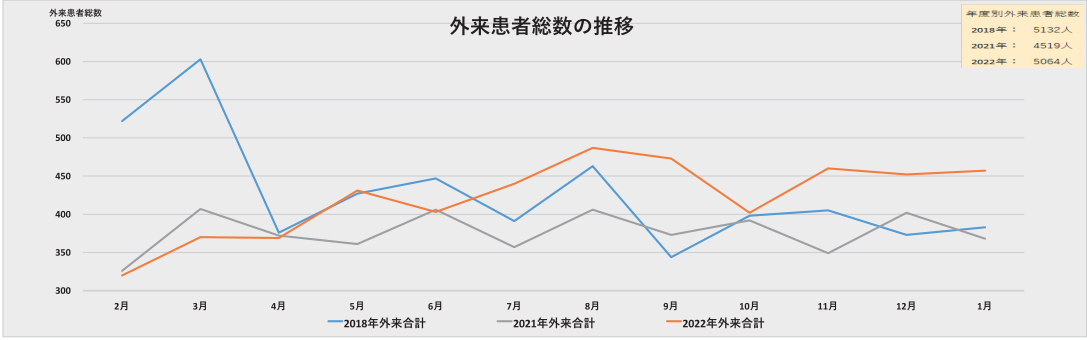
当院で対応の難しい患者の対応を近隣の病院へ紹介する際にも、連携室を通せばすぐにKMNを通して送信できるシステムも構築できている印象であり、緊急の対応が必要な患者のスムーズな情報交換、受入や遠方の病院への患者の相談なども行いやすくなっております。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

公立多良木病院は様々な病院からの受託があり、未だに紙文書での紹介も依然数多くある為、より多くの病院へのKMNの周知や加入を勧めていこうと思います。

多良木地域における地域拠点病院として地域医療に貢献している公立多良木病院において、今後よりKMNの普及による地域医療連携ネットワークの波及を進めていきます。

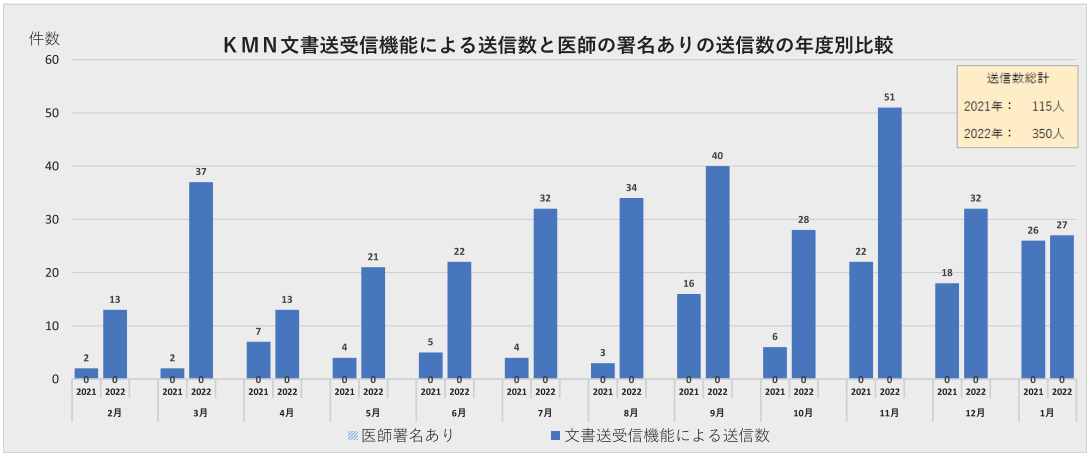
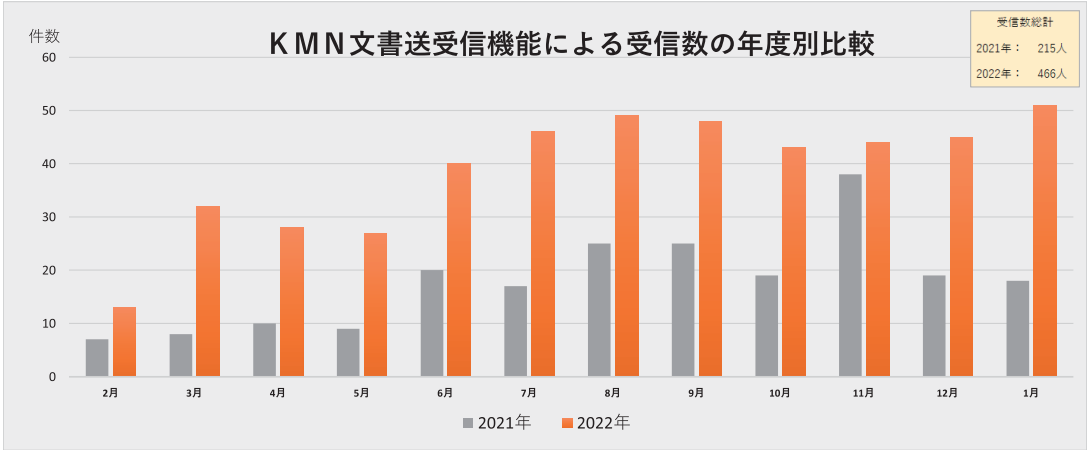
公立多良木病院 循環器内科



新規参加者数総計

2021年：462人

2022年：323人



派遣先地域医療拠点病院名	そよう病院
氏 名	平川今日子
診療科名	循環器内科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

そよう病院で循環器内科医として週に1回の外来診療、月に2回の当直業務にあたっている。外来診療においては1日あたり15人程度の定期外来、さらに新患・コンサルト対応、また同院にはエコー技師がいないため心エコーなどの業務にあたっている。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

2022年度外来再診患者：1536人、初診：27人。昨年度と比較し横ばいの受診人数であった。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KMN新規参加数総計：15人と昨年と比較して増加傾向であった。

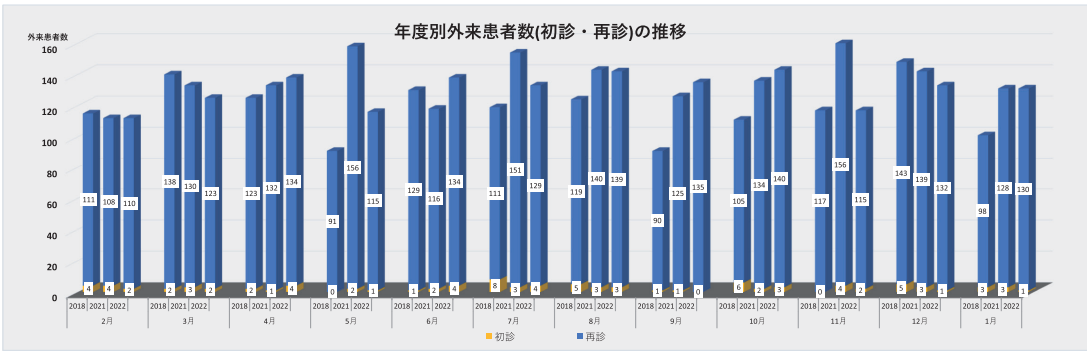
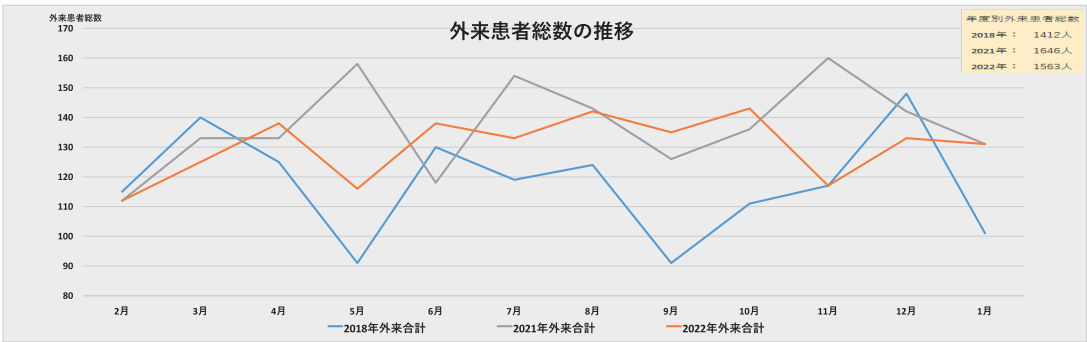
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域の拠点病院において、循環器の専門診療の維持が行えている。受診患者に対するKMNの情報発信を行い参加者が増加傾向となった。また夜間においても救急患者を積極的に受け入れることにより、重症患者においての三次救急拠点病院への搬送をより安全に施行することが可能であり、また軽症～中症患者においても地域完結型の医療の提供が可能となっている。

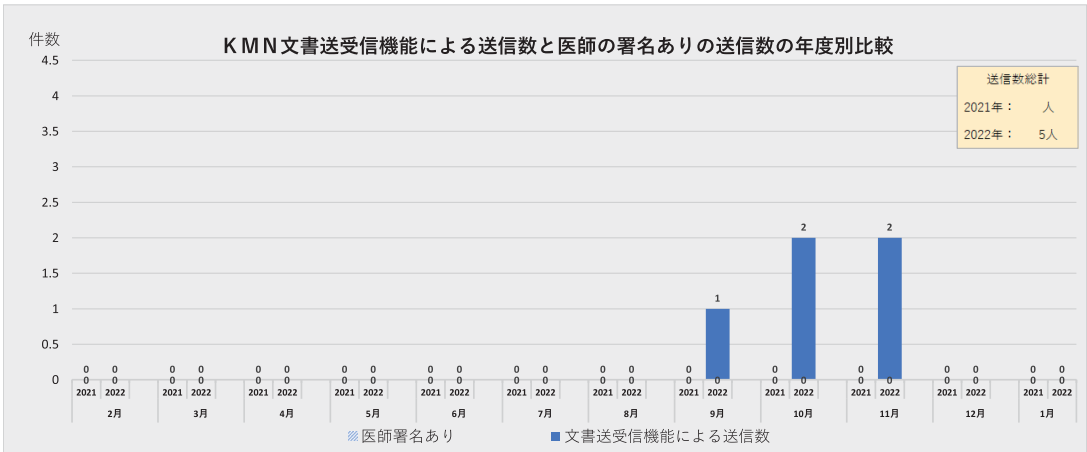
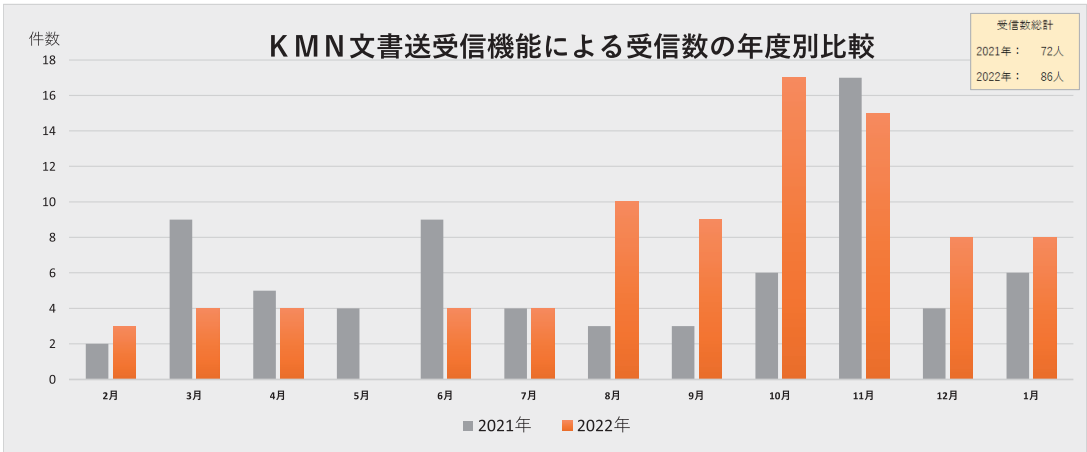
5. 地域医療における今後の課題・解決策等

KMN参加数は増えたものの文書送受信総数の増加には至っていない。そよう病院においては文書送受信を一括して行う部署がなく、多忙な外来診療中に送受信の手続きまで個々のDrで行うのは限界があり、他職種で取り組んでいく必要があると考えられた。

そよう病院 循環器内科



新規参加者数総計
2021年：7人
2022年：15人



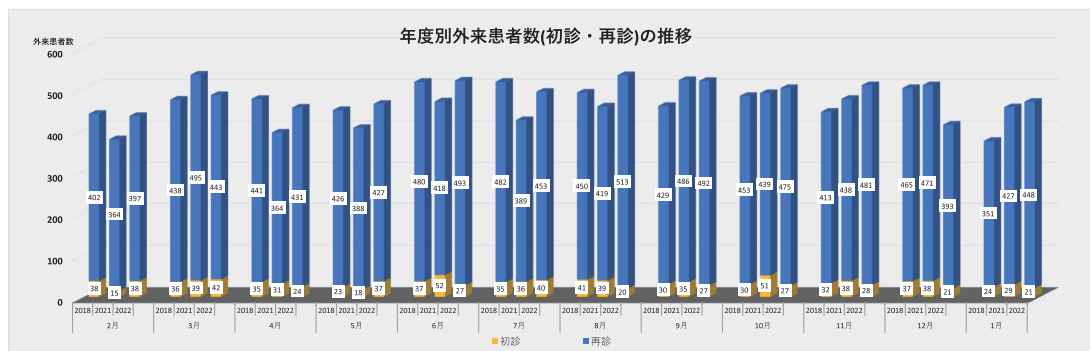
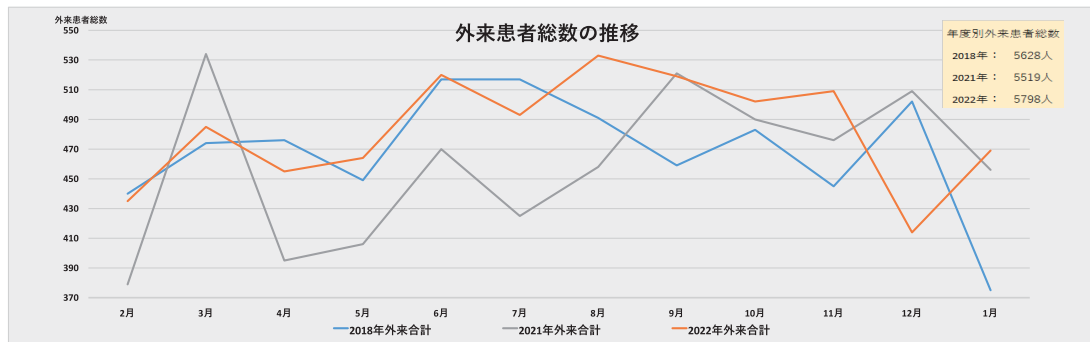
派遣先地域医療拠点病院名	水俣市立総合医療センター
氏 名	小川克大
診療科名	消化器外科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要
- 週1回(水曜日)に手術応援。朝10時～14時まで手術に従事。手術の難易度や手術件数によっては17時頃まで援助することもあった。
2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）
- 手術件数は301件であり例年と横ばいであった。
3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）
- メディカルネットワーク送受信数は増加しており、しっかりと普及できていると思われる。
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況
- 水俣医療センターは外科に3名の医師が在籍しており、手術応援に行くことで、常勤の医師が1名病棟業務、急患対応に従事できるため、このシステムは現時点において非常に有用なシステムであると思われる。
- 現状を維持し、水俣地域の外科治療が滞りなく行われるように努めるべきである。
5. 地域医療における今後の課題・解決策等
- 現在、水俣のできる治療、大学でしかできない治療に分別され、必要に応じて我々に相談があり、紹介されている。
- 患者さんによっては、当院でしかできない治療が終了したにも関わらず、今後のfollow upを大学で希望される場合がある。
- 今後は、役割分担をしっかりと行い、水俣でもできるようなfollow upは水俣に依頼していくこと、患者さんへの啓蒙が必要である。

派遣先地域医療拠点病院名	水俣市立総合医療センター
氏 名	宮田辰徳
診療科名	消化器外科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要
- 手術：一月あたり6名(毎週火曜日勤務、手術応援)
- 肝胆膵外科を中心に、消化管外科、乳腺外科、血管外科および緊急手術にも携わった。
- 教育：手術時に外科をローテート中の初期研修医、後期レジデントに対し、手術や手技の指導を行った。遠隔通信システムを用いて、リアルタイムで肝胆膵外科の手術指導、緊急患者の治療方針についての助言を行った。
- KMN推進：ご紹介はKMNを通じてお願いしますとアナウンスを頻回に行った。KMNを用いて、複数名の逆紹介を熊本大学に行った。
2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）
- データには示されていないが、昨年よりも腹腔鏡下肝胆膵手術件数が増加した。
3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）
- 昨年度よりメディカルネットワークを用いた患者紹介が増加した。
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況
- 本事業により、地元で手術をご希望される患者に対する安全な手術の提供が可能となることに加え、肝胆膵外科の普及にも貢献した。
5. 地域医療における今後の課題・解決策等
- 引き続き、地域における診療支援、教育支援を継続的に行う必要がある。

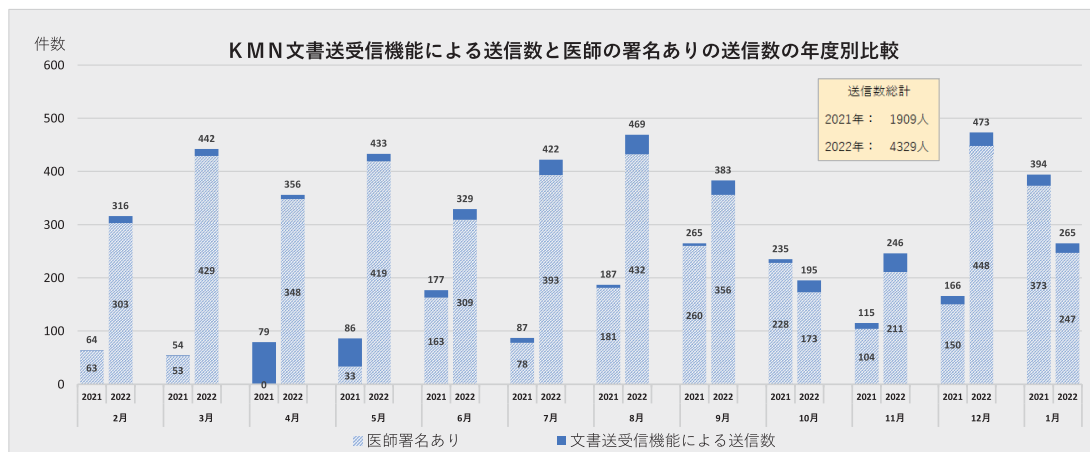
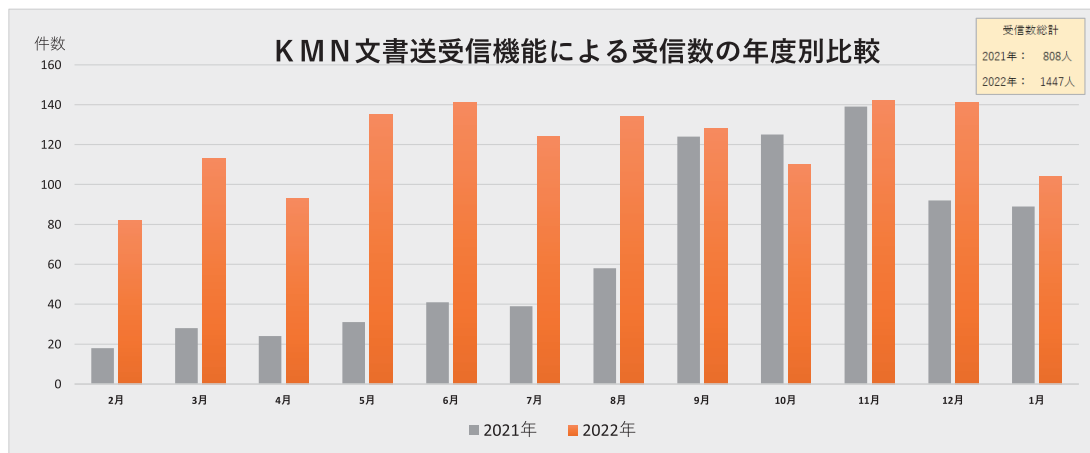
水俣市立総合医療センター 消化器外科



新規参加者数総計

2021年：2596人

2022年：3397人



派遣先地域医療拠点病院名	くまもと県北病院
氏 名	後藤理沙
診療科名	乳腺・内分泌外科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

乳癌は女性の罹患率が第一位の悪性疾患であり早期診断・早期治療で根治が可能となる疾患ですが、乳腺診療は専門性が高く、マンモグラフィなどの検査機材を有する施設も限られており、地域医療の現場では診察や治療のできる機関が不足していることが問題となっています。とくに玉名や荒尾などの地域には、乳腺専門医が集中している熊本市内への通院が困難な高齢の乳癌患者や検診で精査が必要と判断された患者が多くみられます。

後藤がくまもと県北病院に派遣され、乳癌の精査・診断・薬物治療の拠点としての働きをすることで地域医療への高い貢献があったといえます。また、外科的治療が必要と判断される症例では熊本大学病院へ紹介を行うことで、一般的な根治術だけでなく限られた施設でしか実施できない乳房再建についても、同時に選択肢として提示することができました。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

COVID-19の流行などにより外来患者数が減少している月もありますが、2018年と比較するとおおむね2021年と2022年の外来患者数は増加傾向にあります。また、いずれの年度も週1回の勤務の中で、化学療法や病理学的精査、末期乳癌患者への対応などの、診療時間を長く要する症例が含まれており、診療を行った件数としてはかなり多いものと考えます。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

2021年と比較して2022年には著明にKMNの利用が活発となりました。熊本大学病院からくまもと県北病院への情報提供には、事務的な対応の取り決めがなされており非常に円滑に利用ができています。くまもと県北病院側から熊本大学病院へ送信するケースについては対応が難しい(電子カルテで作成した情報提供書をwordファイルとして書き出しができない)こともあり件数が伸びていない状況です。

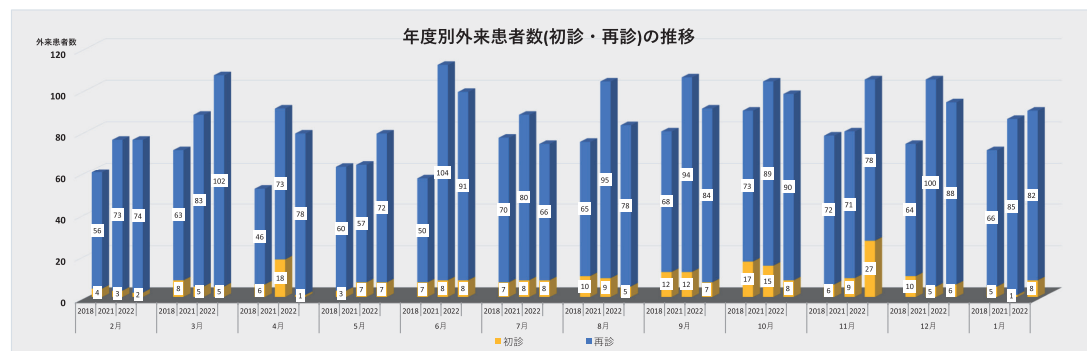
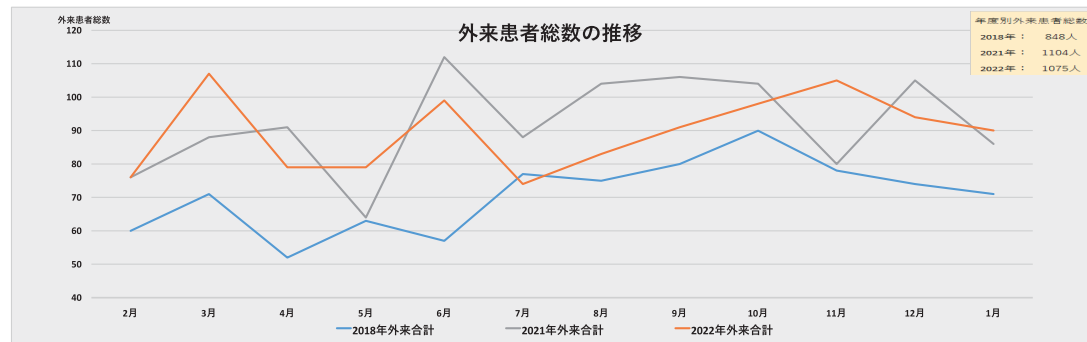
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

自覚症状を訴えて受診する患者の診療だけでなく、くまもと県北病院は検診センターも有しており、そこで乳癌が疑われる患者をひろいあげてから精査を外来診療で行うことで、玉名・荒尾地域周辺の乳癌診療に貢献しています。また、周辺のクリニックなどと連携も密に行うことで、専門性の高い診療情報を伝えることができていると考えます。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

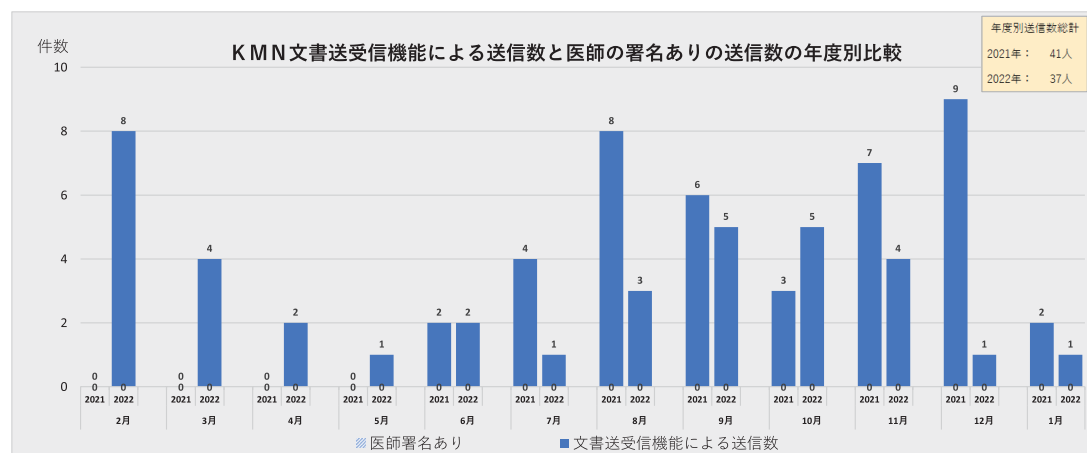
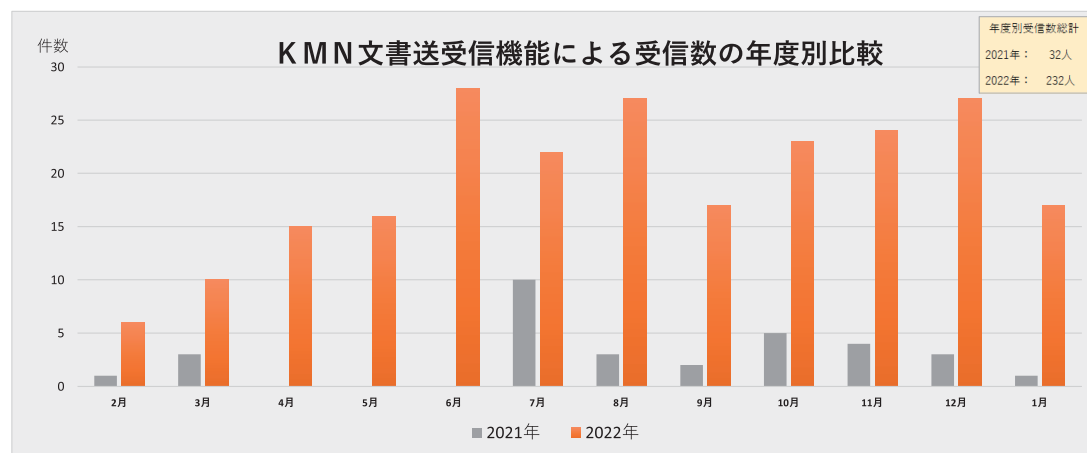
画像上、軽微な異常所見のみの患者(精査加療が可能な機関での経過観察は不要だが検診では要精査になってしまうような症例)は、開業医等でフォローを受けることが一般的です。しかしながら玉名地域にはマンモグラフィを設置している施設が他に殆どなく、軽微な異常しかないにも関わらず、フォローを熊本市内のクリニックまで依頼するという状況になることがあります。これについては、検診センタースタッフに、過去の画像と比較をして大きな変化がない場合には極力検診センターでフォローができるように相談をいたしました。引き続き検診施設とも意見をすり合わせながら、患者のデメリットが少なくなるように対応したいと考えます。

くまもと県北病院 乳腺・内分泌外科



新規参加者数総計

2021年：181人
2022年：361人



派遣先地域医療拠点病院名	人吉総合医療センター
氏 名	脊川卓也
診療科名	泌尿器科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

大学病院との密な診療連携をとることによって、人吉地域では困難な症例を大学病院へ迅速に紹介できる体制が構築され、医療連携体制が向上した。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

人吉地域では困難な治療（ロボット手術、稀少癌の化学療法など）も、大学病院へ迅速に紹介できる体制が構築され、医療連携体制が向上した。それに伴い年々外来患者数が増加傾向である。さらに外来の増加に伴い入院患者・手術件数も増加している。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

- 人吉地域で治療に難渋する症例に関してはKMNを通じて熊本大学病院に相談・カンファレンスを行い、迅速な治療を行うことが可能であった。大学病院から人吉への逆紹介の際もKMNの利用でスムーズな転医が可能であった。
- 人吉から大学病院へ治療紹介する際に、KMNを使用することで画像検査結果などを頻回に送付する必要がなくなり、患者さんの通院負担も軽減された。
- 人吉地域では2020年7月の水害で他地域医療機関に搬送する際に、KMNが大いに活躍した。万一の災害時には患者情報の共有面でKMNは非常に有効なネットワークであり、今後も熊本県全域に普及推進していきたいと考える。

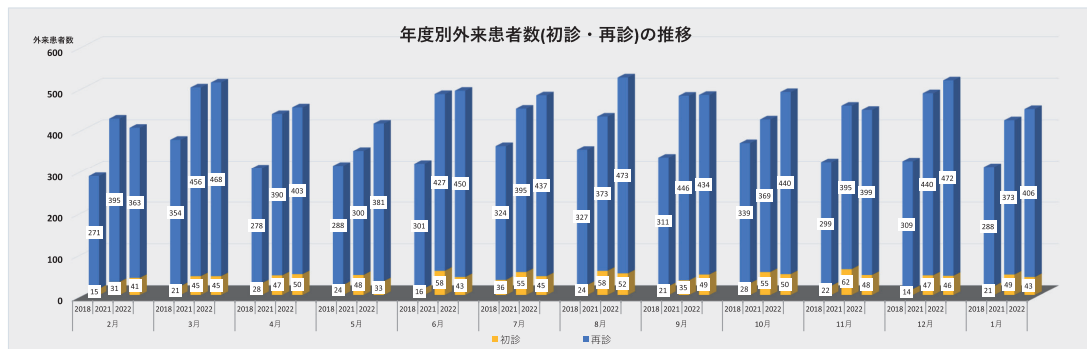
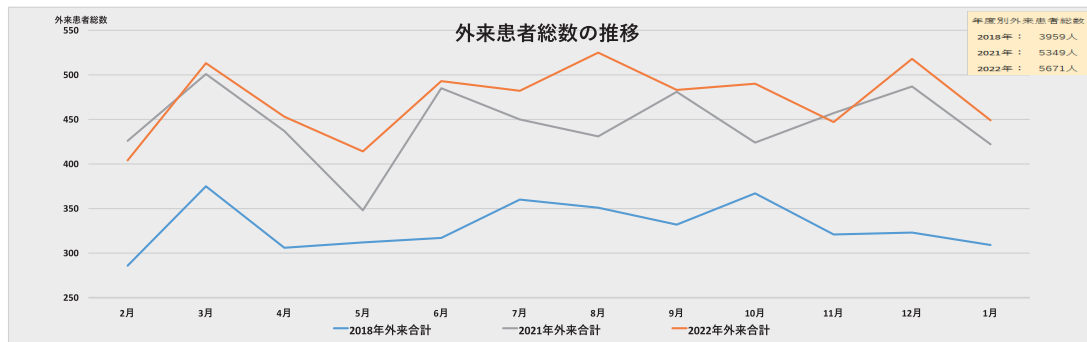
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域医療では診療科の偏在や常勤医師数の減少などもあり、依然高度な医療を十分に提供することは困難な状況である。しかし、本講座による地域医療拠点病院と県拠点病院の連携を密にすることで、人吉地域では診療困難な疾患症例を治療可能にし、地域医療サービス向上に努めている。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

私自身も過去の地域医療勤務の際に治療困難な症例に多数直面した経験がある。本講座のような地域医療拠点病院への医師派遣を十分に行うことで、大学病院などの県拠点病院との距離が縮まり医療機能の向上が見込める。さらに、医師数減少で労働負担のかかる地域医療医師の負担軽減にもつながると考える。今後は大学病院だけではなく、熊本市内の拠点病院も含めて地域拠点病院に医師派遣ができる体制が構築できれば、ある程度の医療格差も是正されていくのではと考える。

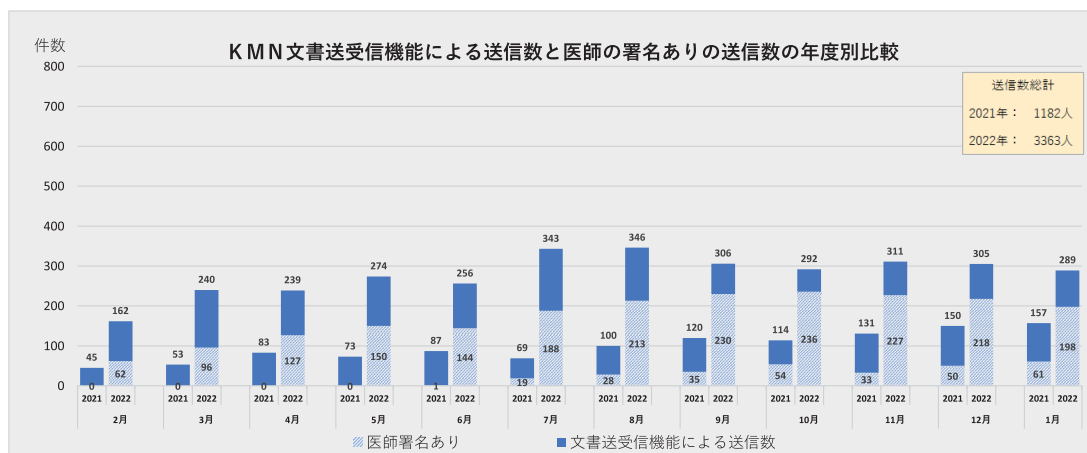
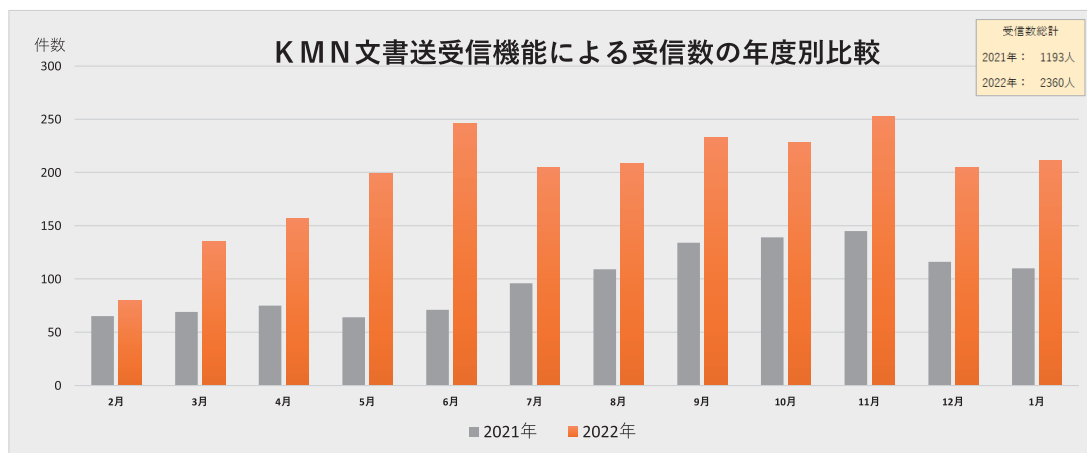
人吉医療センター 泌尿器科



新規参加者数総計

2021年： 人

2022年： 人



派遣先地域医療拠点病院名	小国公立病院、水俣市立総合医療センター
氏 名	松尾 倫
診療科名	小児科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

常勤医を中心とした該当地域の小児医療体制維持のための診療支援を行なっている。

専門領域(小児循環器)に該当する患者に関しては派遣先地域拠点病院にて診療・定期的フォローを実施しており都市部への紹介受診等の患者負担軽減が得られている(地域完結)。

2. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

小児受診患者数は大きな変動なく診療支援により常勤医を中心とした該当地域の小児医療体制は維持されている。派遣医師の専門領域を活かした外来診療の構築も行なっている。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

小児医療の多くは急性疾患であることからKMNの活用は全体的に少ないが、地域在住の慢性疾患患者に関する情報共有など徐々に普及してきている。

4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

拠点病院として常勤医を中心とした該当地域の小児医療体制を維持している。

派遣医師の専門領域を活かした外来診療、KMNなどを活かした高次医療機関との連携にて地域にて完結できる医療体制の構築を行なっていく。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

地域に住んでいるこどもの健やかな成長発達のためには感冒罹患時等の対応だけではなく健診や予防接種なども含めて地域に根付いた医療を継続していく事が望まれることから、その地域全般の小児医療を支えられている常勤医を中心とした医療体制の継続は不可欠であり、地域小児科医の手助けとして定期的な医療支援は続けていく必要がある。

派遣先地域医療拠点病院名	小国公立病院、水俣市立総合医療センター
氏 名	宮村文弥
診療科名	小児科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

現在、小国公立病院には月1回、水俣市立総合医療センターには月2回勤務している。いずれの施設においても、小児一般診療だけでなく発熱外来や自分の専門分野である循環器診療を行うことで、今までは熊本市まで出てくる必要性のあった子供の診療を現地で完結することができている。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

小国公立病院、水俣市立総合医療センターともに、コロナ禍で一旦減った外来診療数も2021年比で明らかに回復基調となっており、より大学病院から派遣される専門医のニーズは高まっていると考えられる。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

現地診療で完結できるケースが多く、残念ながらKMNの普及にはまだ至っていない部分が多くある。ただ、今後も患者数増加に合わせて、当院だけでなく熊本労災病院や熊本赤十字病院などとの連携を図る必要のある症例は増えてくると推測され、そのようなケースにおいては積極的にKMNを利用し、その普及を図りたいと考えている。

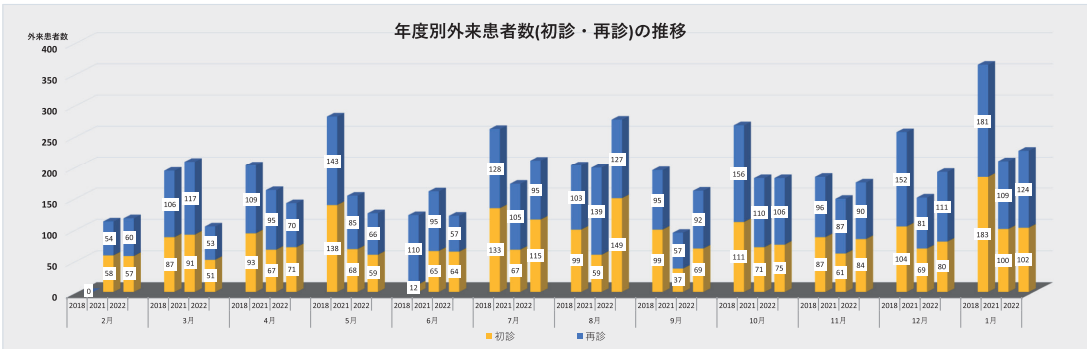
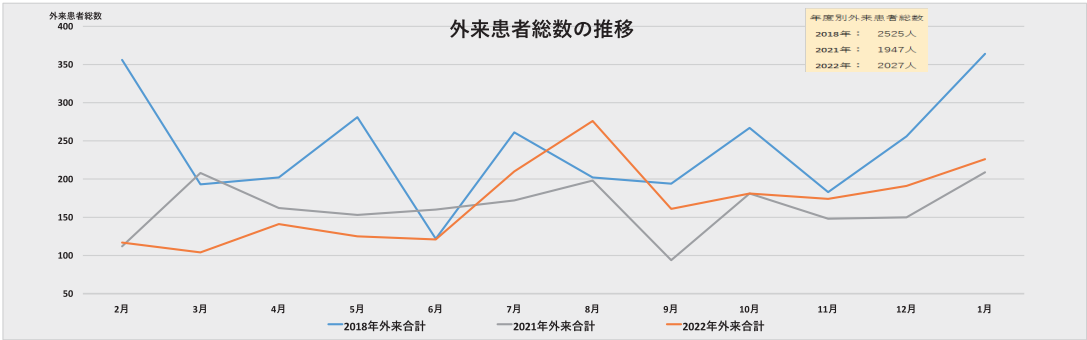
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

上記二院はまさに地域における最後の砦となる病院となっている。そこで、大学病院の医師が診療を行うことは、地域住民にとって診療レベルの向上だけでなく、病院に対する信頼感を構築する上でも大変意義のある取り組みであると考え。今後もその点も頭に入れて、診療に当たっていきたいと考えている。

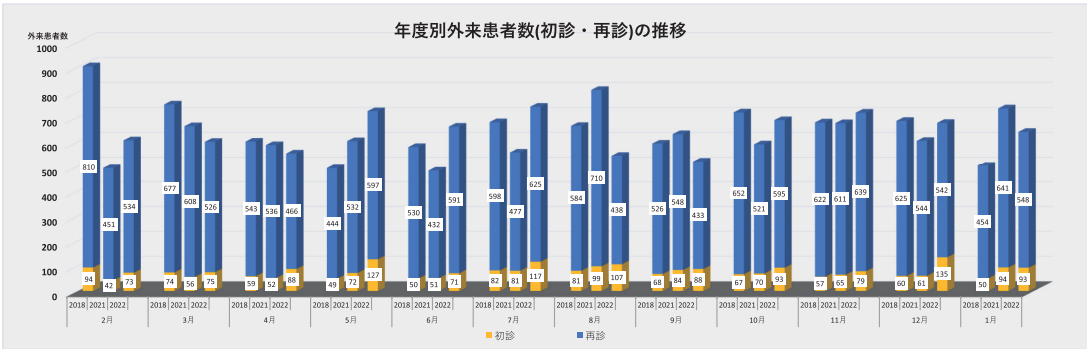
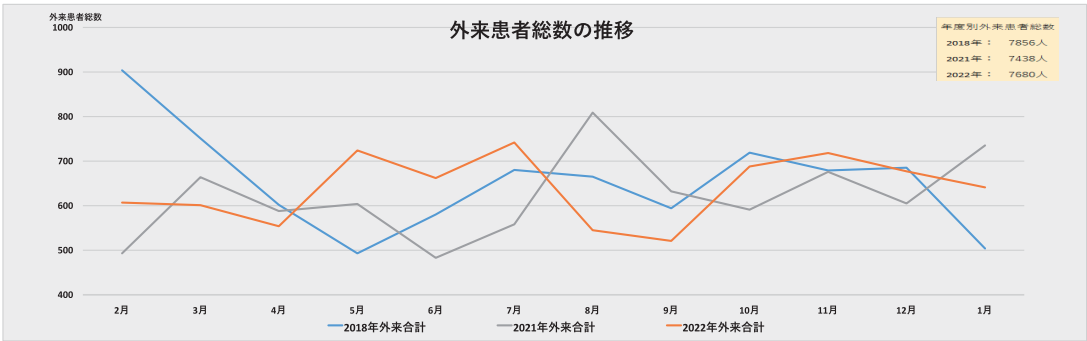
5. 地域医療における今後の課題・解決策等

医療設備の劣化はかなり問題となりうる。大学病院と同等である必要は全くないものの、診療所レベル以下の古い器具しかないような場合もあり、KMNを通じてそのような医療器具の刷新も、診療するにおいて重要な視点と思われる。

小国公立病院 小児科



水俣市立総合医療センター 小児科



派遣先地域医療拠点病院名	小国公立病院
氏 名	徳永琢也
診療科名	整形外科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

- 拠点病院の医療機能の向上、地域で不足する専門医療の提供
派遣先の地域医療拠点病院には整形外科常勤医は不在であり、大学病院から3名の専門医が週3回(火、木、金)派遣され、外来診療に従事した。整形外科疾患に対する保存療法および手術などの専門的な加療が必要な患者の専門医への紹介、入院患者の整形外科コンサルトへの対応、専門医療機関での急性期加療後の入院および外来リハビリテーションの処方、指示、地域の開業医からの紹介への対応を行った。
- 地域におけるネットワーク構築に向けた地域医療の現状分析及び新たな方策の検討・提案・実践等
地域医療の現状分析として、高齢者が多く、骨粗鬆症をはじめとしたロコモティブシンドロームの患者の割合が高い。従来は、骨粗鬆症の治療介入、治療効果判定、超音波を用いた骨密度検診後の受診の際に、前腕での骨密度検査のみの対応であったため、腰椎、大腿骨近位部での測定が望ましいことを提案し、派遣先に新たに腰椎、大腿骨近位部での測定が可能な設備が導入された。また、整形外科の中でも、膝関節や肩関節、足関節などの専門性が高い分野について近隣で完結できる症例に対しては阿蘇医療センターに派遣されている整形外科医師との間で相互に紹介し対応した。
- 熊本県医師修学資金貸与医師や自治医科大学卒業医師の地域勤務と、新専門医制度を踏まえたキャリア形成の両立に向けた支援。
症例数は少ないものの地域医療で派遣された研修医からの診察依頼について対応した。地域での講演活動などについては新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり施行できなかった。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

派遣先の地域医療拠点病院には整形外科常勤医は不在であり、大学病院から3名の専門医が週3回(火、木、金)派遣され、外来診療に従事した。一般的な外傷、変性疾患などの整形外科疾患への外来での対応の他、入院患者の整形外科コンサルトへの対応、地域の開業医からの紹介に対応した。手術などより専門的な精査・加療が必要な場合は、近隣の日田市、菊陽町の医療機関や、大学病院を含む熊本市内の医療機関に紹介し、急性期治療後のリハビリテーションについての逆紹介に対応した。

2022年の整形外科の外来患者総数は4355人で1ヶ月あたり300名から400名で推移した。初診患者、再診患者ともに2018年、2021年と比較すると減少し、特に7—8月における減少が顕著であることから、新型コロナウイルス感染の第7波が影響している可能性が考えられた。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

小国公立病院におけるKMNの新規参加者数は2021年39名、2022年153名と増加傾向であった。一方KMNでの診療情報提供書の医師署名ありの送信数は、2021年度0件、2022年5件にとどまっており、徐々に周知がなされているものの、現状では十分に活用できていない。今後も継続的な普及推進が必要である。

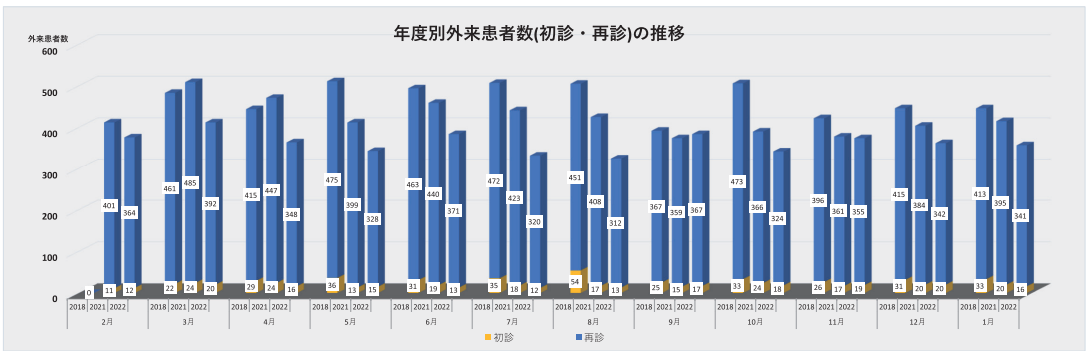
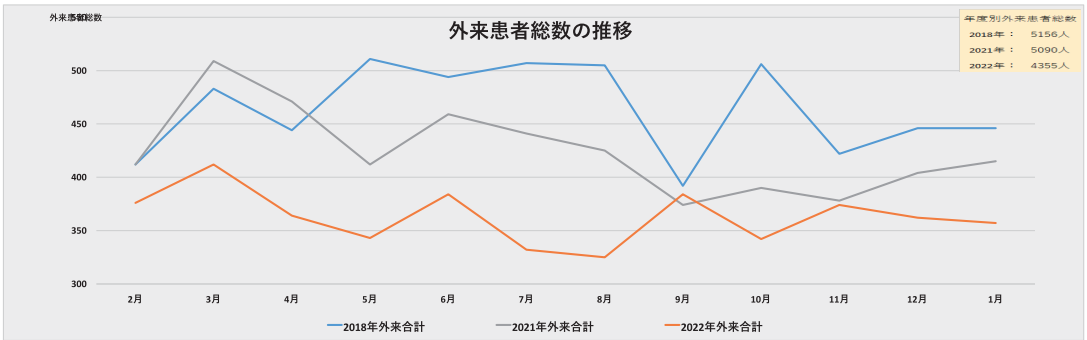
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

整形外科常勤医が不在の派遣先病院において、整形外科疾患に対する拠点病院の医療機能の向上および不足する専門医療を提供する役割については一定の成果が出ているものの、KMNの普及活動や熊本県医師修学資金貸与医師や自治医科大学卒業医師の地域勤務と新専門医制度を踏まえたキャリア形成の両立に向けた支援については現状では不足しているため今後より一層推進する必要がある。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

- 近隣・他県医療機関との連携
地域医療では一つの医療機関での診療科や対応可能な検査が限られている場合も少なくない。近隣の医療機関における診療科(対応可能な疾患)、対応可能な検査の情報が得られれば地域医療ネットワーク構築に有用であると考え。特に、本講座の派遣先施設(小国公立病院)や、近隣の地域医療拠点病院(阿蘇医療センター)の他科からの派遣の情報(診療科、曜日)やKMNの普及推進活動、活用方法などの情報を共有できれば地域における科の垣根を越えたネットワーク構築に有用だと考える。
- 高齢化・介護との連携
前述の移動手段に関する課題の他、複数診療科の受診を要する場合も多く、診療科間で情報を共有する必要がある。また、日常生活での介護を要する場合も多く、通常は入院の適応のない疾患においても、自宅での生活が困難であるため社会的な入院となる症例も多い。解決策としては、本人、キーパーソン、介護サービスとの連携が必要と考えられるが、地域における利用可能な介護施設などは限られている。

小国公立病院 整形外科

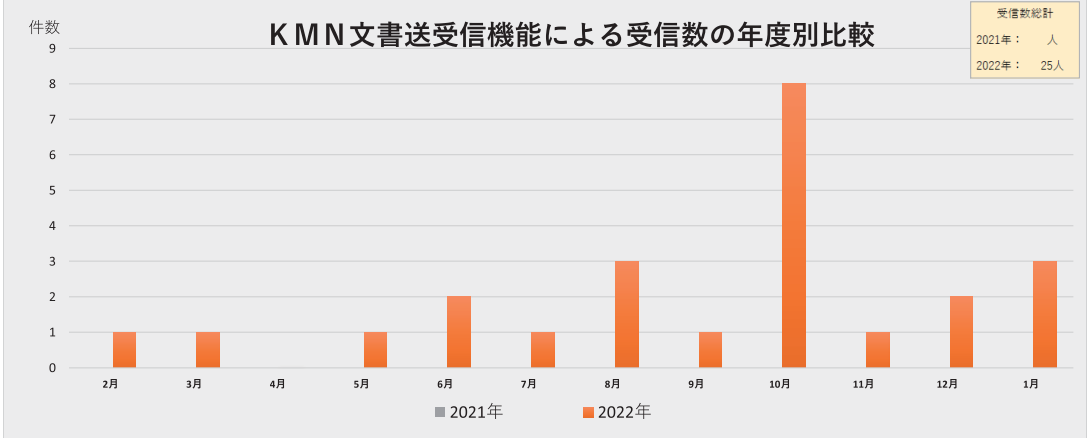


新規参加者数総計

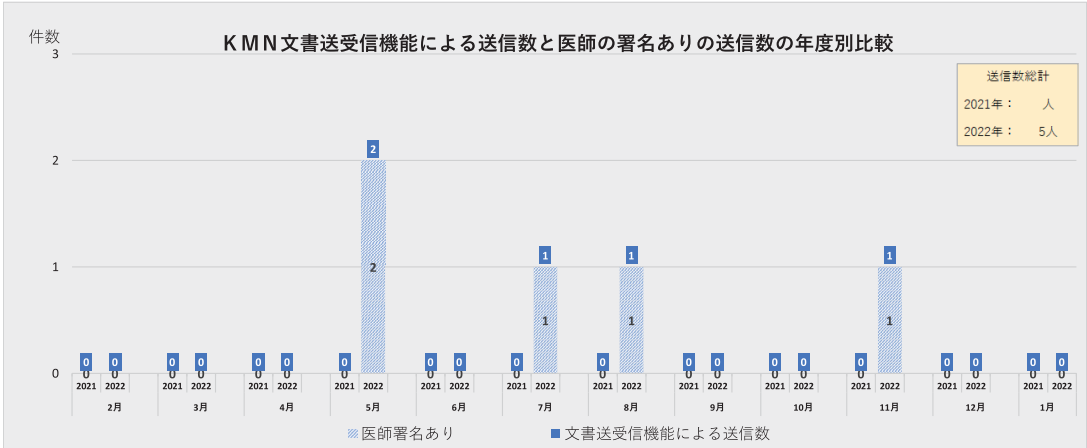
2021年： 39人

2022年： 153人

KMN文書送受信機能による受信数の年度別比較



KMN文書送受信機能による送信数と医師の署名ありの送信数の年度別比較



派遣先地域医療拠点病院名	宇城総合病院
氏 名	久永 哲
診療科名	整形外科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

派遣先の宇城総合病院では、上記の期間において夜間の救急外来での当直を担当した。整形外科疾患だけではなく、内科系疾患もふくめ平均4-5人/日程度の診療を行い、地域拠点病院における救急患者の対応を行った。また夜間の入院患者の急変等も主治医と連携しながら対応した。

またコロナ対応病院であるため、発熱患者におけるコロナPCR検査の実施も行ったことも事業成果として報告する。

今後も同様に地域医療拠点病院の夜間救急外来での当直を対応することで、地域医療の一端を担う予定である。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

右記のごとく、2022年は前年と比較し、外来患者が増加した。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

現在大学病院に所属しており、他病院に転院依頼をするために積極的に利用している。また担当患者のくまもとメディカルネットワークに対するアナウンスを積極的に行っている。また宇城総合病院での診療で、他院に搬送する必要がある重症患者に対しても積極的に利用している。前年度と比較し、KMN文書送受信機能による送信数および受信数は前年度と比較し、増加した。

4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

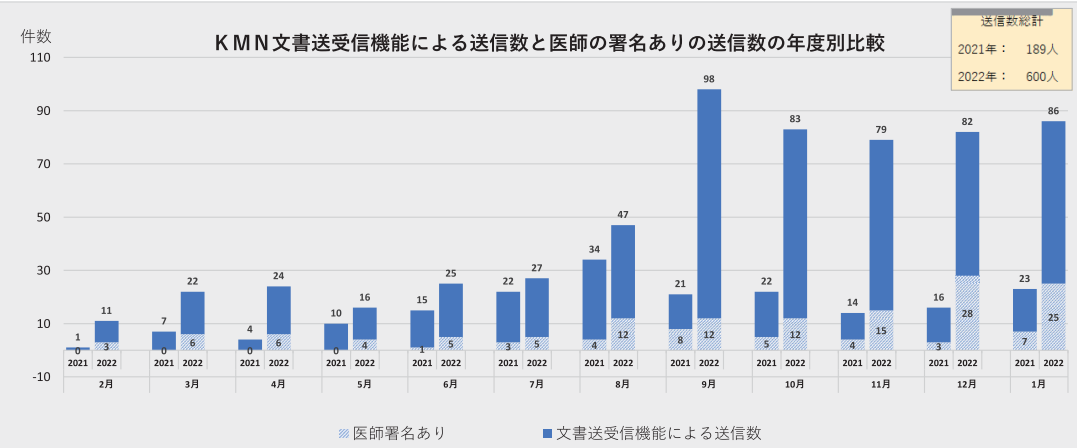
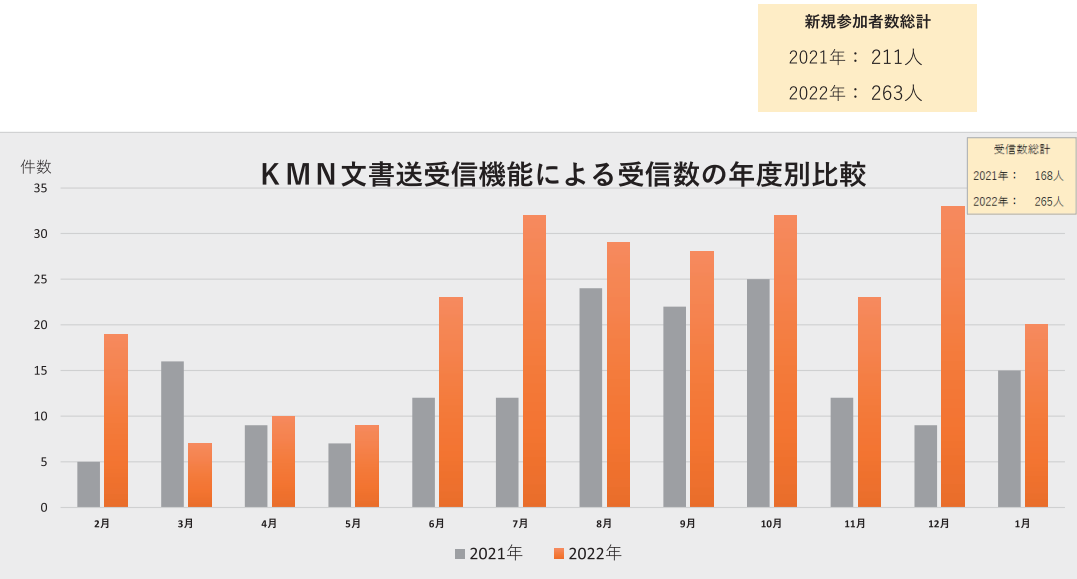
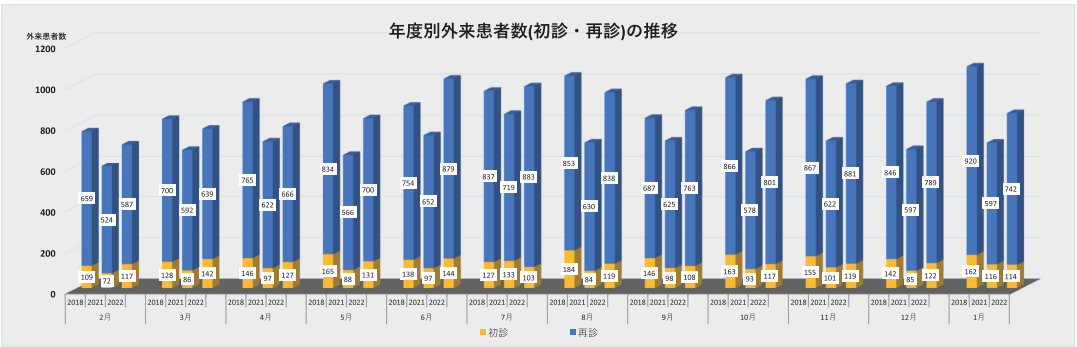
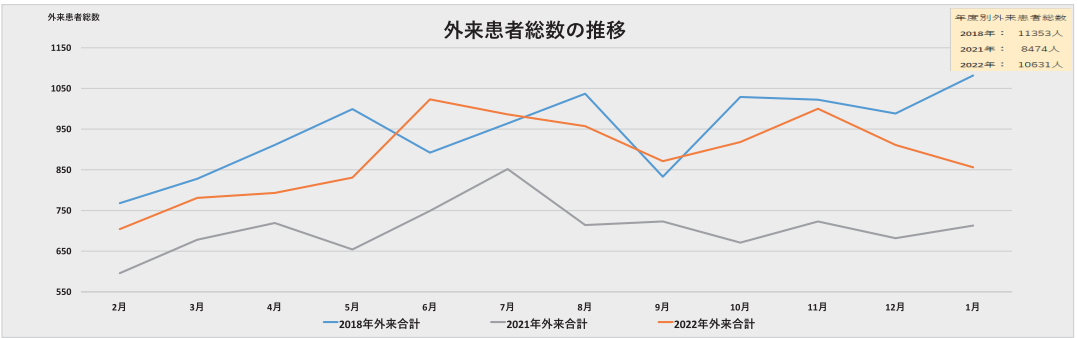
大学病院より宇城総合病院から派遣され、診療を担当し重症の患者は済生会病院や大学病院等の第三次医療施設に搬送し、軽症から中等症患者は宇城総合病院での医療で完結させることで、熊本県内の医療負担の軽減につながったと思われる。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

現在担当している宇城総合病院 救急外来における地域医療での今後の課題としては、夜間における人員の確保ではないかと思われる。

夜間人員が確保し、各科オンコール制度が確立できればより重症患者の対応がスムーズに行くことが予想される。

宇城総合病院 整形外科



派遣先地域医療拠点病院名	阿蘇医療センター
氏 名	湯上正樹
診療科名	整形外科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

外来総数は前年度より減少したが、新患者数は増加した。地域の中核病院として、その他の阿蘇地域の病院・クリニックとの連携を図り、かかりつけ医となっていただくように再診患者の紹介を行ったことが一因と考える。新患者数は増加しており、阿蘇地域の病院・クリニックや地域住民に評価していただけていると考える。

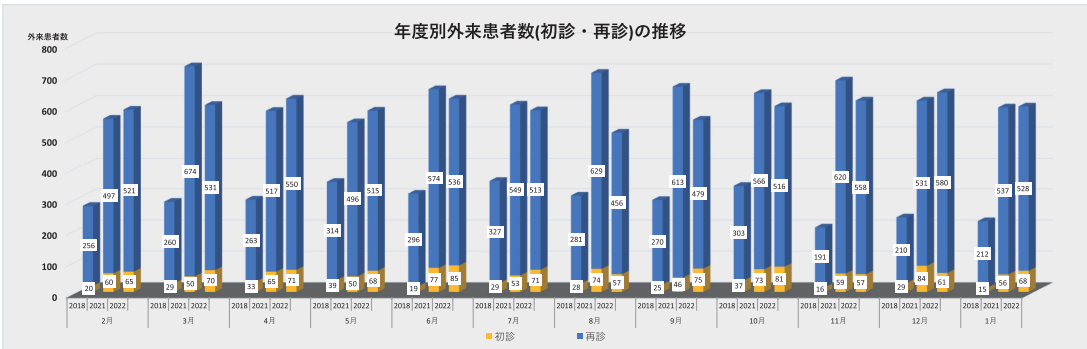
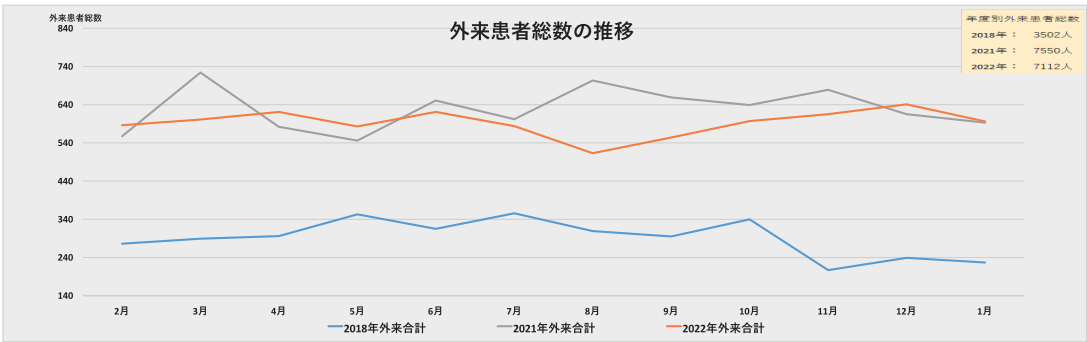
2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

手術数は従来より多いものではなく、前年と著変はない。2023年度に小関節（手・肘・足）領域で必要な手術機材を購入していただける予定である。常勤の麻酔科医はいない状況であるが、ブロック麻酔にて手術を行うことで、手術数の増加を図りたい。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KMNについては、前年と著変はなく、今後も効率的に活用していきたい。

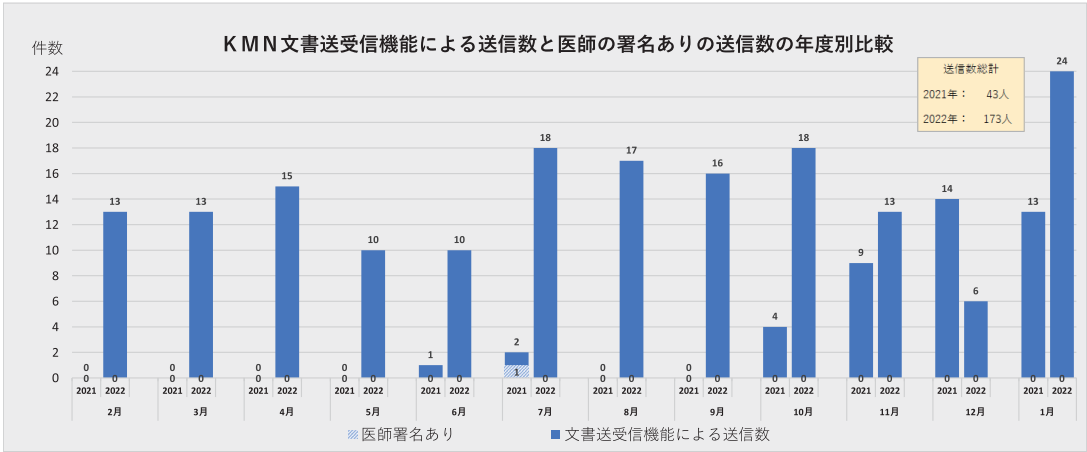
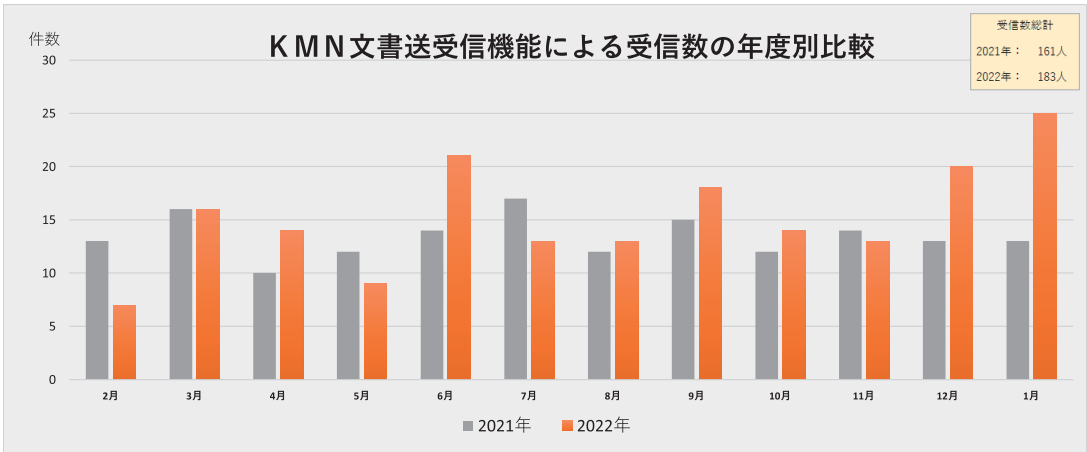
阿蘇医療センター 整形外科



新規参加者数総計

2021年：222人

2022年：201人



派遣先地域医療拠点病院名	令和4年4月1日～令和5年3月31日
氏 名	眼科
診療科名	松村智世、渡邊文香
事業期間	小国公立病院

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

週2回の外来患者の診療を行っている。阿蘇方面には開業医も含め眼科が少なく総合病院の眼科も当院のみであるため、地域の患者様にとっては通院負担軽減に重要な存在であると考えます。白内障・緑内障や糖尿病で長期フォローアップが必要な方が外来には多い印象であり今後も外来支援は必要と考える。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

外来患者数はここ3年で大きな増加はないものの、一定して月300人弱の患者の診察を行っている。初診の患者も月20～30人程度で、今後もこの傾向は続くと思われ。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

メディカルネットワークは病院全体のデータでは新規参加者数は2021年39人→2022年153人、受診数は2021年0人→2022年24人、送信数は2021年0人→2022年5人 と、少しずつではあるが確実に件数を伸ばしている。

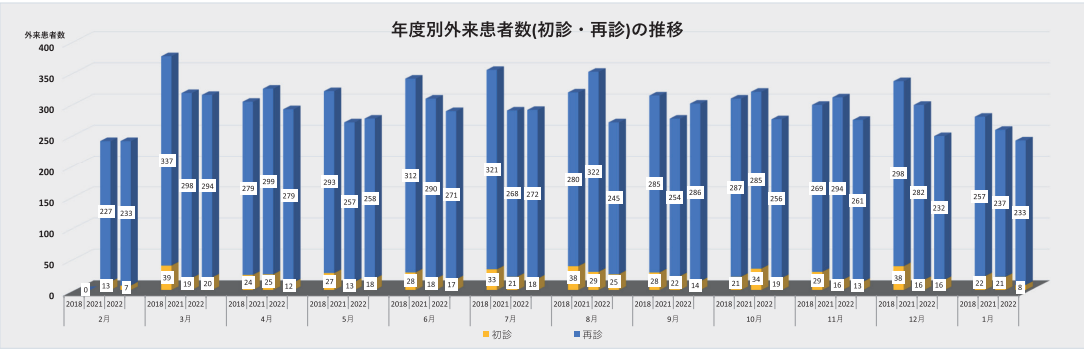
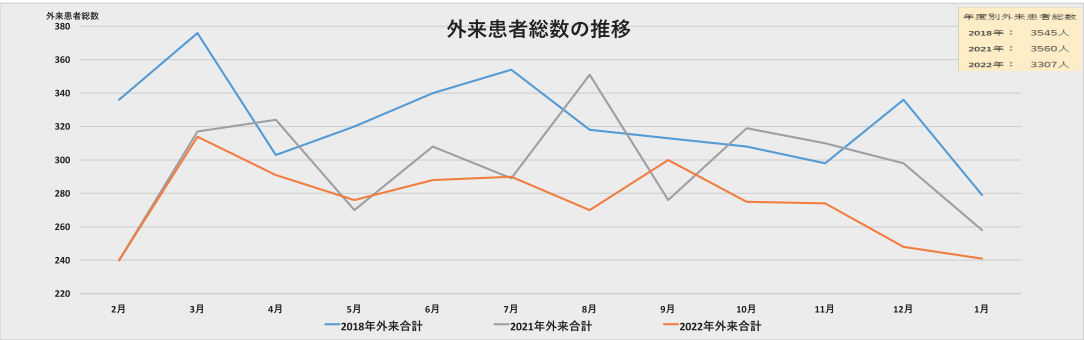
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

阿蘇には開業医も含め眼科が少なく、公立病院での眼科診療は地域の患者様にとって通院の負担が大きく軽減される。大学病院からも小国方面の患者をフォローアップのために紹介することもあり、地域医療拠点病院としての本院の存在はとても重要であると考えます。

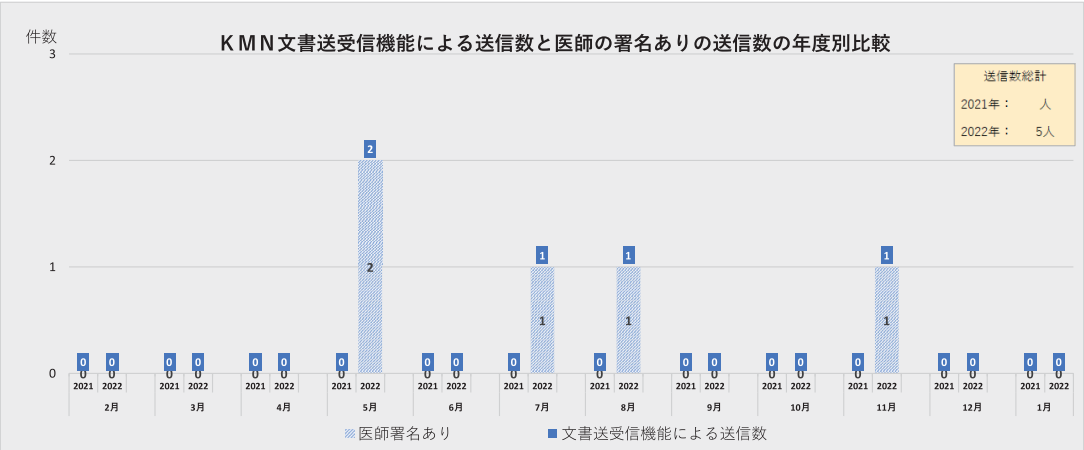
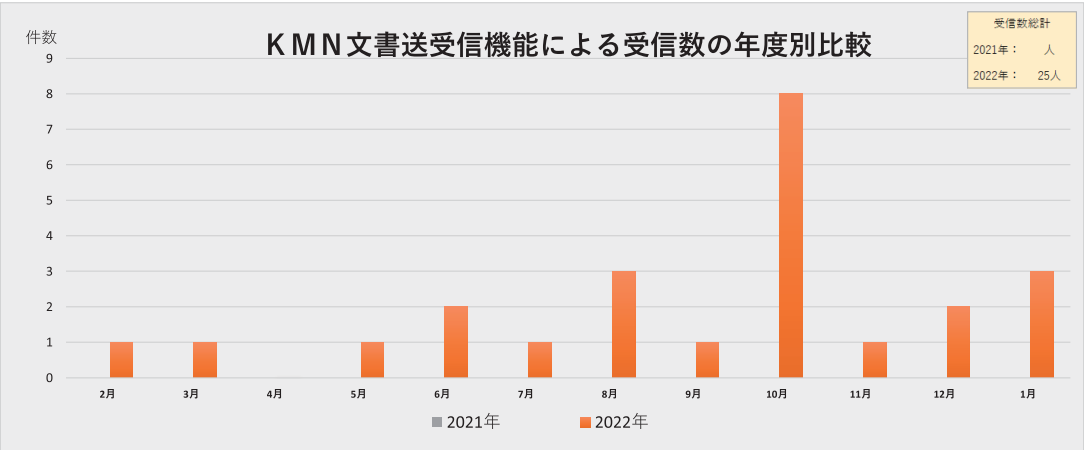
5. 地域医療における今後の課題・解決策等

総合病院であるができる診療内容は限定されていて（簡易的な視力検査・眼圧検査、細隙灯検査、眼底診察、視野検査）、精査が必要な場合は近医眼科や熊本市内の病院への紹介が必要な状況である。画像検査機器（OCTなどの網膜解析装置やレーザー装置など）などが充実していれば、院内で解決できる部分ももう少し増えるだろうと思われる。（導入コストはかかるが。）

小国公立病院 眼科



新規参加者数総計
2021年： 39人
2022年： 153人



派遣先地域医療拠点病院名	熊本県立こころの医療センター
氏 名	日高洋介
診療科名	神経精神科
事業期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

熊本県立こころの医療センターは県立精神科病院ということもあり、民間精神科病院では対応が難しい症例を受け入れている。本年度も新型コロナウイルスの流行が継続したが、一般病院や民間精神科病院で受け入れが難しい精神疾患を持つ新型コロナウイルス罹患者の受け入れを行ってきた。報告者は、外来・宿直業務を行うことで常勤医の負担を軽減し、本院の業務が円滑に行えるように支援した。

2. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

患者数は、外来・入院ともにここ数年減少傾向であるが、本寄附講座事業は上記のように本院の診療に寄与している。

3. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

当院はKMN利用登録施設でないが、今後も、病院側と話し合い、KMN利用を検討していく必要がある。

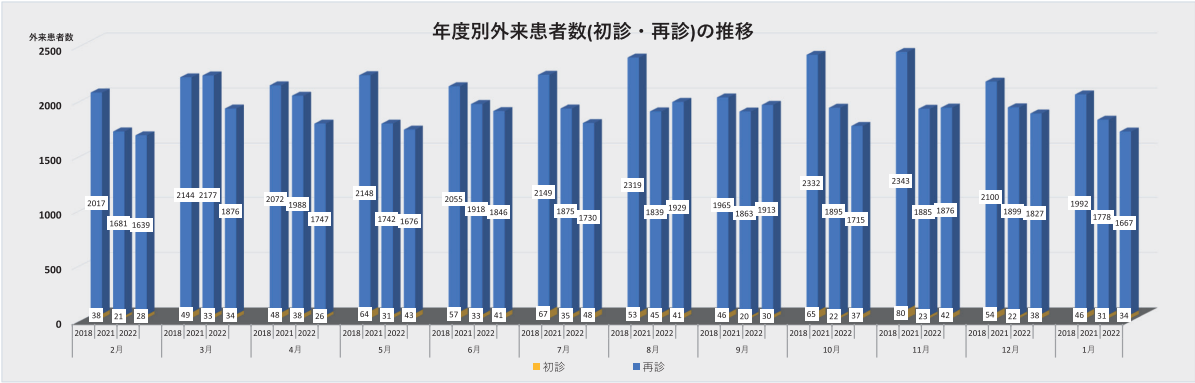
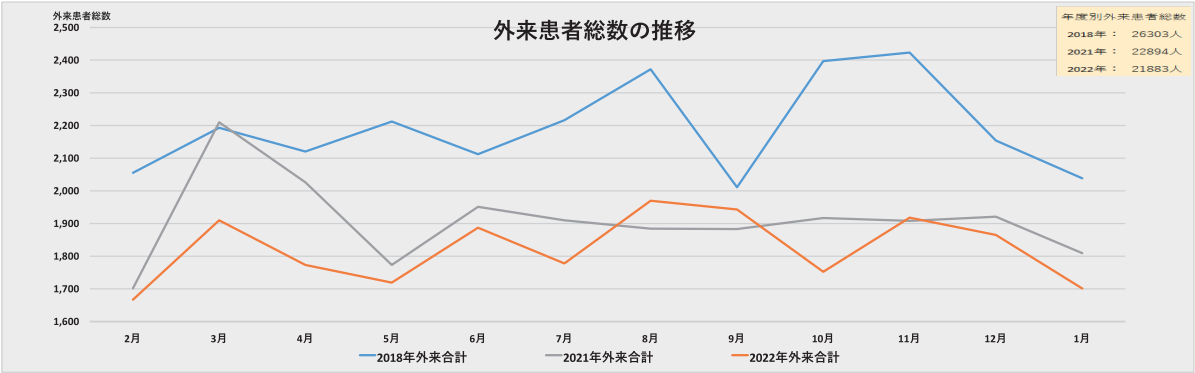
4. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

現時点で、各精神科病院から積極的に患者を受け入れている状況とは言い難い。今後、KMNが利用できるようにし、対応困難事例を含め、多くの患者を積極的に受け入れていく必要がある。

5. 地域医療における今後の課題・解決策等

当院は公立病院であるがゆえに、待遇面等を理由に民間病院と比べ就職する精神科医師が少ない。今後、いかに十分な医師を確保するかが課題である。

県立こころの医療センター 神経精神科



7 感染症対応実践学寄附講座

1. 活動概要

【スタッフ一覧】

- 教授(兼任) 松岡 雅雄 (血液・膠原病・感染症内科学講座)
日本血液学会評議員、日本癌学会評議員、日本ウイルス学会評議員、日本HTLV-1学会理事、日本学会議連携会員
- 准教授(兼任) 中田 浩智 (感染免疫診療部)
日本内科学会認定内科医、インфекションコントロールドクター(ICD)、抗菌化学療法指導医、日本エイズ学会認定指導医、日本感染症学会認定感染症専門医、日本血液学会認定血液専門医、日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会認定血液指導医、日本感染症学会認定感染症指導医
- 特任講師 岩永 栄作
日本内科学会認定内科医、日本血液学会認定血液専門医、日本血液学会認定血液指導医、日本内科学会総合内科専門医
- 特任助教 古田 梨愛
日本内科学会認定内科医、日本医師会認定産業医、日本血液学会認定血液専門医、日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会認定血液指導医
- 特任助教 岡林 比呂子
日本内科学会総合内科専門医・指導医、日本呼吸器学会専門医・指導医、日本呼吸器内視鏡学会気管支鏡専門医、難病指定医、身体障害者福祉法指定医

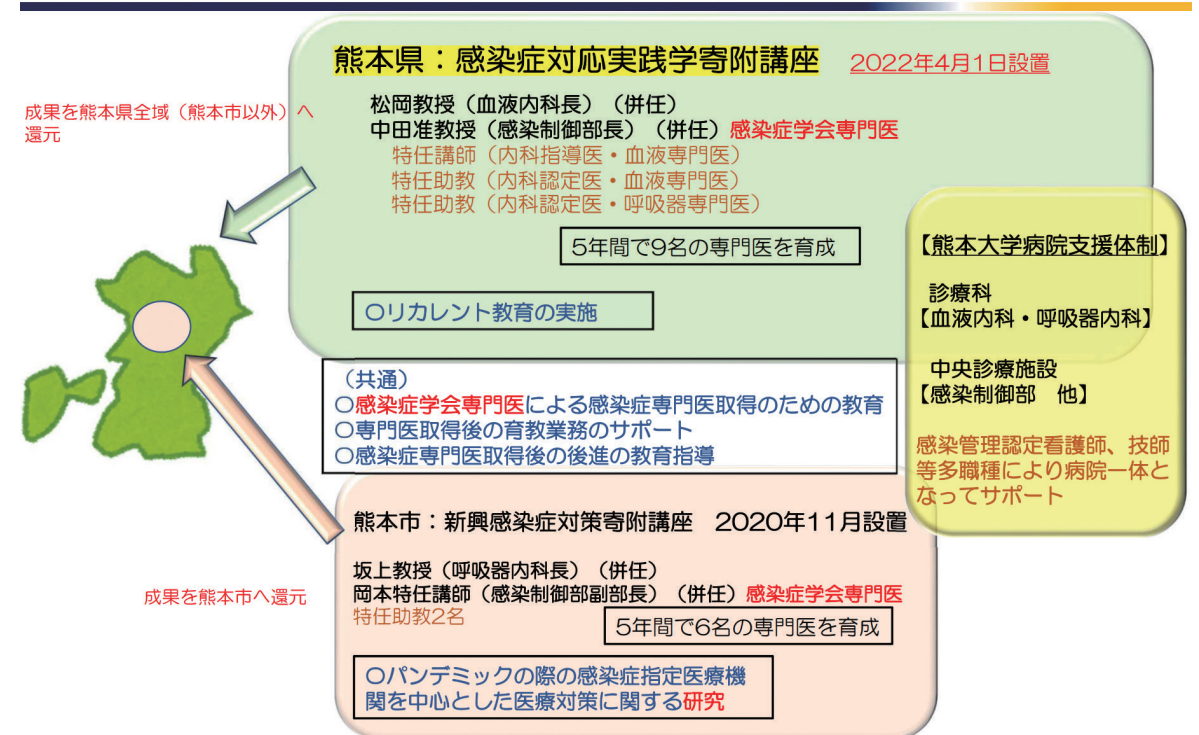
寄附講座設置概要

現在大流行している新型コロナウイルス感染症をはじめ、多くの新興ウイルス感染症が出現し、人類にとって大きな脅威となっている。新型コロナウイルス感染症で実感されたように、人々の移動の高速化により一箇所で発生した感染症が瞬間に全世界に拡がる時代となっている。

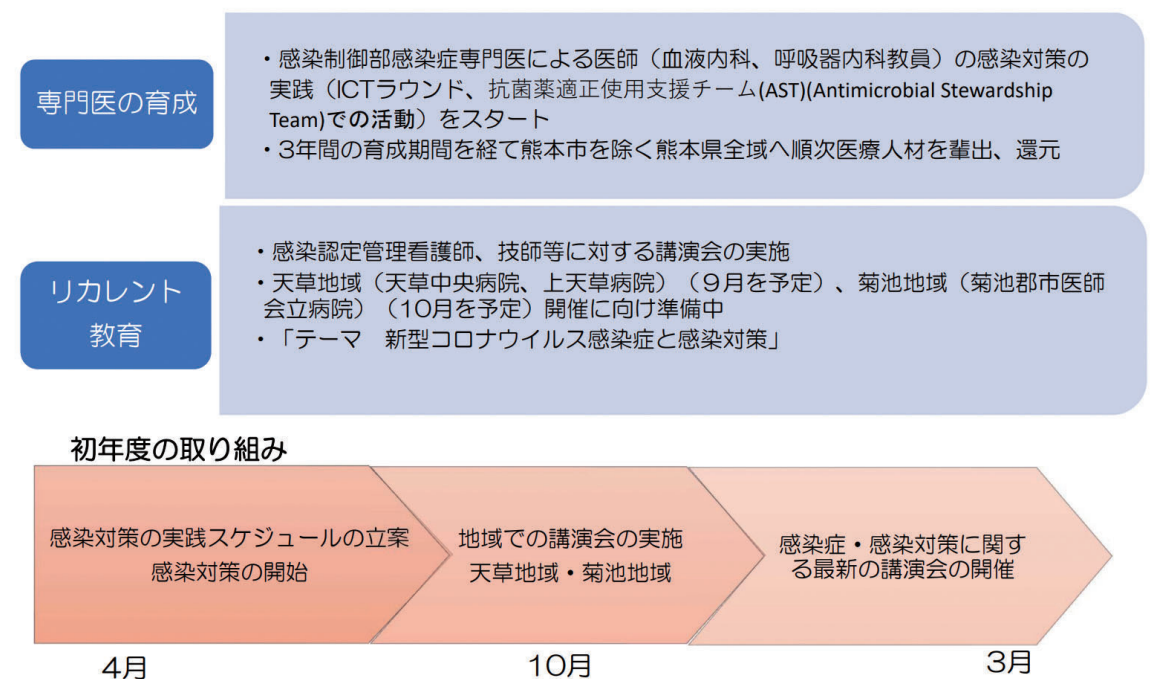
新興感染症や災害時の感染症に対応できる幅広い知識、経験を有する医師・メディカルスタッフが極めて少ない状況であり、これらの感染症に対応できる人材の育成は喫緊の課題となっている。

本講座においては、熊本県全域で感染症に対応できる医療体制の連携・強化を図ることを目的として、熊本大学病院の感染症専門医を中心に、血液内科や呼吸器内科などの関連診療科及び感染制御部などの協力を得て、病院一体となって、講座運営、教育を行うこととしている。プランとしては、5年間で9名の感染症専門医を育成することとしており、先に設置された市の寄附講座においては「熊本市」へ、県の本寄附講座においては、「熊本市以外の熊本県全域」へ、その育成した人材を送り込むこととしている。併せて、熊本県内の感染認定管理看護師、技師等に対する講演会の開催等、リカレント教育の実践により、県内各地域における医療現場の最前線に立つ医療従事者の人材育成、ひいては、その地域のゆるぎない医療体制の確立へと繋げていければと考えている。熊本大学病院の理念には、「高度な医療安全管理によって、患者本位の医療を実践し、医学の発展及び医療人の育成に努め、地域の福祉と健康に貢献すること」がうたわれており、これらの課題の解決に向けて貢献することは、社会的使命の一つであると考えている。

熊本大学病院における感染症関係寄附講座の概要



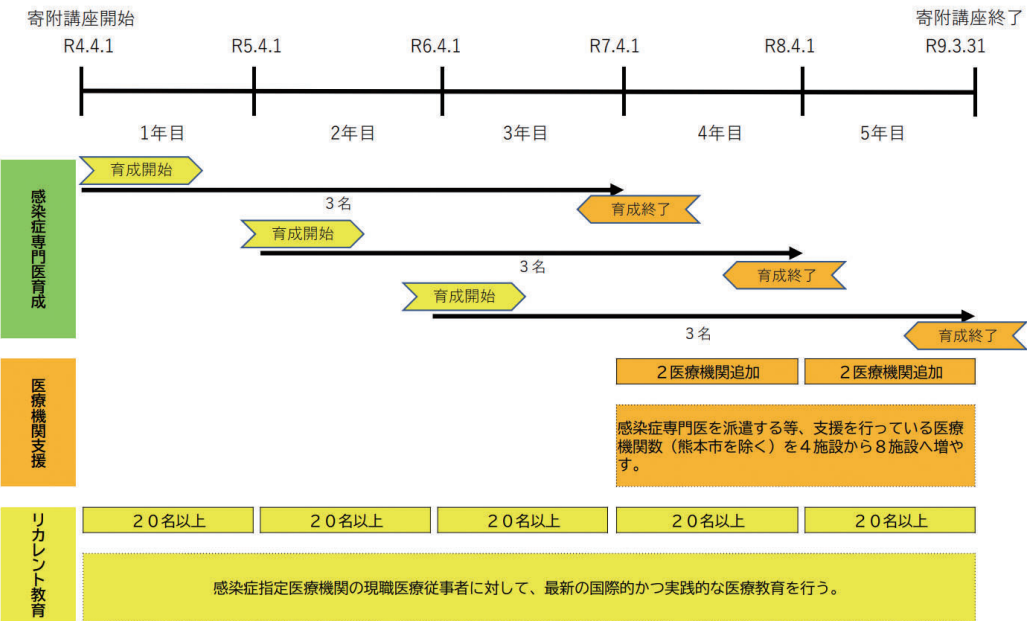
感染症対応実践学寄附講座の4月からの取り組みについて



感染症対応実践学寄附講座事業期間中のプラン

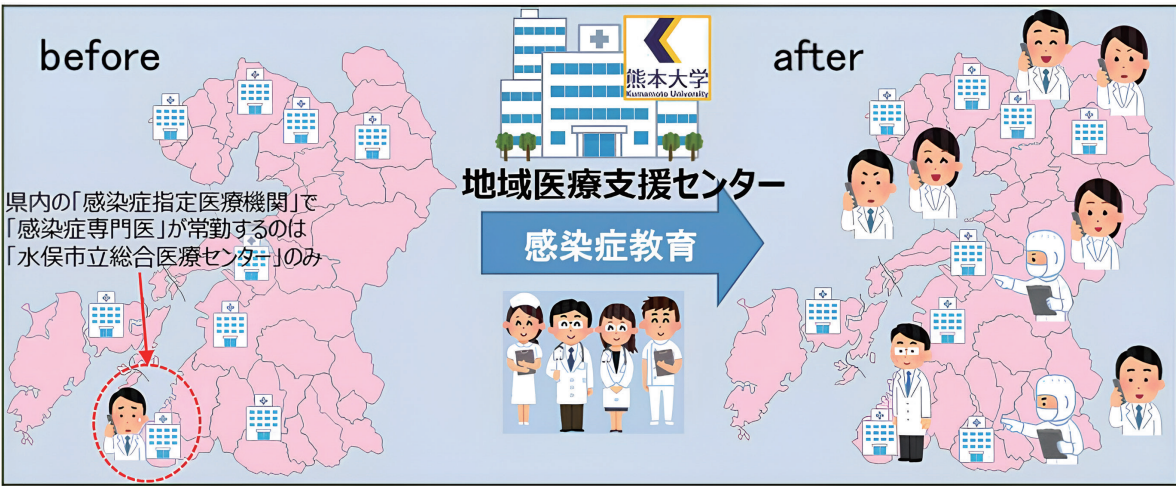


【熊本県／感染症対応実践学寄附講座】※イメージ図



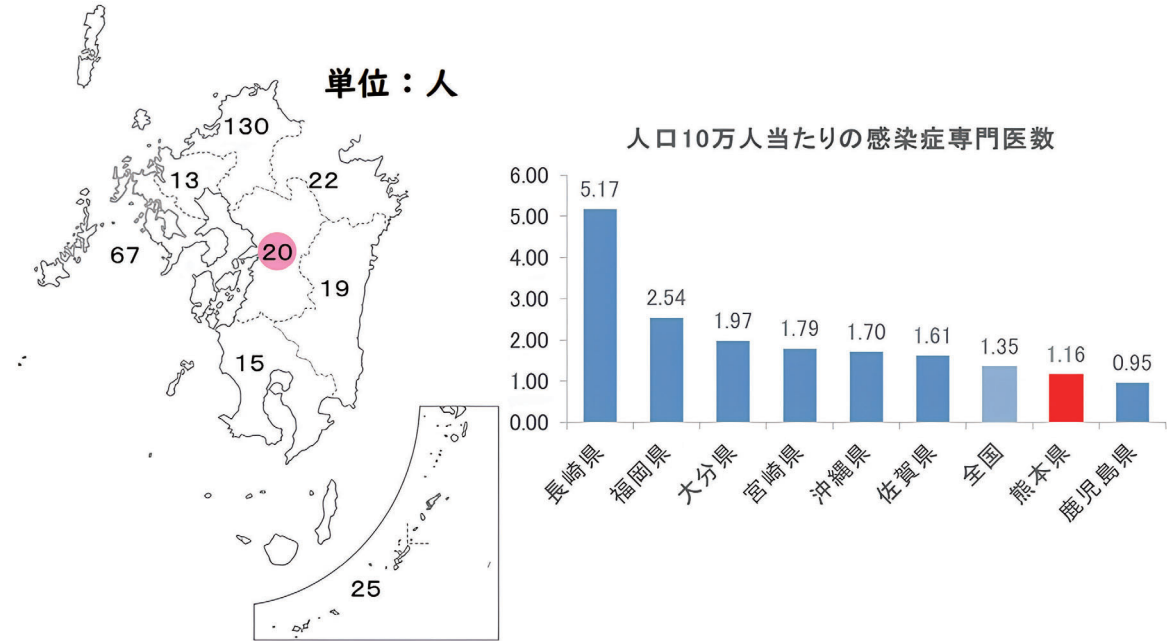
熊本県内における感染症専門医および施設認定の状況

熊本県の感染症専門医の数は全国平均を下回っており、研修を実施できる認定研修機関も限られている。専門医数の 1/3 は医師経験40年以上であり、世代交代への対応が求められている。人口の約半数を占める熊本市ですら、感染症指定医療機関が1カ所(8床)しかなく、急激な感染症の急増に指定医療機関だけで対応するには限界が懸念される。



【参考：九州各県の専門医認定者数】
福岡県 131、佐賀県 12、長崎県 67、熊本県 20、大分県 22、宮崎県 19、鹿児島県 15 沖縄県 25

【県内の「感染症専門医」数 令和4年（2022年）4月現在】



2. 年間活動実績

月	活動内容
通年	【新型コロナウイルス診療】 ・重症患者受け入れ、(大学病院 ICU) ・中等症患者受け入れ、(大学病院西病棟 8 階) 【一般感染対策】 ・抗菌薬適正使用支援チーム(AST) (Antimicrobial Stewardship Team) 会議：毎週火曜日 ・院内感染対策チーム (Infection Control Team : ICT) ラウンド：毎週木曜日
9 月	臨床実習入門「感染対策」(学生向け実習指導)
10 月	感染症対応実践学寄附講座セミナー
1 月	感染症セミナー
2 月	感染症対応実践学寄附講座セミナーその 2

熊本大学病院 令和4年度 感染症セミナー
地域を守る感染症対策
 ～熊本からの発信～

日時 令和5年1月21日(土) 13:30～16:10
場所 熊本城ホール 3F 大会議室A1 (熊本市中央区税町3-40)

本セミナーは会場参加とWEB配信を選択いただけるハイブリッド開催となります

対象者 感染症対策に関わる医師、看護師、社会福祉士、介護福祉士、事務職員等
 ※一般の方もご参加いただけます。

参加無料
 (事前申込制)
 <定員>
 会場参加 100名
 WEB参加 200名

プログラム

はじめに
 (13:30～13:50) 松岡 雅雄
 熊本大学大学院 生命科学研究部 血液・膠原病・感染症内科学講座
 熊本大学病院 感染症対応実践学寄附講座 教授

座長 坂上 拓郎
 熊本大学大学院 生命科学研究部 呼吸器内科学講座
 熊本大学病院 新興感染症対策寄附講座 教授

講演1
 『新型コロナウイルス感染症との3年を振り返って～阿蘇医療センターの取り組み～』
 (13:50～14:40) 講師: 甲斐 豊
 ※10分休憩 阿蘇市病院事業管理者 兼 阿蘇医療センター院長

座長 松岡 雅雄
 熊本大学大学院 生命科学研究部 血液・膠原病・感染症内科学講座
 熊本大学病院 感染症対応実践学寄附講座 教授

講演2
 『新型コロナウイルス感染症に對峙して～東京都健康安全研究センターの取り組み～』
 (14:50～15:40) 講師: 吉村 和久
 東京都健康安全研究センター 所長

質疑応答
 (15:40～16:10) 参加された皆様からの質問に講師がお答えいたします。

主催: 熊本大学病院 感染症対応実践学寄附講座/新興感染症対策寄附講座
 ※感染症対応実践学寄附講座は熊本県、新興感染症対策寄附講座は熊本市の寄附により設置された寄附講座です。

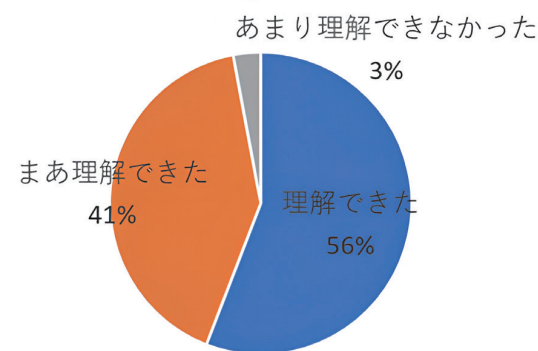
参加申し込み方法は裏面をご参照ください



配信動画URL

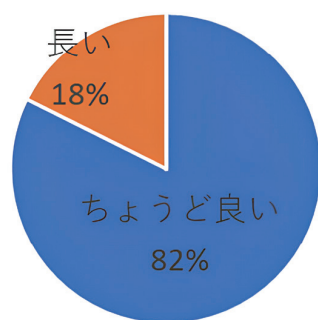
<https://www.youtube.com/watch?v=irb08bvdA9E>

セミナーの内容について



■ 理解できた ■ まあ理解できた ■ あまり理解できなかった

セミナーの開催時間



■ ちょうど良い ■ 長い ■ 短い

<意見・感想等>

- 阿蘇の医療の最新の進展の速さ。講演2では、変異株の種類の多さ。
- とても参考になりました。
- 大変興味深く拝聴させて頂きました。今後も継続して参加させて頂きたいと思います。
- 開催していただきありがとうございました。研修についてもwebで開催していただく方が参加しやすいと思います。
- 地域での体制構築と地方衛生研究所の話はどちらも興味深く拝聴いたしました。コロナの全体像をつかむには、この2つの講演については視点が異なるのですが、かえってよかったように思います。
- 先生方のお話は大変勉強になりました。明日からの感染管理に役立てたいと思います。
- 連携の重要性が強調されて良かったです。自分の地域でどうするか？は課題ですが。
- 病院や大学が必要性を説いて頂き、市民教育や行政を動かして頂けるとありがたいです。
- たいへん充実した内容だったと思います。コロナ禍の今後についての討論がほしいところででした。
- 今後、沢山の感染症が出るであろうことを講師の先生の話で身にしみて感じる事ができてよかった。
- 職場では、ワクチン接種をする人も少なく、高齢者に接する仕事なのに残念に思っています。
- 少し専門的に感じた。
- セミナーは、実際の病院での発生時の対応、課題、認定看護師の活用、情報共有等の事例が多かったもので、今後の事業所運営の参考になりました。また、質疑応答では、5類への移行後の影響、検査のタイミング、ワクチン接種や住民への発信の必要性等多くの知識を得ることが出来ました。
- 新型コロナウイルス感染症は、現在もこれからも続いていくことなので、感染症対策について幅広くお話しをお聞きできて良かったです。これから新しい感染症が出てきたときにも役に立つ内容だったと思います。
- 甲斐先生:ジョインというアプリを始め院内の感染対策に驚きました。阿蘇医療センターなら安心して働けると感じました。ぜひ他の病院や施設にその情報が伝わると良いと思いました。吉村先生:オミクロン株の変異株の同時進行の説明に興味深くお聞きしました。HPを拝見しましたが、その情報をすぐに見つけられませんでしたので、どこか分かりやすいところに掲載いただきたく希望しております。
- コロナ対応のようなこれまで我々が経験したことがない大きな課題への対応の際、特に初期対応の重要性、それからあまり報道されない地衛研などの対応、変異株対応など興味深かった。熊本地震への対応、5疾病、5事業への地域の拠点病院としての取組、工夫など大変参考になった。特に病院の災害に向けた準備の重要性を痛感しました。また、「情報共有」の重要性も改めて痛感しました。
- 人の医療体制については全くの素人なので、良い勉強になった。今後も企画があれば参加したい。
- 地域医療、二次医療における新型コロナウィルス感染対策への取組での課題やそれに対する県初のシステム導入があり、情報共有の方法や住民への教育、医療人の育成等多面的な進化があっていると感じた。
- 地域を守るために法律や組織の整備から市民講座での広報活動に至るまで様々な取組を実施するためにご尽力下さっていることに深く御礼申し上げます。感染症対策として情報共有が重要であることを理解することができました。
- 感染症への対応の難しさを感じました。情報公開の必要性も感じました。知り合いの高齢の感染者が救急車を呼んだものの30件の病院に拒否されたと聞いています。
- 地域医療、中央での取組がよく理解でき有意義なセミナーでした。
- 感染管理認定看護師の大きな働きなど専門分野のスペシャリストの育成が喫緊の課題であることがよく分かった。
- 院内のことだけでなく、地域でのお話が聞けて大変参考になりました。
- 質疑も含めリアルタイムな内容で興味深かった。
- 阿蘇医療センターの甲斐先生の取組、多岐にわたり、前向きなマインドにあふれていて大変参考になりました。
- 2講演共に大変素晴らしく多くの学びがありました。ありがとうございました。初回のセミナーの演者としてお二人は適任だったと思いました。

1. 熊本県地域医療支援機構(地域医療支援センター)

◆ 論文、執筆

- 森屋 淳子、後藤 理英子、柳元 伸太郎、富澤 康子、大谷 尚、
「フィンランドで働く女性医師の子育て期における就労継続の背景要因に関する質的研究」、
北ヨーロッパ研究、第 18 巻、39-49 頁、2022 年。
- 松本 朋樹、「認知症予防や BPSD で使える非薬物療法ありますか?」、medicina、vol60 No.2 2023-02.

◆ 研究

- 後藤 理英子（共同研究者）
「女性医師の就労継続・キャリア形成推進のための実証的提言：フィンランドとの比較研究」
研究種目：基盤研究 C、研究分野：社会関連学、研究期間：2019/4/1-2022/3/31
- 後藤 理英子
「日本の男性医師と女性医師のアカデミックキャリアの構築にはどのような違いがあるか。」
研究期間：2019/5/15-2024/3/31

◆ 学会発表

- 後藤 理英子、「熊本県における医師の男女共同参画推進のためのアンケート結果から見てきた働き方改革に向けて必要な研修医・指導医の在り方」、第 54 回日本医学教育学会大会、群馬、
2022/8/5-8/6.
- 松本 朋樹、「キャリア Caf」、第 13 回プライマリ・ケア連合学会学術集会、横浜、2022/06/11-12.

◆ 講演会・講師

- 後藤 理英子、第 164 回全自病協・国診協 臨床研修指導医講習会、2022/10/29-10/30、講習会、演者。
- 後藤 理英子、令和 3 年度九州大学病院医師臨床研修指導医講習会、2022/11/25-11/26、講習会、演者。
- 後藤 理英子、雲柱社合同研修会、2022/12/7、研修会、演者。
- 後藤 理英子、第 165 回全自病協・国診協 臨床研修指導医講習会、2022/12/17-12/18、講習会、演者。
- 後藤 理英子、「熊本県における医師の男女共同参画活動について」、令和 4 年度 医学生、研修医等をサポートするための会、2022/2/17、セミナー、演者。
- 後藤 理英子、「失敗は成功の基 未成功を重ねて強くなるレジリエンス」、賀川ハル研究会 第 5 回勉強会 研修会&講演会、2022/2/18、講習会、演者。
- 松本 朋樹、「私の履歴書～天草でのライフキャリア～」、株式会社 Antaa 離島医療会議、2022/7/2、オンライン、演者。
- 松本 朋樹、「これが噂の病院総合診療医」、第 34 回学生のための家庭医療夏期セミナー、2022/8/7、オンライン、講師。
- 松本 朋樹、「家庭医って面白い!」、NPO 団体 GlocaLand 第 8 回特別講演回、2022/8/30、オンライン、演者。
- 松本 朋樹、「家族を通して考える人生」、第 9 回九州家庭医療・総合診療セミナー、2022/10/1、オンライン、演者。
- 松本 朋樹、「令和のポリファーマシーと医療連携」、天草郡市薬剤師会講演会、2022/11/18、現地・オンライン、演者。
- 松本 朋樹、「日常臨床をアップデートせよ!～診療で使えるアプリケーション 10 選～」、第 11 回熊本大学総合診療セミナー、2022/11/22、オンライン、演者。
- 松本 朋樹、「PF 指導 3.0 Online Learning Community の夜明け」、第 18 回若手医師のための家庭医療学冬期セミナー、2023/2/4、オンライン、演者。

2. 地域医療・総合診療実践学寄附講座

◆ 論文、執筆

- Kiyoshi Shikino, Akira Kuriyama, Michito Sadohara, Takahiro Matsuo, Kazuya Nagasaki, Yoshito Nishimura, Saori Nonaka, Masashi Izumiya, Mitsuru Moriya, Yoichi Ohtake, Tetsuya Makiishi.
Work-related stress and coping methods of internists and primary care physicians during the COVID-19 pandemic in Japan: A mixed-method study. J Gen Fam Med. 2022;23(5):327-35.

◆ 研究

- 荒木 智
「トレハロースによる腸-脳-心連関の解明」
研究種目：基盤研究 C、研究分野：循環器、期間：2022/4/1-2024/3/31
- 佐土原 道人
「地域医療研修による研修医のレジリエンスの変化に関する質的研究」
研究期間：2018/8/20-2023/3/31
- 佐土原 道人
「働き方改革のためのホスピタリスト・システムの導入に対し、米国で働く日本人ホスピタリストはどのような見方をしているか?」
研究期間：2018/9/20-2023/3/31
- 佐土原 道人
「地域医療研修による研修医のレジリエンスの変化に関するアンケート調査」
研究期間：2020/3/19-2023/3/31
- 佐土原 道人(研究開発分担者)
「日本医療研究開発機構 研究公正高度化モデル開発支援事業 医療分野の『責任ある研究・イノベーション(RRI)』推進に資する取り組み」
研究期間：2022/12/1-2025/3/31

◆ 学会発表

- 長崎 一哉, 泉谷 昌志, 大武 陽一, 川嶋 乃里子, 栗山 明, 佐土原 道人, 鋪野 紀好, 西村 義人, 野中 沙織, 松尾 貴公, 森谷 満, 山本 典子, 牧石 徹也, 「よりよい医師人生のための、ワーク・エンゲージメントの高め方」、ACP(米国内科学会)日本支部年次総会・講演会2022、2022/6/25-6/26、オンライン・セミナー。
- 佐土原 道人, 「30年経って診断確定した原発性腸リンパ管拡張症による蛋白漏出性胃腸症の一例」、第 25回 日本病院総合診療医学会学術総会、2022/8/19-8/20、口演、オンライン。

◆ 講演会・講師

- 荒木 智, 「球磨郡における循環器診療の現状について」、球磨郡病診連携Webセミナー、2022/8/5、講師。
- 佐土原 道人, 「医師のウェルビーイングとバーンアウト防止のためのセルフケア」、ACP(米国内科学会)日本支部秋季セミナー、2022/10/30、WEBセミナー。
- 佐土原 道人, 第27回徳洲会グループ指導医養成講習会、2022/10/22-10/23、指導医講習会タスクフォース。
- 佐土原道人, 第21回熊本大学病院群臨床研修指導医研修ワークショップ、2022/12/2-12/3、指導医講習会タスクフォース。
- 佐土原 道人, 2022年度 全日本病院協会 臨床研修指導医講習会、2023/1/29,2023/2/19、指導医講習会タスクフォース。
- 佐土原 道人, 第28回徳洲会グループ指導医養成講習会、2023/2/25-2/26、指導医講習会タスクフォース。
- 佐土原 道人, 2022年度第1回看護師特定行為研修指導者講習会、2022/9/23、看護師特定行為研修指導者講習会タスクフォース。

- 佐土原 道人, 2022年度第4回看護師特定行為研修指導者講習会, 2022/11/20, 看護師特定行為研修指導者講習会タスクフォース.
- 佐土原 道人,「臨床推論演習」, 熊本大学病院 看護師特定行為研修 演習, 2022/6/22,6/27,6/29, 演習講師.
- 佐土原 道人,「フィジカル・アセスメント実習」, 熊本保健科学大学 認定看護師教育課程 フィジカル・アセスメント実習, 2022/8/24, 非常勤講師.
- 佐土原 道人,「プライマリケア看護学演習」, 佐久大学大学院看護学研究科 プライマリケア看護演習, 2022/1/89-19, 非常勤講師.

3. 教育拠点(くまもと県北／河浦)

◆ 論文、執筆

- 小山耕太, 溝部孝則, 松田浩史, 佐藤彰洋, 安成英文, 岡本真哉, 佐々木浩, 藏原隆浩, 浦田誓夫, 田宮貞宏,「コロナ禍における地域中核病院と郡市医師会の病診連携」, 日本病院総合診療医学会雑誌(Web), 18 (4) 2022 年 .
- Oyama K, Nagata K, Streptococcus pneumoniae Meningitis during Hepatitis B Medication, Journal of Hospital General Medicine, 2023 : 5-1.

◆ 学会発表

- 中村 孝典,「コロナ渦において多職種カンファを通じて訪問診療と連携することで癌終末期患者の一時的帰宅を達成した例」, JPCA 九州支部会, 熊本市, 2023/2/11、2/12, Web.

4. 総合診療科医局員・専攻医(総合診療専門研修プログラム)

◆ 論文、執筆

- Madoka Hiraga , Michito Sadohara , Kunihiro Matsui, Inverse Gottron’s Sign in a Patient with Dermatomyositis, Internal Medicine, 2023 Mar 31.

◆ 講演会・講師

- 松田 圭史,「地域医療の現場から」, 令和 4 年度熊本県地域医療支援機構講演会, 熊本市, 2023/1/20, 現地、ハイブリッド .

◆ 学会発表

- 久保崎 順子,「βラクタム系抗菌薬が無効の腸炎の再評価で診断に至った日本紅斑熱」, 第 28 回 国立病院機構熊本医療センター医学会, 熊本市, 2023/1/21、1/22, 講演 .



おわりに

1. 教員から

■ 荒木 智 特任准教授

2004年に熊本大学を卒業後、主に循環器内科を専門とし診療を行ってまいりました。2022年4月に球磨郡公立多良木病院に赴任し常勤医師がいなかった循環器内科の立ち上げに携わったのち、2022年10月より地域医療・総合診療実践学寄附講座の特任准教授を拝命し、地域医療支援センターの副センター長も兼任させていただいております。

球磨郡公立多良木病院では人生で初めてへき地診療所での診療にも携わり、高齢化率が全国平均の20年先を行く地域での医療ニーズや全人的医療の必要について改めて学ぶことができました。また新型コロナウイルス感染症の猛威も落ち着きつつある状況ですが、地域の基幹病院が受ける負担と限られた医療資源の有効活用の重要性について身をもって体感することができました。

地域医療・総合診療実践学寄附講座に赴任し半年が経過しましたが、地域を支える総合診療医の育成、修学資金貸与制度の運営・実施、地域医療機関への診療支援等の業務遂行について、理解し実践するスタートラインにやっと立てた状況です。

医師となり19年が経過しますが、総合診療医としての新たな学びができる幸せをかみしめつつ、来年度は医師修学資金貸与制度のキャリア形成支援等の業務に取り組んで参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

■ 佐土原 道人 特任助教

診療支援先は、今年度から小国公立病院と阿蘇医療センターでお世話になっています。様々な病院から実習、研修に来ている学生や研修医からよい刺激を受けております。阿蘇へはミルクロードを経由していた頃と比べ、57号線、北側復旧ルートが開通し、時間的にも距離的にもアクセスがかなり良くなりました。震災からの復興を感じます。

今年度は、総合診療の専攻医の修了者が1名、来年度は2名の専攻医の先生方が、我々の総合診療プログラムに加わり、各連携施設で専門研修をお願いすることになりますので、よろしくご指導をお願いします。

競争的獲得資金は、兵庫医科大学の臨床疫学からのお声かけでAMEDの研究開発事業の研究協力者としてお手伝いさせていただくことになりました。学術活動では、米国内科学会日本支部のメンバーとは、医師のバーンアウトの調査を継続、来年度にバーンアウトのテキストも出版される予定です。コロナ禍で激減した授業や臨床研修指導医講習会や看護師特定行為指導者講習会など対面での実施も復活しつつあります。学会は、来年度米国総合診療医学会で演題発表の予定です。秋のシドニーでの世界家庭医機構にも演題提出しました。こういった活動もウィズ／ポストコロナ時代へと移っていくことが期待できます。今後ともよろしくお願いいたします。

■ 後藤 理英子 特任助教

2016年度から約8年間、熊本県女性医師キャリア支援センターの活動を支えてくださったすべての方に深く感謝いたします。この8年で様々な医療機関にご協力いただき、ご理解いただき、女性医師が働き続けることができる環境が整ってまいりました。また、少しずつではありますが、男性医師が育児休業を取得し、家庭参画することができるようになってきました。多様性に富む医師が、多様性に富む患者様に寄り添い、よりよい医療を提供できる、そんな医療環境を整えていけたらと思って活動を続けてまいりました。

今後の課題点としては、当直業務に復帰してくださる医師をどう支援し増やすかという点、そして、医療の世界で女性の管理職を増やすという点が挙げられます。同性のロールモデルから学び得るものは大きいことが知られていますが、残念ながら若手の女性医師や女子学生が同性のロールモデルに出会う機会は現在のところ男性に比べて多いとは言えない状況です。

今後ともこの活動に対し、深い理解とご支援をいただきますよう、お願い申し上げます。

■ 高柳 宏史 特任助教

今年度一番大きな仕事は、日本プライマリ・ケア連合学会第17回九州支部総会・学術大会(熊本大会)で実行委員を担ったことでしょうか。2021年の段階から委員会は立ち上げていましたが、コロナ禍の中でどのように学会を開催するのか世の中の動向をモニターしながらの判断でした。様々な課題もありましたがハイブリットで無事に開催でき、盛会に終わったので本当に安堵しました。

今年も教育医長として務めさせていただきました。2022年の総合診療学の講義からは、家庭医療学に関する講義を2コマ設けました。これも私の中では大きなことでした。まだまだ新しい枠組みでの講義でしたので、これからさらに刷新し、本当に学びのある講義にブラッシュアップしていきたいと思います。

また地域枠の学生の卒前の取り組みとして、毎月開催している「地域医療ゼミ」も今年はいろんな企画が盛りだくさんでした。4月のオリエンテーションから始まり、5月の熊大医学生の企画、6月には「ささえあい医療人権センター COML」理事長の山口育子さんにご講演をいただきました。12月には、熊本出身の自治医科大学生による自治医企画をしました。これらの企画を学生と話し合いながら進めていくのも私にとってはかけがえのない経験です。

専攻医教育にも関わりました。大学の総合診療専門研修プログラムに在籍している専攻医の教育・指導としては、年に4-5回開催する「レジデントデイ」を企画しました。

診療としては大学の救急外来を2コマ、総合診療の外来を1コマ、診療支援としては天草市立御所浦診療所と今年度から上天草市立上天草総合病院でそれぞれ外来やら救急外来やらを2コマずつ担当していました。御所浦も上天草総合病院も往復で4時間移動にとられるため(御所浦は船での移動を含みます)、毎週日帰りでの支援は体にこたえます。

学会活動では、日本プライマリ・ケア連合学会の診療データベース委員会に所属しており、WONCA Working PartyであるThe WONCA International Classification Committee (WICC)に参画しました。

また新年度はどのような活動をするかわかりませんが、引き続きよろしくお願い致します。

■ 北村 泰斗 特任助教

令和4年度は、熊大総診が、ホームページやプロモーション動画の作製・配信することによって、全国の学生や初期研修医の皆さんが総合診療科っていいな、熊大総診に入りたいなと思ってもらえることをプライマリアウトカムとしてやってまいりました。動画は完成し、ホームページについては現在、鋭意作製中です。来年、これらをみて来たよって言ってくれる研修医の先生がいたらいいなと願っています。これらの活動を通して、個人的にも総合診療科について今まで以上に興味と関心をもった1年となり、改めて総合診療医っていいなと思っています。自分のこれまでの総合診療科としての活動(地域医療・診療・研究・教育)を客観的に振り返る機会にもなり、現時点での個人としての興味や関心がとのあたりにあるのか少し整理できたように思います。研究にも活かしていければと考えています。

ひきつづき、総合診療、地域医療を自分でも楽しみつつ、若い皆さんにも面白みが伝わるようコミットしたいと思います。今後ともご支援ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

■ 中村 孝典 特任助教(県北教育拠点／くまもと県北病院 総合診療科)

令和4年度は、熊本大学病院地域医療・総合診療実践学寄附講座の特任助教としてくまもと県北病院教育拠点に赴任し、臨床業務および卒前卒後教育を行いました。また社会人大学院生として研究活動も開始しました。

自身の臨床業務だけでなく、学生、初期研修医、後期研修医の教育業務についても今まで以上に時間を割くことで新たな発見もあり、自分としても新たな発見がありました。後期研修医に対する教育では、ワークライフバランスを考えるいい機会となりました。

プライベートなことでは7月に第3子が誕生して、それぞれ2学年違いで3人の子供をもつことになりました。出産だけでなく、育児に際して急な休みをとることが増えたため、その都度まわりのスタッフにはかなり助けていただきました。

研究活動については、なかなか研究テーマが決まらずに取り掛かりまで時間がかかってしまい思うように進まず次年度への課題となりました。

子供も増え、仕事や研究活動も行うとなると公私ともに時間の使い方が今後のテーマになってくると

思います。臨床のレベルを落とさないという大前提のうえで、学生、初期研修医、後期研修医のモチベーションを上げ続ける指導を目標に次年度も頑張りたいと思います。

■ 鶴田 真三 特任助教(河浦教育拠点／天草市立河浦病院 総合診療科)

河浦病院に赴任して2年目となりました。コロナ禍のため診療の上で特に大変な時期があったり、院外活動の制限などで地域活動や教育活動がやりにくかったりも多々ありましたが、できることを行いながら無事に過ごして来れました。レジデントも一名が通年で在籍し、学習者のペースに合ったオーダーメイドの教育を行えていると思います。

個人的には、若いころから興味があったHANDSに推薦いただき、九州版のK-HANDSに参加し、久しぶりにどっぷりと学習者として学びの時間を作るいい機会になりました。これも今後の教育や組織運営など様々な活動に生かしていきたいと思います。

学生実習については、へき地における生の地域医療を実感してもらい、やりがいを感じてもらえるように考えてプログラムを作っています。次年度からはさらに地域で医療を行うことの楽しさ、充実感を感じられるよう、他施設と連携して院外活動を増やして取り組んでいこうと考えています。

後期研修についても、レジデントの入れ替えなどもあるため、それぞれのニーズや将来像にあわせて組んでいく予定です。院内での診療だけでなく、地域の多職種や住民との対話や勉強会、院内活動や地域活動の企画の計画、乳幼児健診や学校医活動なども行えるよう計画しています。

次年度もよろしくお願いいたします。

■ 田宮 貞弘 県北教育拠点指導医(くまもと県北病院 院長／総合診療科)

令和4年度も目まぐるしく過ぎていきました。病院の通常機能を最低限維持するために、全てを費やしたイメージがあります。

現在の社会やビジネス環境をVolatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguityの頭文字をとってVUCAと呼ぶそうですが、令和4年の私の置かれた環境はまさにVUCAでしたし、今後もこの状態は続くものだと思います。

この一番の要因は新型コロナウイルスの蔓延でしたが、コロナ禍をどうにか耐えていくという経験は良いレッスンになったとも思っています。モデル化が困難な複雑で変動していく環境では、ゴール指向で目的を共有しつつもプロセスには拘らず、場合によっては朝令暮改もお互い許容するスタンスが重要であることを知ることができたからです。

くまもと県北病院のレジリエンスの中心には総合診療科のスタッフがいます彼らは“有事”に派生する業務も“他人事”とせず取り組む姿勢を絶えず示してくれています。私はこれに甘えるばかりでなく、微力ながら彼らがVUCAの中でもやりがいや幸福を感じられる環境を整備していきたいと思っています。

■ 小山 耕太 非常勤講師(くまもと県北病院 総合診療科部長／総合診療科)

「次のステップ(続)」

熊本大学に帰還して10年目、教育拠点に赴任して9年目に突入しました。

コロナ禍で、ワクチンと治療薬の開発のお陰で死亡リスクが大幅に減少し、医療機関内を除く多くの社会がコロナ禍以前の生活を取り戻しつつあるこの頃です。くまもと県北病院も、院内のコロナ感染拡大リスクを低減すべく、試行錯誤の毎日ですが、社会のコロナ後にも順応し、診療体制も順次調整が求められています。その様な中、教育拠点としての総合診療科は、コロナ前と変わらぬ教育への情熱を持ち続け、当院も教育病院として多くの医学生・研修医からの支持を、フルマッチ形で目に見える形で発展を見せております。これも、田宮院長の新体制の賜物と、喜ばしく思います。

私個人としては、国内学会誌に2報の論文を投稿し、教育拠点の次のステップに向けて弾みをつけたいと考えております。更には、教育拠点で研鑽を積んだ人材が、大学院での研究分野にもコミットし、業績を上げるフェーズに入ったと実感するこの頃です。松井先生を中心に、新しく循環器内科から荒木先生をお迎えし、更に研究分野での発展が期待されます。また、現在の地域枠医師の1期生が、義務年限最終年度を迎え、このタイミングで私が熊本県庁医療政策課に兼任の形で着任することとなり、自治医大の学生や先生方にも診療指導・教育、キャリア支援を実践することとなりました。これまでの玉名、有

明地域での診療、教育経験を活かし、これからは熊本県全土に応用し我々の講座の更なる発展のための足掛かりになればと、身の引き締まる思いです。

今年度は、新しいステップを踏み、組織としての飛躍のため、常に前向きに活動を行っていきたいと思いますので、引き続き、皆様のご指導とご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

ゆっくりだけど、確実に前進

■ 古賀 義規 客員研究員（御所浦診療所 所長）

御所浦診療所は熊本県内で離島医療を経験できる数少ない診療所の1つで、総合診療科医師2名による常勤体制となっています。

COVID-19感染症流行のため、R4年度も多くのイベントが影響を受けました。クリクラ等の医学生実習は受け入れることができましたが、予定されていた天草圏域での医学生夏季実習は、R3年度に引き続きR4年度も結局中止となってしまいました。

新しく建て替えられた診療所での診療は1年余りが経過しましたが、研修医や医学生のための宿泊施設も併設されており、利用者の感想によれば、快適に利用して頂いているようです。

R5年度はCOVID-19感染症流行を乗り越え、天草圏域での連携強化に加え、従来目指していた県内へき地公的診療所間の緩やかな連携構築にむけ、活動を活性化させたいと思っています。また教育面では多くの医学生や研修医に離島・へき地での地域医療に理解を深めてもらい、地域医療・家庭医療にやりがいをもって取り組める人材育成の一助になりたいと思います。

■ 片岡 恵一郎 客員研究員（小国公立病院 病院事業管理者）

2018年度より、松井教授のご厚意により客員研究員として、小国公立病院に勤務しながら、地域医療支援センターに出入りさせていただいており、2022年度が5年目となりました。

2021年度より、小国公立病院の事業管理者となり、病院の管理・運営業務が増え、地域の病院の未来を担うという事の責任の重さを実感しているところです。特に、2022年度は地域医療構想会議で、小国公立病院の再編・統合についての議論も最終局面を迎え、小国公立病院の阿蘇医療圏域内での役割をしっかりと再定義し、現在の病院の積極的存続に阿蘇圏域満場一致で合意していただくことができました。

2022年度も新型コロナウイルスの感染波が何度も押し寄せ、熊大の地域医療支援センターに足を運ぶ回数が少なくなりましたが、昨年から準備していたオンライン診療車の導入が、国のデジタル田園都市国家構想の事業に採択され、2023年度小国公立病院で「小国郷医療MaaS/DX推進事業」として取り組む事になりました。少子高齢化の進んだ医療資源の少ない地方での課題解決の為の強力なツールとして大きな期待をもっております。こちらに関しては、熊本大学に力強いバックアップを頂きながら準備を進めているところです。導入後は、地域医療の実習・研修にも良い素材を提供できるものと考えております。

熊本大学からの地域医療支援は、地方にとって本当に貴重なもので、今年度も多大なるマンパワーを小国の医療現場に送っていただきました。

2023年度も、引き続いての厚いご支援に対してご恩返しができる様、客員研究員としてできる事を微力ながら務めさせていただきたいと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。

■ 松本 朋樹 客員研究員（松本内科・眼科 理事長）

天草から、松本内科眼科の松本朋樹です。天草地域医療センターでの勤務の後、客員研究員の肩書を拝命し、両親のクリニックを継承しつつ、リクルートを中心に大学でのプロジェクトに関わらせていただいております。

天草は、熊本県の中でも医師確保が困難な地域であるため、医師修学資金制度の対象病院が数多くあります。学会のアンケートでも、へき地研修の不安点として、都市部へのアクセスの不便さや教育・指導体制への不安が大きいことが示されています。一方で、天草で働いてみて、これほど総合診療を実践できる環境は無いということを実感しています。医師の偏在は大きな課題の一つとなっていますが、総合診療はそれを解決する鍵となる診療科であると確信しており、卒前・卒後教育を通した総合診療の啓蒙は大きな意味を持っていると考えます。先生方のお力添えのお陰で、総合診療セミナーも第11回を迎え、

参加人数は毎回50人を超えるオンライン勉強会へと成長しました。情報の届け方や学び方は年々新しく進化しています。へき地でも新しい学び方、働き方が出来ると発信していくことが、へき地で働く医師が増えることに繋がると信じて、これからもコツコツと続けていければと思います。本年度も大変お世話になりました。

■ 武末 真希子 医師（総合診療科医局員）

今年度も引き続き診療所で勤務しながら、研究日を増やして大学院での研究も進めました。診療所では2年目になりできることも増え、都市型のプライマリケアをどう提供していくのか、今後に生かせるよう学んでいます。

大学院も2年目になり、研究は多くの壁に突き当たりながら、かなりゆっくりなペースですが少しずつ前進させている状況です。次年度は結果が出せるように、地道に努力を続けていきたいと考えています。困った時に相談や知恵を共有できるような人とのつながりも重要だと感じています。コロナもやや落ち着いてきており、学会参加など人とのつながり作りや新しい視野の獲得も積極的に行っていきたいと思っています。プライベートでも色々なことがあり、前途多難ですが、4月からも前向きに励みます。

■ 松田 圭史 医師（総合診療科医局員）

今年度は熊本大学病院での勤務となりましたが、地域の病院とはまた違った視点で、地域医療や総合診療を学ぶことができました。地域を深く診るということも大切ですが、熊本県全体を広く診るということの重要性も改めて感じました。大学病院での診療はより難しい症例が多く、文献を調べたりカンファレンスで議論することで、新たな知見を得ることもできました。

また、総合診療科の先輩・後輩と関わる機会も多くありましたが、診療だけでなく研究や教育、学会発表、執筆など様々な分野で活躍されているのを目の当たりにし、とても刺激を受けました。

今後も熊本の地域医療、総合診療に関わっていくことになるかと思いますが、地域で学んだこと、大学で学んだことを活かしながら、広い視野を持って自分にできることをしっかりとやっていきたいと思っています。今後とも宜しくお願いします。

■ 空田 健一 医師（総合診療科医局員）

今年度は湯島勤務となりました。湯島は有明海に浮かぶ離島で人口約220人、高齢化率は約60%です。もうすぐ高齢化率は下降に転じると思われます。大根や鯛などの特産品、美しい自然があり、多くのネコに癒されるなど魅力的な島です。島には濃い人間関係、独自の風習や価値観があります。時間がゆるやかに流れています。老衰の進行や認知機能の低下を認めても住み慣れた島で過ごしたいという住民は多いです。

ところで、コロナに罹患すれば高速の伝言ゲームで、島民みんなが、誰が罹患したのかを把握します。プライバシーのない環境を楽しめる住民だけではないので、少なからずストレスの原因になっています。娯楽が少ないこともあり、テレビをよく見ておられますが、いろいろと不安をあおられています。不安は、健診であられることも多く、これはやめていただきたいです。

島では、ストレスからの生活習慣病、不眠、不安等の症状を認めており、診療所では、ストレスマネジメントに注力しました。人を動かすためには、相手の間違いを指摘してはいけないこと、自分の考えを相手におしつけてはいけないこと等を伝えました。セルフケアの方法についても、個別によさそうなものをお伝えしました。その他いろいろ取り組んだ結果、外来で訴えられる症状が、かなり減りました。

なお、ネコについては、最近増えてきて、地域おこし協力隊が避妊を行っているようです。ほとんどが野良猫で、アレルギー等の原因になっているように感じます。

引き続き湯島での勤務となります。今後ともご指導いただきたく、よろしくお願い申し上げます。

■ 平賀 円 医師（総合診療科医局員）

令和2年～3年度は球磨郡公立多良木病院で2年間の勤務を行いました。地域の中小病院での総合診療医としての働きに慣れてきた頃でしたが、義務年限もあるため、R4年度からは阿蘇医療センターに移りました。新たな土地での挑戦でしたが、外来・病棟・救急・診療所・施設往診など総合診療科として幅広く

2. 事務から

松岡 大智
地域医療支援
コーディネーター

もう30年以上も前になりますが、私は県内の遠方の地域に2人の小さな子供を抱えて家族で暮らしていました。当時、生まれたばかりの下の子は病気がちで、しょっちゅう地域の総合病院の小児科にお世話になっていました。夜中に高熱を出し、あわてて病院に連れて行ったことが何度もありました。そして、いつも小児科の若い先生が「また来たね」と言いながら、笑顔で診察していただきました。若い私たち夫婦にとって、本当に心強い存在だったと思います。

今、大学病院で地域の医療を支えるお手伝いをしている私ですが、そのころのことを思い出し、かつての自分の身の幸運をかみしめています。子育て中の私たちにとって、子供が熱を出したとき、あの先生が診てくれる、その安心感と、治してもらったときの安堵感は、ささやかでも当時の私たちのにとって最大の幸福だったように思います。

今もきっとどこかに当時の私たちのような若いお父さんお母さんがおられることでしょう。また、高齢者を抱えたご家族もいらっしゃると思います。どこの地域にいても、いつでも安心してお医者さんに診てもらえる、そんな社会であり続けられるために、自分に何ができるか考え、微力ながら地域医療を支えていきたい、そんな思いを巡らせています。

若杉 秀作
地域医療支援
コーディネーター

令和2年から令和4年と3年間の長期にわたり、社会がコロナ感性症の影響により、人物の流れが大きく制限されることとなり、このことは、私どもが展開する事業においても少なからず影響を受けることとなりました。

さて、さて、令和5年はいかに。

コロナ感染症には意識しつつも、社会、経済を活性化させるべく国の対応も緩和される状況にある中、私どものやるべき事業も計画どおり実施していける5年度であってほしいと期待しています。やるべき事業計画の中でも、学生等を対象として夏季特別実習は是非とも実施していきたい事業の一つであります。

学生の皆さんが夏季特別実習を体験することで、地域医療という課題に対し認識を深め、医師として地域医療への貢献しようとする意識づけにもなりえると確信しているからです。

熊本県では、医師が不足する地域の病院等に医師として勤務しようとする医学部生に対し修学資金を貸与し、県内の地域医療を担う医師を養成するということで、「熊本県医師修学資金貸与制度」が平成21年度に創設され今日にいたり、私ども熊本県地域医療支援機構は、本貸与制度による、医学部生、医師に対しきめ細かな支援を継続して取り組んでいかなければならないと考えております。

看護師の経験しがなく、女性医師の支援や事務業務については知識も経験もない状態でしたが、先生方や事務の方々、県庁の方々に色々教えていただきながらこれまでやってこられました。

「もう一度臨床へ支援事業」を始めるという事で、採用していただき、後藤先生と一緒に復職に関する様々な活動を行ってきました。学生講義でのキャリア形成や男女共同参画の取り組みのお話はとても勉強になりました。女性医師の相談業務や意見交換会で聞く悩みは私自身が抱えていた問題と同じで、後藤先生がアドバイスされているお話を聞きながら自分自身も救われていたように感じます。このような支援の場は、育児をしながら仕事を継続している人の心のよりどころであり必要な取り組みだと感じます。今後も悩める医師の相談の場として活躍を期待しています。

看護師として臨床の場で働き続けていれば出会う事のなかった人たちと沢山出会い、夏季実習等を通して医学部生の教育にも参加し、医療というものを多方面から見る事ができました。とても学びの多い6年間でした。

今後はまた臨床に戻り地域医療に貢献していきたいと思います。皆様本当にありがとうございました。

山口 香
事務補佐員

今年度の上半期は事務スタッフの入れ替わりの関係もあり、今まで以上に多忙な日々を過ごしました。こちらに来て5年目になりますが、初めて担当する業務等を多く抱え、新しい発見があったり、自己嫌悪に陥ったり、体調を崩したりと、心身ともにとても慌ただしかったように思います。そのような中で、先生方やコーディネーターの方をはじめ、多くの方に助けて頂きながら、何とか乗り切ることが出来ました。この場をお借りして、感謝申し上げます。

今年度の業務としては、引き続き新型コロナウイルスに振り回された1年となりました。ただ、3年目ともなると、この対面等で行事が出来ないという普通ではないはずの日常が、私自身、普通に思えてきていることに気づき、心配になった1年でした。

しかし、ようやく世の中が本格的に“脱コロナ”に向かいつつあります。やっとゼミや講演会も対面での開催が少しずつ可能になっているように思います。オンラインでの利点も数多くありますが、やはり相手の顔を見て会話を交わすことで、親しみや人と人との繋がりを感ずることが出来る気がします。来年度は3年前の感覚を取り戻しながら、自分自身、気を引き締めて残りの任期を大切に過ごしたいと思います。

尾方 千穂
事務補佐員

日本で最初に新型コロナ患者が報告されてから、3年経過しました。多くの「感染の波」を経験しながら、様々な制限の中で業務を行いました。私が担当した『地域医療ゼミ』の一環、夏季実習は、2年ぶりに再開出来ると着々と準備を進めていました。

しかし、開催目前で感染が拡大し、中止を余儀なくされました。指導に熱心な先生方の肩を落とす姿が印象に残っています。

この様な中、少しでも、現場の声を届けたいと9月、10月に知事指定病院等説明会をオンラインにて行いました。説明会の動画をホームページに掲載し、多くの人に伝えればと願っております。

また、同じくゼミで医師・医学生と共にトリアージをテーマのドラマを見た事は、とても印象に残っています。災害時の医療トリアージの内容は、架空のストーリーとは認識しながらも忘れていた熊本地震の恐怖がよみがえりました。

そんな中、実際に医療の現場に立つ方々と意見を交えながらの視聴は、貴重な時間となりました。

機構の業務に携わり、多くの経験と機会を与えて下さった多くの方々に感謝申し上げます。

山並 美緒
事務補佐員

今年度10月から、またこちらでお世話になることになりました。半年間10～50代の方々と接しました。病院・大学・地域医療・総合診療から一旦離れてみて、見えたことを記したいと思います。

まず、新型コロナウイルスの捉え方。医療に関わらない社会、特に若者の間ではコロナは既に恐るるに足りないものとなっていました。いつかかかるもの、かかっても平気で問題ないという感覚にびっくりしたことを覚えています。

次に、働き方が多様化していたこと。民間企業ではリモートワークが当たり前でフレキシブルな勤務が可能などところが多く見受けられました。小さなお子さんの育児や親の介護など家庭の事情で働き方が制限されている方にも働けるチャンスが広がった社会に変わったなと実感しました。

そして、まだ世間には「総合診療」というものが浸透していないこと。地域医療はなんとなく分かるが、総合診療科って何を診るの？と何度か聞かれました。いまだに臓器別の診療科の認知が多く、何科を受診すべきか分からなくてもみんなあまり困っていないというのが私の印象です。

結論としては、社会的に働きやすくなったが、医療や福祉への問題意識は低いということでしょうか。もっと一般の方へも地域医療・総合診療の必要性をPRして、世論を動かしていくことも必要かもしれないと感じました。

そういう心構えでこれからも努めてまいりたいと思います。よろしく願いいたします。

3. あとがき

令和4年度もCOVID-19感染症が猛威を振るい、熊本県でも一時は1日あたり6000名以上の感染者が報告されました。重症化率は低下したものの、地域の医療機関に与える影響は依然として大きいものでありました。幸い本報告書作成時には感染者数も減少しておりこのまま落ち着いてくれればと心より願っております。

さて、令和4年度の活動報告をさせていただきましたが、地域医療支援センターは設立9年目となりました。COVID-19感染症の状況を鑑み、残念ながら「夏季地域医療特別実習」は本年度も実施することができませんでした。本実習は自ら地域に赴くことで地域の問題点を知り、地域医療に取り組む意欲を醸成する貴重な機会ではありますが、令和元年に実施した上球磨地域での実習を最後に3年連続で中止となってしまうしました。一方、年度後半では熊本大学医学部医学科の授業も対面で実施できるようになり、地域枠学生に対して行っている「地域医療ゼミ」も対面開催が実現しました。顔を合わせてコミュニケーションをとることで学年間の縦のつながりがより強固になった印象です。また令和5年度の地域枠入学者は8名となっており、熊本県で活躍される方々が確実に増加している状況です。また修学資金貸与医師の中には来年度が義務年限の最終年度になる先生もおられます。今後も修学資金貸与生の皆様のキャリア形成をさらに充実させるべく方策を進めてまいります。

また本機構の広報誌である「COCODE！」もvol.4およびvol.5を発行しました。来年度は私も編集委員に加わり、さらに熊本県内の地域医療の魅力をお伝えできる務めてまいります。

最後に本年度は馬場秀夫機構理事長を始め、熊本大学のスタッフの皆様、熊本県医療政策課の皆様には多くのご指導・ご支援を賜りましたこと深く御礼申し上げます。また来年度も変わらぬご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

熊本大学病院
地域医療・総合診療実践学寄附講座
地域医療支援センター
荒木 智

熊本県地域医療支援機構／熊本大学病院 地域医療支援センター

〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1-1-1
Tel: 096-373-5627 Fax: 096-373-5796
E-mail: chiiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp
HP: <http://www.chiiki-iryo-kumamoto.org/>



熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座

〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1-1-1
Tel: 096-373-5794 Fax: 096-373-5796
E-mail: chiiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp
HP: <http://www.chiiki-iryo-kumamoto.org/dcfgm/>

